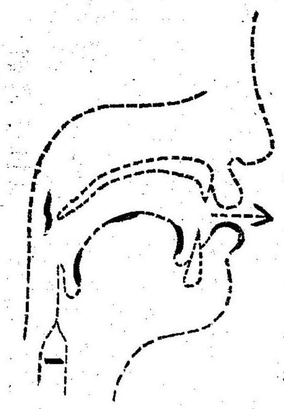
なる。そこで『後高圓』の符號でこれを示す。而して『オ』母音は舌が後部に高まるけれども、『ウ』に比べるとやゝ中部に低まるのである、なほ口の形は圓くなる故、これを『後中圓』の符號で示したのである。かくてベル氏はこの理を推して、三十六種の母音をこの文字で作つたけれども、日本國語をうつすには僅にその中の五種で足りるのである。

而して又ベルは子音の文字を作るに更に巧妙な工夫をしたのである。即ち第四十三圖に示したやうに、まづ舌全體を丸いものと考へて、舌頭音(舌の前部で出る

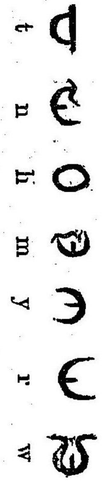
第四十三圖　視話法の子音字原



唇音
舌頭音
舌上音
舌根音
聲帶
閉音
開音
摩擦音
鼻音

音。タ・テ・トの如き音)舌上音(舌の中部で出る音。ヤユヨの如き音)舌根音(舌の後部で出る音。カ・キ・ク・ケ・コの如き音)の三種をば、各舌の位置に象つて半圓形に作り、これに開音(口を開いて出す音)に對して閉音(また密閉音)ともいふ。唇を閉ぢて後發する音、即ちバ・ビ・マの如き音)を示すに、直線を描いてその閉音のさまを示すのである。又摩擦音(舌の上より摩擦して出す音。サ・シ・ス・セソの如き音)をト字形で示し、而して濁音になるのは聲帶を振動させるのである故、聲帶の符號として棒を用ひ、而してまた鼻音を示すには、舊來羅馬字の上に鼻音の符號として用ひてゐた波狀の符號をば、そのまゝ用ひ、かくてすべての子音をこの簡單な符號で、悉くあらはさうと企てたのである。即ちベル氏が作りあげた驚くべき子音は、實に左の如きものである。

第四十四圖　視話法の子音文字



k　s　sh　t　n　m　y　r　w

そこで以上の母音とこの文字とあれば、どんな語でも綴ることが出來る。例へば「高橋龍雄著世界文字學」といふ『ことば』をベル氏のヴィジブルスピーチで綴ると、左のとほりになる。

この視話法用文字は、かくばかり聲音學の基礎によつて作られたものである故、啞者はまづ鏡に對し自分の口や舌のありさまを見て、この文字と對照して遂に言語を發聲するやうになるのである。それ故泰西でも一時この文字が言語學上聲音學上最も完全なものとして使用された。英の言語學者スヴィート (Henry Sweet) の如きも、その著『聲音學初歩』にはこのベルの文字を用ひて書いたが、後になつてそ

の書き方の不便な所から、これをやめて羅馬字にした。即ち後の著『大聲音學』にはこの文字を用ふることをやめたのである。伊澤修二氏はなほこの文字で、日本の方言訛音を匡正しようとて、嘗て『視話法』および『視話應用國語發音指南』の二書を公にせられ、又各所でその傳習をせられた。余も往年先生についてその傳習を受けたことがある。しかし啞者ならば他に據るべきものがない故、是非ともこの文字に據らねばならぬけれど、耳のきこえる我々にとつては、この文字は甚だ不便である。即ちその悉くを羅馬字に書き代へても、更に差支がない故、別に新しくこの文字を覺える勞をとらないでも、聲音學は十分修められることを感じた。又伊澤氏はこの文字で吃音をなほすことを致されてゐるが、敢てこの文字に據らないでも、啞者でない限は、羅馬字でも出來ようと思はれる。ましてこの視話法用文字を日本の國字としようといふことなどは、思ひもよらぬことである。何となれば、この文字は聲音學的にうまく出來てゐるけれども、書き方が非常に面倒である、これを草書に書いては更にわけがわからなくなる。是非ともこの楷書で書かねばならぬとすると、甚だ面倒である。それ故一般のものには用のない文字であるとい

はねばならぬ。しかし啞教育には實に最貴最重の文字であつて、恐らくは世界のあらん限り、この文字は啞教育の上に一大效果を收めるものとして、永々〳〵使用されることであらう。即ち特殊用の文字としては、嘗て發明されたものゝ中で、最も尊い文字であるといはねばならぬ。隨つてベルの功績は未來永劫沒却することが出來ないのである。

さてスウィートが聲音學上に用ひた聲音學上特殊用の文字といふのは、全然羅馬字を本として作つたもので、佛國の萬國聲音學會(Association Phonetique International)できめたアルファベットである。即ちスウィートがベルの視語文字を廢してからの著述は、皆この聲音文字で書かれてをる。次の第四十五圖に示したものは、獨國の言語學者ジーフェルの原著を英人のリッツマンといふ人が譯した『聲音學』(Elemental Phonetic)といふ書物に出でゐるのをそのまゝに掲げたのである。

第五十五圖　聲音學用の文字

		唇	唇及齒	舌頭	舌上	舌根	懸壅垂	喉
子音	密閉音 斷音	b p		d t	g k			ʔ
	密閉音 鼻音	m m̥		n n̥	ɲ ɲ̥	ŋ ŋ̥		
	流音 卷舌			l l̥				
	流音 顫動			r r̥			R R̥	
	連續音	w ʍ ɥ ɥ̥ v f	v f	ð θ s z ʒ ʃ	j ç	g x		h
母音	舌最高	(y u)			i (y)	(ü) (u)		
	舌中平	(ø o)			e (ø) ə	(ö) (o)		
	舌最低	(œ ɔ)			ɛ (œ) æ a	ʌ ɑ (ɔ)		

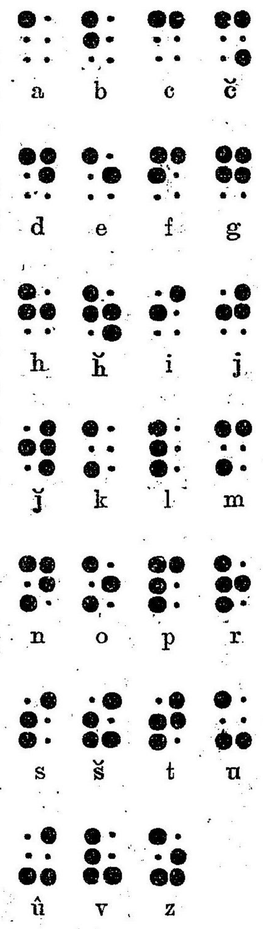
即ち萬國聲音學會の文字といふものは、全く羅馬字を本として、これを補ふに三四の希臘字などを借用したのである。而して多くは符號を以て區別し、又文字を顚倒して音の區別を立てたものである。丸の符號のつけられたのは、無聲音即ち聲帶を振動させないで發音するもので、いはゆる清音である。mやn、lやr、hやに清音のあるのは、甚だ不思議のやうであるが、聲音學上から極精密に萬國の音を悉くあらはさうといふには、これらの文字別がなくてはならぬ。日本語の中でも、口語談話語の連續して發音される場合には、清音のmやnやrやhが聞かれることがある。但しRを發するに、懸應垂を顫動させて發するなどは、日本人には夢にも想像のつかない發音である。而して母音は舌の口蓋を距れる距離によつてこれを區別し、まづaを最も遠い距離(舌と口蓋との間)に存在する者として、aeiと漸次に舌を口蓋に近づけつゝ、舌頭を前に進め、又aiouと漸次に舌を口蓋に近づけつゝ、舌根を後に進めて發音する際に、種々の母音が出るのであるが、まづ右の表中に示されたほどの文字があれば、萬國の大抵の母音はうつすことが出來る。ベルのやうに、三十六の母音字をつくるのは、唯理の上でさうあるので、人間の發音

にはそれほど精密に母音が區別して發せられるものではない。

ともかく、萬國聲音學會所定の文字は、今日もなほ言語學上の特殊の文字として言語學者聲音學者の間には現に使用されてゐるものである故、この方面から見れば最も尊い文字といはねばならぬ。スウィートの近著『言語の實用的研究』(Practical study of language)といふ書は、語學教授の最も有益なる參考書であるが、この書は實にこの萬國聲音學會所定の文字で說明してある。又東京の外國語學校の教科書になつてをるソーム氏(Sogm)の聲音學書は、英佛獨三國の發音を教へ、殊に英語の發音をくはしく教へる書物であるが、この書もまたこの萬國聲音學會の文字を用ひてをる。而して實に今日の聲音學書中最も高評であるフィートル教授(Vietor)の聲音學書は、即ちこの文字を以て英佛獨の發音を最も科學的に說明してをる。この良著は英人リップマン(Rippman)によつて英譯され、デント(Dent)の叢書として刊行されてゐる。かくてこの萬國聲音學會所定の文字といふものは、現今世界における最も完全なる文字であることは、誰しも拒むことは出來ないのである。しかしこの文字を直に日本の國字とすることは不可である。何となれば羅馬字である

歐米諸國でさへ、この文字を國字に採用しないのは、實際の事實である。言語學者殊用の文字と、普通一般の國字とは、その間に區別がなければならぬ。學者が悅ぶものは、どうしても複雜である、複雜なものは、一般の社會が悅ばぬ。一般の社會で用ひてゐる俗字だけでは、學者のまにあはぬ。そこで學者文字と、俗字とは、おのづから別れねばならぬ。學者文字を直に國字にしようと企てるのは、到底出來ない相談といはねばならぬ。換言すれば、ベルの視話法用文字を國字とすることが出來ない來ないと均しく、萬國聲音學會の文字も、國字とすることが出來ないのである。これらはどこまでも、特殊用の文字として存在すべきものである。

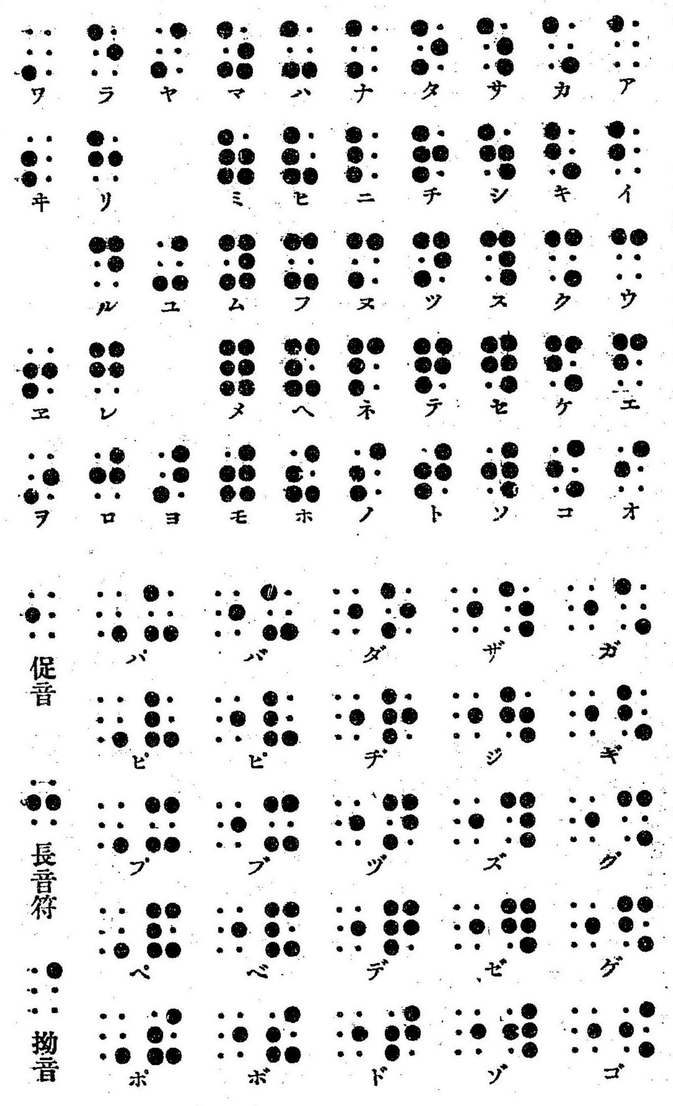
こゝに又盲者の讀むべき文字がある。これは點字といつて、全形が六點で、一字をあらはす組成になつてをる。さてこの點字は佛國パリイ訓盲院卒業生のルイ、ブレーユ(Louis Braille)が一千八百三十四年に始めて發見したものである。今これでエスペラントといふ世界語(このことは後章でくはしく說く)のアルファベットを寫したものを示さう。



右の大黑丸は凸點である、小黑丸は全くあらはれないものであるけれども、この點形の全體を示した迄である。即ちaは第一點で示し、bは第一點と第二點とで示し、cは第一點と第四點とで示し、dに第一點と第四點と第五點とで示す類である。これ丈の點字さへ敎へれば、いかなる語でも綴れる故、盲者は指の先でこの點字を押へて、摩りゆきつゝ讀むことが出來る。

次に特筆大書すべきは、東京盲啞學校敎授石川倉次氏が、このブレーユの點字を日本の假名文字に改作されたことである。羅馬字は一點字としては簡單であるけれども、これを綴るには、非常な手間を要する。即ち日本語などは、丁度二倍の勞を要することは、羅馬字の電信が、日本の假名電信より二倍の勞を要するのと同じ

關係である。さて石川氏の發明された五十音の點字は次のとほりである。

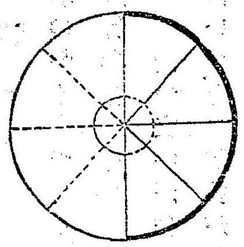


右の如くまづアイウエオの五つの點字を基本とし、以下の加行佐行多行奈行波行麻行也行良行和行は、丁度ローマ字を構成するやうに、子音と母音と抱合したフォネチック的の文字が作られてゐる。又濁音點と、半濁音(次清音)點とは、一字形丈け右に置いて、その記號がきめてある、ことは、前表でよくわかる。而して促音點長音點拗音點拗濁音拗半濁音をも出來てゐて、どんな語でもこれで書かれないものはない、實にブレーユの原案に勝つてゐることは、數十層であるといはねばならぬ。余はこれを本書に紹介するについて、親しくこの名譽ある發明者たる石川教授が自ら説明の勞を採られたるを謝するのである。なほこの點字については石川重幸氏の著盲人教育(東京育成會發行)といふ書もある。又石川教授はこの點字からして、日本の新國字を創作されてゐることは、後章の新國字の條で紹介しよう。

さて速記文字といふものは、西暦一千八百三十七年、英人イサック、ピットマン(Issac Pittman)といふ人が始めて發明したもので、これをフォノグラフィー(Phonography)また は俗にショルト、ハンド(Short hand)ともいつたもので、この發明があつてこの方、歐洲諸

國で色々改竄され、現に歐洲では四十有餘の有力な速記文字が出來てゐる。日本では明治十五年十月二十八日、盛岡の人源綱紀といふ人がはじめて日本語をうつすための速記文字を工夫したのである。明治二十三年帝國議會の開けた時、この速記文字は始めて公の用に供せられたのであるが、まだ十分の發達はしなかつた。その後色々工夫されて、遂に今日に至り、日本語をうつすに最も完全な發達を遂げたのである。嘗て丸山平次郎氏は『速記軌範』といふ一書をあらはし、次いで若林玥藏氏は『速記術』といふ一書をあらはし、これを世にひろめたのである。先年日本新聞は最も好評である武田式の速記法を同紙に連載して、大いに世に弘めた。さて

第四十六圖　速記文字



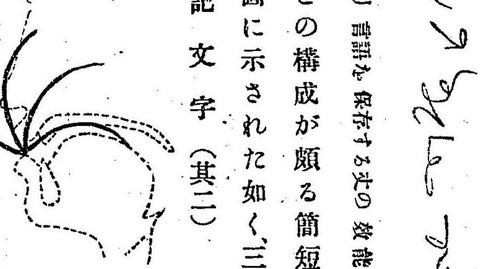
カ　ガ　サ　ザ　タ　ダ　ハ　バ　パ　ヴァ

ア　イ　ウ　エ　オ　ワ　キ　ウ　エ　ヲ

（若林式に據る）

若林式の速記文字の構造は第四十一圖の如く、二つの圓と、その圓を八等分してゐる直線とを本として、その圖の一部分つゞを採つて拵へたものである。

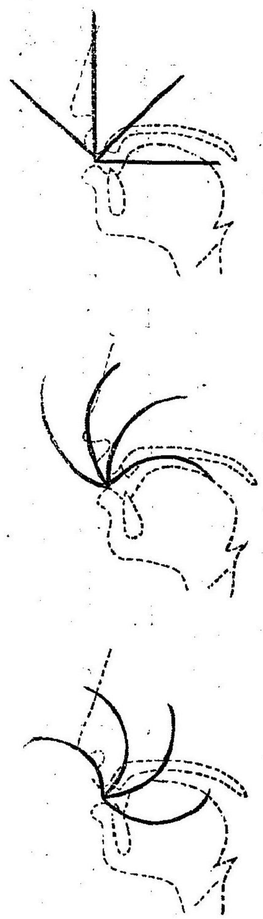
この若林氏の速記文字で文章を綴ると、左のとほりになる。



速記と申すものは固より言語を保存する丈の效能は確にあるもので御座います

また武田式の速記法は、この構成が頗る簡短で、よほど進歩したものゝやうにおもはれる。即ち第四十七圖に示された如く、三種の基礎から成立つてをる。即ち

第四十七圖　速記文字（其二）



（武田式に據る）

直線と、半弧形の左に曲がるものと、右に曲がるものとから出來てをる。

かくて武田式の速記字で、五十音圖をつくると、第四十八圖のやうになる。

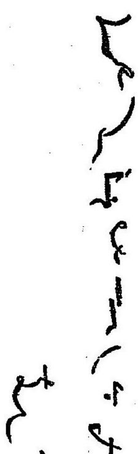
第四十八圖　武田式速記字の五十音圖

行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 音

あ か が さ ざ た だ な は ば ぱ ま や ら わ 撥

かくて武田式で文章を綴ると、次のとほりになる。この意義は『さくじつ(昨日)のれんごううんどうくわい(聯合運動會)で、あなたのがつかふ(學校)はいかゞでしたか』

といふことになる。即ち左のとほり。



この武田式の速記字を若林式のものに比べて見れば、大いに進歩したものであるけれども、全體速記字といふものは、直線と弧線とで出來てゐて、その書法は唯角度の如何できまるものであれば、少しでもその角度を違へると、まるでわからなくなる。そこで速記字は非常の練習を經て始めてものになるのである。又言語の中で、最も多く用ひられるものには、それ〴〵の略號が拵へてある故、その略號を一々憶えねば、實際のまにあはぬ。第四十九圖丹羽氏の速記文字に示された如きは即ちそれである。速記字と國字とは全く別問題だ。即ち文字の構造はいくら簡短であつても、書法に非常な骨の折れるものは、社會一般の共用とすることが出來ぬ。殊にこの速記者は、鉛筆で書けばこそ實際の用をなせ、活版で印刷することは到底

第四十九圖・丹羽氏速記文字

他動的語尾變化法（口語体）

其一　直接

略字＼符號	第一 イ	第一 シ	第二 イ	第二 ヘ
思フ	思ハス	思ハサス	思ハセル	思ハセヌ
致ス	致ザス	致サヌ	致サセル	致サセヌ
去フ	去ハス	去ハサヌ	去ハセル	去ハセヌ
行フ	行ハシマス	行ハシマセフ	行ハセマス	行ハセマセヌ
働ク	働カシマス	働カシマセヌ	働カセマス	働カセマセヌ
及ブ	及ボシマス	及ボシマセヌ	及ボセマス	及ボセマセヌ

（同文館發行丹羽瀧男氏著應用速記法に據る）

出來ないものである。その上速記字を讀むといふことは、又非常な骨折である。よほど速記に達者な人でも、唯器械的に人のこゑを寫してゐるのである故、書きあげた上で、もとから讀んで見ると、更に讀めない所があつて、これを文章になほすには、隨分苦心せねばならぬといふ事である。すでに書法の上に困難があり、なほその上に讀法の上で困難があるとすれば、速記字はいかに爭つても、國字となるべき資格がないのである。これも即ち速記用だけの特殊用文字としてのみ存在すべきものである。

次に最も簡短であるのは電信用の文字である。今左に日本の假名に代用するものと、萬國電信會議決定のローマ文字に代用するものとを示さう。

日本の電信文字

リ	ヌ
ル	ヲ
ワ	カ
ヨ	タ
レ	ソ
ツ	ネ
ナ	ラ
ム	ウ
キ	ノ
オ	ク
ヤ	マ
ケ	フ
コ	エ
テ	ア

サ	キ
ユ	メ
ミ	シ
エ	ヒ
モ	セ
ス	ン
゛(濁音)	゜(半濁音)
一	二
三	四
五	六
七	八
九	〇

(明治三十三年九月五日の官報)

a ä
b
ch
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r
s
t
u ü

v
w
x
y
z

（明治三十七年六月二十二日の官報）

即ち表の上では、日本電信文字が複雜に見えるけれども、これを實地にかけて見ると、ローマ字は甚だ不便である。何となればローマ字は二倍の手數を要することになる。例へば『タカハシ』といふことを、日本電信でうつと、『棒チョン(タ)、チョン棒チョン〳〵〳〵(カ)、棒チョン〳〵〳〵(ハ)、棒々チョン棒チョン(シ)』とうてばよいのに、羅馬字でうつと、『棒(t)、チョン棒(a棒)、チョン棒(k)、チョン棒(a)、チョン〳〵〳〵(s)、チョン〳〵〳〵(h)、チョン〳〵(i)』とやらねばならぬ故、電信上で、假名文字がローマ字に勝つてゐることは、西洋人も認めてゐるのである。又先年日本で用ふるローマ字を、文部省で決定した時に、『シ』をshiと綴らないで、siで綴らうとしたのは、この電信用の上で不便であるといふ説が、有力であつて、遂にかゝる不都合なsiで『シ』を示さうといふ案にきまつたといふ事である。しかし今日に至るまで、誰一人としてこの文部省のローマ字を守るものはない。田丸式のローマ字でシをsi

とする理由は別である。(次々章ローマ字論參照)ともかく電信用では、ローマ字より假名が便利であるに相違ない。この點からいへば、日本の電信用文字は世界第一等の文字といはねばならぬ。

そこで、或人はかくばかり便利な日本電信用文字をば、日本の新國字として、一般に使用されたいと主張したこともあつたけれども、これはまた甚だ迷つたものである。電信用文字は電信に用ひてこそ有効なるものであれ、これを社會一般の國字としては、實に目で見て讀む上に、甚だ〳〵不便を來たすのである。抑も電信用文字は、點と線とで出來てゐる故、これを連續して文章を綴る時に、その字を片端から讀んで行くのには、大抵の骨折ではない。カーネギーが電信技手であつた時には、この電信用文字を見ないで、チョン〳〵と音する器械の響を耳に聞いて、直にその通信の旨を悟つて喝采を博したといふことであるが、豈ひとりカーネギーばかりであらうや、日本でも電信技手の熟練したものは、互に談話するに、チョン〳〵舌うちして相互の意志を疎通し、又机などをコツ〳〵叩いても、相互に簡短な談話をすることが出來る迄に、電信の音響を十分耳にとめてをる者がある。これで見ても電信

用文字といふものは、文字として價値のあるものでなく、唯チョン〳〵いふ音響ばかりでも濟むのである。却てその音で聞く方が、文字を見るよりも早いのである。但し耳で聞く時には、聞き洩らしがあつたり、又長い事を宙に耳で覺えてゐるわけにゆかぬから、その際の補助保證として、電信文字を見るのである。かくばかり不完全な電信用文字を、國字にしようなどといふのは、白日夢の譫語に過ぎない。

序に漢字ばかりを用ひてゐる支那人は、いかにして電信をうつかといふことを述べよう。何萬といふ漢字一つづゝに對して、電信記號を作ることは、到底不可能の事である故、困究の結果、こゝに數字四箇を以て漢字一つをあらはすことと定めたのである。さて數字の電信記號は、やはり萬國電信用の數字の記號を用ふるのである、即ち左のとほり。

1 ▪▪▪▪▪▪▪▪ 2 ▪▪▪▪▪▪▪▪
3 ▪▪▪▪▪▪▪▪ 4 ▪▪▪▪▪▪▪▪
5 ▪▪▪▪▪▪▪▪ 6 ▪▪▪▪▪▪▪▪
7 ▪▪▪▪▪▪▪▪ 8 ▪▪▪▪▪▪▪▪

9 ▬▬▬▬ 0 ▬▬▬▬

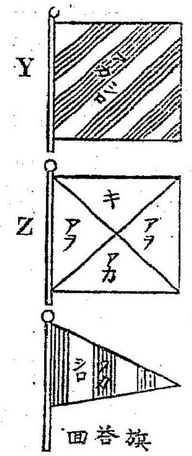
さてこれを漢字に當てるには『〇〇〇一』から『九九九九』まで、即ち九千九百九十九字の漢字を、字典の排列のとほりに並べて、一の電信用字典を作つたのである。今一般に使用されてゐるのは『中國電報新篇』といふ一冊の本であつて、この本を見ると、碁盤の目のやうに縱横に罫を引いて、漢字の上に例の數字が入れてある、即ち『一』といふ字が始まりで『〇〇〇一』の四箇の數字で始まり、鰲といふ字が『九六五一』で、この字典の最後の字である。この本には『九八〇〇』番まで罫が引いてあるが、番號だけあつて漢字は入れてない。即ち理論の上からいへば、〇〇〇一番から九九九九番までは漢字があるべきのであるが、それほど澤山の字は實際の場合に不必要である故、字典には番號だけあつて、漢字は入れてないのである。

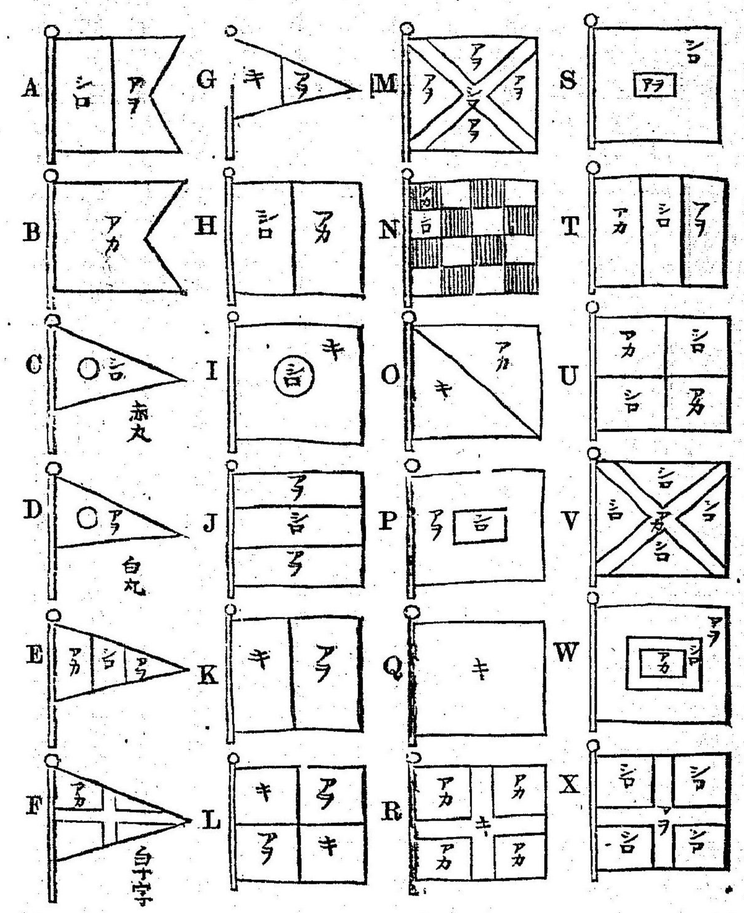
さてこの字典を見て、わが思ふ漢字を探し出し、その漢字の頭にある四箇の數字を見てこれを知り、この數字を書いて電信局にもつて行けば、即ち局では唯數の電信として扱ふのである。さてこの數字電報を受取つた人は、又例の字典で探し出して、これが何に當てゐるかを知るのである。例へば『明日』といふ二字の漢字を電

信にうつのには、まづ例の字典で引いてみて、『明』は『二四九四』、日は『二四八〇』である事を知り、そこで二四九四、二四八〇と書いて電信局に出し、局ではそのまゝ數として打電し、受信人は字典でこれが明日であるといふことを知るのである。これで見ても漢字國はいかに不便であつて、文明の利器の恩澤を受けるにも甚だ不自由であることが知れよう。日本假名文字が電信用文字として世界無比の便利なものであるのとは、實に雲泥の差であるといはねばならぬ。

次に文字ではないが、文字を代表すべき萬國船舶信號旗のことを述べよう。海軍中佐木村浩吉氏の『海軍圖說』といふ本によると、左のとほりである。（活版の都合により着色を省く）

第五十圖　信號旗の文字





右の如く、アルベットが皆各種各色の旗で一定してあるのだ。即ち洋中で甲國の商船が、乙國の軍艦に出遇つたと假定し、その商船が右の信號旗でPQWの信號旗を掲げると、軍艦からその返事として、HNDの信號旗を掲げるのである。その意義は『萬國船舶信號書』といふ一書(わが國では農商務の發行)にくはしく書いてある。即ち

PQWは『汝ハ如何ナル航海ヲナシタルカ』といふ意義で、空模樣が惡くなつてきたから前途の航海を氣遣つて問ふのである。

HNDは『暴風雨近キ處ニアリ注意セヨ』といふ意義で、この軍艦は暴風雨に出遭なかつたけれども、確に襲來することを知つて、かくと答へたのである。

明治三十八年五月二十七日ネブカトフ提督が波艦隊を率ゐて、對島水道にさしかゝつた時、わが東郷司令長官が掲げた、

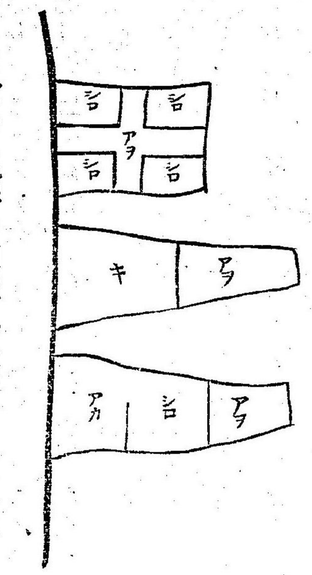
皇國ノ興廢ハ此一戰ニ在リ各員努力セヨ

といふ有名な信號もやはり右の萬國船舶信號のやうに二個もしくは三個のアルファベットを組み合せて意義をなしたものゝ幾個の信號旗で示されたのである。

これは日本海軍省の秘密であつてこゝにこの圖を示すことは出來ない。しかしその記號と意義とに付ては信號手が平素教育されてゐて、その記號旗を見れば、吾人が暗號で綴つた電信文を讀みうるやうに、一目してその意義を知るのである。

これに對して露艦のニコライ一世が、東郷大將に降伏(Surrender)の意を示すために、次の第五十一圖にあるが如きXとGとEとの三つの信號旗を掲げたのである。

第五十一圖　敵艦降伏の信號旗



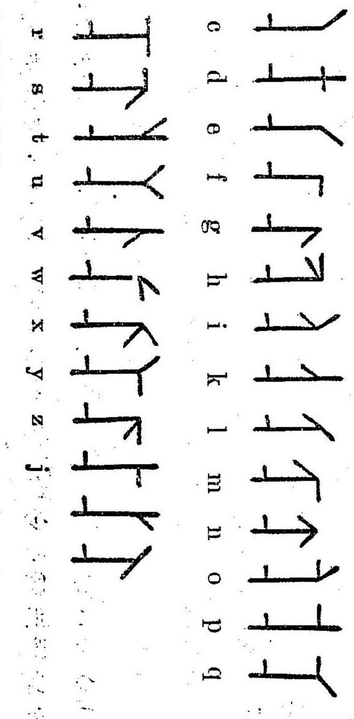
即ち信號旗のあらはす所は、丁度化學の方程式のやうなもので、アルファベットの二三の綴り合せが、一定した意義を示すのである。これでいかなる意義をも自由自在にあらはすといふわけにはゆかないけれども、海員及海兵に必要なことだけは、豫め訓練し教育されてゐるのであるから、信號旗で大抵の思想は發表される。殊に信號專門の兵員がゐて、これは非常に深く詳に信號旗の使用法

を知つてゐるのである故、大將の命令を聞いて、すぐにそれを旗に綴つてあらはすのである。海洋の廣い所で、音響の達しない場合に、信號旗は極めて必要である。

又音響は一時的であるけれども、信號旗はそれが撤回されるまでは、永久的の掲示である、即ち信號旗は色彩に因て遠距離の視覺に訴へる所の文字の代表者である。

同じく信號で旗を用ひないで、柱と棒とを用ふるものがある。これはセマフォル信號(Semaphore signal)といつて、一千七百九十四年フランス人のChappeといふ人が

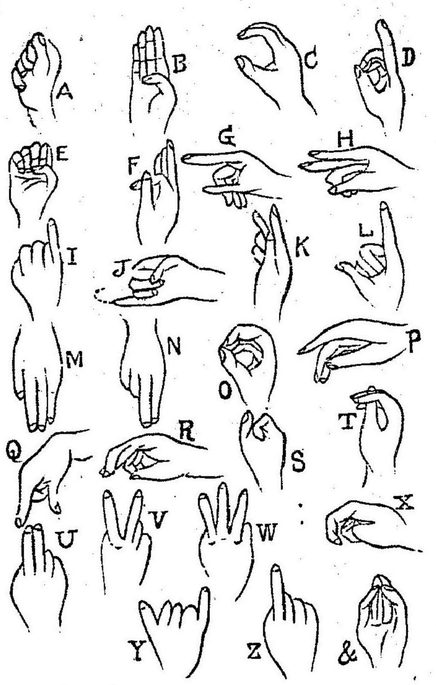
第五十二圖　柱棒信號



始めて發明し、その翌年英國で實行せられ、その後多少の修正改良を加へて今日に至つたのである。今われらは停車場及汽車路の曲がる所に立つてゐるのを見るのは、即ちこれの簡略な者である。これもアルファベットの二十六文字が各別に示されてゐるから、その用法は前掲の信號旗とは違つて、その柱の頭の腕を上下もしくは左右に動かして、いろ〳〵の意義を示すことが出來る。兵士が丘上に立て兩手に旗を持ち、その旗の振り方で信號を傳へるのは、このセマフォル式である。旗のない場合には、直立して兩手をこの式のとほりに動かすのである。夜間は燈火でこれに代へることも出來る。そこでこのセマフォル式が海軍信號旗よりも優つて居る所は、單純な點であるが、色彩がない爲めに遠視がきかないのと、その發表が一時的で永久的でないのとが劣つてゐる點である。或新國字家は、この柱棒の單純な所をまねて、國字を作つて見ようと思ふものもあらうが、それは全くの空想に過ぎない。これは單純である丈けそれだけ、國字としては運筆が困難であるのみならず、甚だ美術的でない。これは飽くまでも信號用の特殊的のもので、それ以上に應用することは出來ないのである。

次に手の指によつて、視覺に訴へて文字の代用を信號的にあらはすものは、唖者の手眞似の法式である。これをマニュアル メソッド (Manual method) といふ。今左に羅馬字の形を片手で表はすものを示さう。

第五十三圖　唖人の手眞似　其一



(Century dictionary に據る)

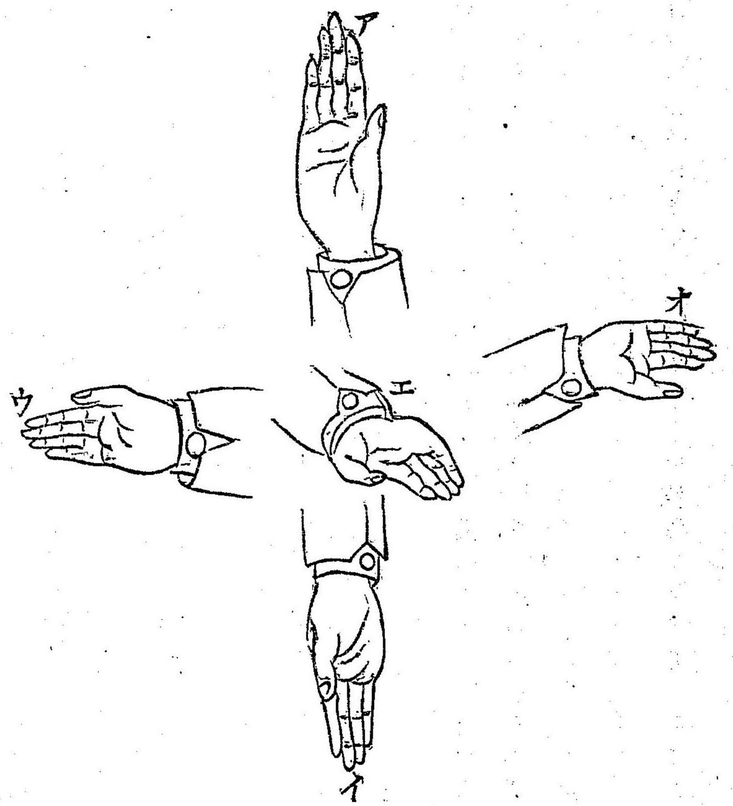
即ち第五十三圖に示されたやうに、成るべく手の形をアルファベットの原字に眞似て、その形を示すのである。これをマニュアル、アルファベット(Manual Alphabet)即ち手指字といふ。さてこれを連絡してあらはせば、即ち綴字をなすので、唖者互にその意を通ずることが出來るのみならず、この手指字のカタを憶えてをれ

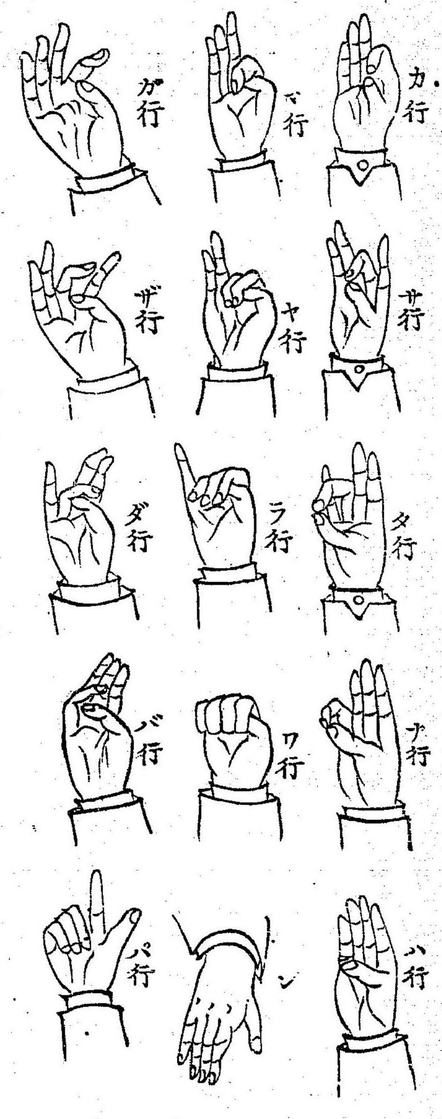
ば、啞者と巧に會話することが出來る。なほこの外に兩手を用ひて、アルファベットを示す手眞似のカタもあるけれども、實際の便利はこの片手であらはす方がよいといふことである。

この手眞似もまた羅馬字綴である故、日本語をあらはす場合には、二重の手間を要するのでこれを五十音圖式に改める企が行はれた。即ち現に京都の盲啞學校では、この五十音圖式の手眞似を啞者の敎育に使用してゐる。今左に京都第三盲啞學校編纂の『盲啞敎育論』といふ書に載せられてある手眞似のカタを示さう。

凡そローマ字の手指が五十音圖の假名式に改められたのは、丁度アルファベットの盲人用點字が、日本に來て假名式に改作されたのと同一の理由で、日本語を綴る上には、ローマ字式より假名式が便利であるからである。手眞似の數からへば、ローマ字式が假名式より多いけれども、實地に運用する上からいふと、一擧動で一綴音をあらはすことが出來る點は、假名式がローマ字式に勝る所である。國字問題は別として盲人用點字及啞人用手指字の上からばかり見れば、假名はローマ字に勝つてをるものといはねばならぬ。

第五十四圖　啞人の手眞似　其二





即ち第五十四圖にある如く、唯單に右手の指を揃へて、平に開いたものが母音で、上へあげるとア、下へさげるとイ、西へやればウ、中即ち胸の所へやればエとなり、東即ち體の左方へやればォとなる。そこでカ行の子音、即ち親指と人指指とを合せたものをKとすれば、前の如く五母音の位置で、カキクケコが出來る。即ち羅馬字の手眞似に比べて見るに、非常に簡易で、唯手の位置で變ずるものである故、日本の

啞教育にこれを用ひたらば、いかにも結構な事と思ふ。

そこで電信文字にせよ、盲人用の點字にせよ、又た啞人用の手眞形にせよ、羅馬字を用ひるよりも、假名文字を用ひた方が遙に便利であることが知れる。これが即ち羅馬字主張者に對して、假名論者の最も得意する所であつて、日本の國字も畢竟假名文字專用でなければならぬといふ議論の起る本である。しかしこれらは皆電信もしくは盲啞教育など、いはゆる特殊用の文字である故、世界一般の文字、延いて日本の國字としようといふ問題とは、おのづから別問題になる。こは本書の結論でくはしく說かう。

以上述べ來つた所で、視話法用文字にせよ、盲人用の點字にせよ、速記文字、又は電信用文字にせよ、又信號旗信號柱及び手眞似にせよ、皆それ〳〵特殊の目的に使用されてこそ、初めて有効であるのだ。これらの文字を直に國字としようと企てるは、竿で天日をつゝき落さうとするよりも難いといはねばならぬ。もし世界で最も簡易な文字を採用することになれば、萬國電信會議決定の文字を用ふるのが一番よろしい、さうすれば別に世界語とか世界文字とかいふものを發明しなくても

よいのである、けれども、それがさう甘くゆかぬといふのは、特殊用文字は特殊の目的で作られたもので、社會一般の國字とは、殆ど同日の論ではない。

或人は化學上の記號文字、例へば水素(Hydrogen)をHで示し、酸素(Oxygen)をOで示し、H_2+Oと書けば水素二つに酸素一で、水が出來るといふことを示すことにおいて、世界萬國の人に同じくわかるやうに、文字といふものを、この化學記號の文字のやうに構成したならば、世界共通の文字とすることが出來ようと考へた人もあつた。しかしこれは百年江河の清むのを待つ類で、到底ものにならぬ空想迷夢に過ぎないのである。化學記號文字は、化學といふ特殊の目的のために、元素の略符號として用ひる迄で、これ以上には一歩も進むことが出來ないものである。要するに特殊用の文字からして、社會一般の國字を案出しようとしたり、又その特殊用の文字をそのまゝ社會一般に用ひようとするのは、痴人の夢を說く類である。それならば、新文字發明といふものは絕對的に痴愚のわざであるかといふに、吾人は實に然りと答へざるを得ない。日本の將來の文字も、日本人が別に世界と離れて創作する必要を毛頭認めない。又在來の假名と漢字と、また今現に使用しつゝある

羅馬字といふものゝ外に、國字はないのである。唯假名專用としようか、羅馬字採用としようかといふことが問題である。換言すれば、日本の文字を全然音字とするといふ目的に向つて進むのが理想であつて、音字の中で綴音的の假名文字にすべきものか、又子母音同位的のローマ字にすべきものかが疑問である。なほこの問題を決解するに當つて、大切な先決問題がある。それは意字なる漢字は全然排斥すべきものであらうか、又排斥すべきものとすればいかなる方法をとるべきものか、はた又漢字排斥は全然理想であつて、到底現實となるべきものでなからうかどうか、それを歷史的に科學的に敎育的に說述しよう。但しその前に、文字の迷信の一章を說いて、文字崇拜のことから漢字に說き及ぼさうとおもふ。

第六章　文字の迷信

テーラア氏の人類學書の開卷第一章に、ジョンウィリアムといふ人が、南米土人の文字を知らぬものゝ話が載せてある。或日南米の宣敎師が、大工の業をなしつゝあつた際に、定規を忘れたので、そこらの木片に、消墨で文字を書いて、その妻に定規

を渡すやうにとの書信文を認めた。さて土人はその木片を宣教師の妻の許へもつて行くと、妻はその文字を見て、すぐに定規を出してこれを持つて行けといつたので、土人は大いに驚いて、木片に書いた文字は、物をいふものだと思つた。

ジョンラボックの文字學には、更に面白い話が出てをる。即ちベーゲルトといふ人が實際見聞した話として載せてあるのは、或野蠻人の間に傳道しつゝあつた宣教師が、或日麵包の數を書いた手紙を野蠻人にもたせて使にやつた所が、途中で野蠻人がその麵包の一部分を盗み食ひをした。ところでその食ひ殘りのパンを宣教師に渡すと、直にその盗み食ひした事が發見されたので、野蠻人がおもふに、何でもこれはかの手紙が自己の盗み食ひする所を見てゐたに相違ないと考へた。次に或時又麵包をとつてくる使にたのまれた。今度はパン四ッと書いてあつたのだ。所で、野蠻人は途中で盗み食ひする間、その手紙を或石の下に隱しておいて、ムシャ〳〵とパンを食ひ、手紙がその盗み食ひの姿を見ないから、今度は安心だとおもつて、さて又その食ひ殘りのパンを持つて行つたが、なほその盗み食ひしたパンの數を當てられたので、野蠻人は實に驚き怪み、文字といふものは全體いかなる

魔力を有するものであらうかと頭を傾けて、惘然たる有樣であつた。

又同じラボックの文字學に、南米の土人がニューヨークの商業廣告の書いてある紙片を見て、その文字であることを知らないで、色々考へた末、これは眼病の藥であるとの斷案を下した事や、又亞弗利加の野蠻人が、文字を藥として崇拜し、巫者は或文字を木片に書いて病人に呑ませてをる事や、又その文字を書いた木片を洗ひおとした水を、病人に高くうりつけてをる祈禱者がある事などを報告してをる。

以上は全く文字を知らない野蠻人が、文字を以て一種の魔力ある神秘的神靈的のものであると信じてゐる話で、いはゆる文字に關する迷信の實例である。偖文字の迷信は野蠻人ばかりでなく、開明した國民でも、又その起原については、一種の迷信をもつてゐて、言語の神賜說を唱へると均しく、文字の神賜說を唱へたものが多い。即ち前に述べたアッシリアの楔形文字はネボ(Nebo)といふ神樣の詫宣で出來たものであると信じ、埃及文字はソス(Thoth)といふ神樣が作つたものであるとし、印度ではバラモン教の神ブラマ神が人の頭蓋骨の接き目にある形を見て初めて文字を作つて、人間に與へたものであるといひ、西洋ではエホバ神が神自身の指で

十誡を書いてモーセに與へたので、其から文字が人間に傳はつたといひ、スカンディナビア地方では、オヂン(Odin)といふ神が初めて文字を人間に授けたといつてゐる。日本で神代文字を主張したのも、多くは神樣の製作であつたとの迷信を根據としてゐた。現に本書に示した神代文字の如き、五十猛命といふ神樣の發明であると吹聽したのである。漢字の發明者蒼頡といふものは人ではあるが、神視されてゐて、その人の神力で文字が作られたやうに傳へたのである。

とにかく、文字といふものも、言語と均しく、古代未開の人にとつては、いかにも不思議なものである故、その發明を神樣に歸するのは、いはゆる神源說神賜說の起る所以であつて、毫も怪しむに足りないのである。言語が社會的產物であると同時に、文字もまた社會的產物であつて、全く人間の力で出來たものであることを悟るやうになるのは、よほど進んだ人の考でなければならぬ。余は文字の迷信に關して、敢て遠方の西洋から材料をとる事をしないで、目の前にある國民の實際の社會から、活きた材料をとり出して見よう。まづ東洋人の第一文字に對する迷信は、佛敎に伴ふ迷信の上から、その佛敎の本家本元たる天竺の梵字を遮加不思議の靈力

あるものと思つてゐたのは、爭はれない事實である。

全體梵字に關する迷信は、夙に陀羅尼(Dhāraṇī)崇拜に淵源し、その聲音とその文字とに各神力ありと信じたのである。大經度論に『有陀羅尼以是四十二字攝一切言語名字、阿者是四十二字阿羅波遮那等云々、不生行陀羅尼、菩薩聞此阿字即時一切法初不生、如是字々隨所聞皆入、一切諸法實相中、是名字入門陀羅尼』とあり。そこで眞言宗などでは梵字の字母に神力があるものとの信念を起すやうになつた。即ち瑜伽金剛頂經釋字母品と文殊問經字母品とを見るに、字母の功德が列記してある。今その中アイウエオ五字母についての功德を示さう。

(梵字母)	(金剛頂經)	(文殊問經)
अ	一切法本不生	無常聲
उ	一切法根不可得	諸根廣博聲
ए	一切法譬喩不可得	多種逼迫聲

ㄱ 一切法求不可得　起所求聲

ㄸ 一切法瀑流不可得　取聲

即ち梵字崇拜といふことは、今日もなほ眞言宗の信徒間には往々見られることで、前に掲げた野蠻人が藥とおもつたやうに、この佛徒はかの梵字を書いた、その紙片を呑んで病がなほるとの迷信を有してゐるものもある。徒然草に『阿字本不生』といふことを、いと有難きことに書いてあるのも、また梵字の迷信である。方丈記に『額に阿字を書きて印を結ばれける』とあるのも、また梵字の迷信を示してゐる。今でも印度の土人は梵字は梵天の形をうつしたもので、神聖なものであるから、これを印刷にするのも恐多いといつて、印刷にさへ附せないといふことである。支那人の漢字における迷信もまたやゝこれに似た話がある。即ち日本から嘗て輸出した天狗煙草の卷紙に、天狗の文字が入れてあるので、その天といふ字を燃やすのは勿體ないといつて、遂に天狗煙草を吸はないものがあつたといふことである。而して Tengu と羅馬字で書いてあれば、敢てこれを吸ふことを辭せない、何となれ

ば、羅馬字は外奴の文字であつて、漢字の如く神聖なものでないと思うてゐるからである。又兎の字を忌み、關羽の關字を濫に書くことを禁じ、又龜といふ字を嫌つて小便してはならぬ所にこの龜の字を書いておけば、さすがの支那人も小便しないといふやうな信迷がいろ〳〵ある。

言語の迷信と文字の迷信とは、離すべからざる關係があつて、その梵音の言語を崇ぶ結果、梵字を崇ぶやうに、或有力な又或目的に合する言語を崇拜する結果、その言語を寫し出した文字をも崇拜するに至るのは、自然の結果である。現在わが日本の下層社會に行はれてゐる文字に關する迷信を大別して見ると、およそ八種ほどにわけられる。まづその第一種は、流行病惡疫などを恐れる結果、過去歷史上の剛のもの、もしくはそれに關係ある人名を書して、その文字に宿れるその人の勢力が、流行病や惡疫を驅除するものであるとの迷信を起すのである。即ち次の如きものである

組屋六良右衛　この文字を紅で書いて門口に張れば、疱瘡のまじなひとなる。（若州小濱地方）

加藤主計守清正公御宿　この文字を書いて門口に張れば、その效能は前者と同じ。

出雲國劍十郎左衛門子孫　咽喉に刺のたつた時、この文字を盃の水の中に書いて呑ませると刺がとれる。

鎭西八郎　この文字を貼つておけば、麻診のはやる時のまじなひとなる。

久松留守　御染め風邪がはやる時、この文字を貼つておけば、その中の家內は風邪ひかぬ。

佐々良三人宿　卯月八日に戸口に貼ると、惡魔よけとなる。（駿河地方）

北見猪右衛門　と書いて貼つておけば、虫除となる。なほ『双六のおゝきの筒にうちまけて羽蟻はおのが負けたなりけり』と書き、ツルべ〳〵と唱へれば更にきゝめがある。

若狹小濱の孫左衛門が子　この文字を白紙に書いて戸口に貼りつけておけば、疱瘡のまじなひとなる。

次は或意義を有する文字で、その文字の中に含まれたる靈力が諸種の効能をなすものであるといふ迷信である、即ち次の如きものである。

土　水に向つて指先でこの字を書けば海川の水難なし。

儀唐　朱書して懷中すれば、山中で猪狼の難なし。

天炙　小兒の頭のをどりへ朱書しておけば、一切の病をのぞく。

海　この字を腹に三つ書いて眠れば、よい時分に目がさめる。

王　この字を懷中して居れば、狐狸に欺かれることなし。

鬼　旅行の際この字を身體に一ぱひ書いておけば、道中災難なし。

南　タムシもしくはゼニガサの類に、この字を書いて黑く塗ればなほる。

丙寅　朱書して子供の枕もとにおけば、夜泣がとまる。

畾　朱書して子供の腹の上におくと、夜泣がとまる。

伊勢　產婦にこの字を小さく書いて呑ませると、樂にお產が出來る。

鬱　目の上にいぼの出來た時、そのできた方の足の大指の爪に書いておけばそのイボがなほる。

人　蓮の葉に書いて呑ませると、難產の時のまじなひとなる。

宗　口を開かせて左の口中にこの字を書くと喉逆(ジャクリ)がとまる。

犬　紅指で子供の頭にこの字を書いておけば、狐狸怪猫に襲はれることがない。

の　この文字を空に書いて後捕へれば、蜻蛉がたやすくとれる。

不醜　この二字を書いて天井に貼り、抹香を燒けば、雷除となる。

大　これは大便を耐へるまじなひ、男は左の手掌に、女は右の手掌に、指でこの「大」の字を書いて三べん嘗める。小便を耐へる時には「小」の字を書く。

叶　火をともす前に、小刀のさきでこの字を三べん蠟燭に書けば、蠟が流れぬ。

蘭　『草冠(ソウコウ)やはたちが門(カド)に門(モン)たてゝ、東(トウ)やひがしや蘭(ラン)やあらゝぎ』と唱へながら、この字を白紙に書いて呑ませると、吐瀉(ハキ)がとまる。

魁罡罡魁魁罡魁魁　この七字は北斗七星の名で、大穴持神七名の符字で、(子)大國主神、(丑亥)大物主神、(寅戌)大己貴命、(卯酉)志固男神、(辰申)八千戈神、(巳未)大國玉神、(午)顯國玉神の七つに配し、これは神符の通傳であると、神祇伯家行事傳といふ書に見えてをる。

次の第二種は、或意義を含める文字を逆に書いて、或時日にこれを或場所に貼りつけておくと、災難をのがれるといふ迷信である。その實例は即ち左のとほり。

儀方　五月五日の朝、この文字を書いて貼れば蛇よけとなる。

茶　五月五日正午朱書にして裏口に貼れば、蛇よけとなる。

日　同じく正午にこの字を書いて裏口に貼れば、蠅よけとなる。

日佛言　この文字を柱にはりつけておけば、蛇よけとなる。

得　五月五日正午にこの字を書いて貼りつけておけば、ゲジ〳〵出でず。

腫　出血または腫物にはその人の背に逆に書く。血止め、腫物の痛みを止めるまじなひとなる。

次の第三種は、何ともかともわからぬ作り字、否むしろ符牒のやうな文字を書いて、その文字が靈力あるものとせられ、其靈力で諸種の効驗があるとの信仰を起すもので、俗神道及俗佛教の間には、その加持祈禱の際、かゝる文字の迷信が今もなほ

盛に行はれてゐる。今その吾人がしらべ得たものゝ實例を左に示さう。

𠀋 これは九字をきる時のまじなひの字で、その時の呪文は臨兵闘者皆陣列在前といふ。その横線と縦線と交互に一線づゝ引く毎に、呪文を唱へ、最後の「前」といふ時に、其の中央の點をうつのである。かくすれば強敵も惡魔も恐れるに足りないといふ。

𠀋 この字を懷にして旅行すると道に迷はぬ。

𠀋 オコリを病んだ時、朝早く井水を酌んでアビラウンケンソワカと三唱しながら、この字を書いて呑めばなほる。

☆ 毎晩寢る時、居間の天井に向つてこの字を指で書くまねをし、その次に「戌」の字を書くまねして、朝起きてから、右の點をうつ、かくすれば、不時の災難を免れるまじなひとなる。

𠀋 𠀋 𠀋 𠀋 この四字を門扉に貼つておけば、疫病がはやる時のまじなひとなる、日露戰爭時分には銃丸除けのまじなひになるといふことで、田舍の婆さんなどが頻にこの文字を書いてもらつて戰地に送つた。大槻如電氏の說

によると、これはサムハラといふ梵語で、皆懺悔といふ義であるとのこと。又氏の示された字は、最後の字が𠀋といふ字になつてゐる。

𠀋 この梵字を書いた紙を呑ませると鼻血をとめるに効がある。

𠀋 ☆ 上の字を書く時には、一畫を書く毎に次の呪文を唱へる。即ち天地玄妙行神變通力、この最後の力といふ時には中心に一點を強くうつのである。又下の字を書く時の呪文は、キヒツカミといひ、ミといふ時中央に點をうつのである。この二文字は、重ねて書き、その字畫かどこから書いたものだか別らぬやうにするのである。さてこれを木の葉に書き、病人にこの字の墨を水で洗ひおとした汁を呑ませると、どんな病氣でもなほるといふほどの有難い字である。

次の第四種は、漢字でなく、全く片假名平假名で、何のわけともわからぬ呪文を書いて、まじなひとするものである。『いろは』文字を書くのは、梵字の字母を信ずると同じく、日本の字母としてこれを信ずるのである。その例は即ち左のとほり。

イシフシエンリキリフクヱンフクリ この片假名を書いて行燈に

貼つておけば、虫が油の中へ入らない。

いろはにほへと　この平假名を疵に向つて指先で三度書けば、疵からの出血をとめる。

トンロクモンフハ　といふ片假名をば、枕または箸を人の知らぬやうに四角に削つた木片で書いて、懷中してゐると、勝負事に勝つまじなひとなる。

次の第五種は、全く和歌に出來あがつたもので、その和歌には有名な古歌もあれば、甚だ拙作の腰折もあり、又全く意義のわからぬものもあるけれども、要するに和歌の德といふ點からして、その和歌を文字にしるしておけば、必ずそれに相應する丈けの効驗があるといふ迷信を起すやうになつたのである。これらはすでに文字の迷信といふ範圍を脱して言語迷信になつてゐるものであるけれども、そを口で唱へるのでなく、必ず筆でしるしておくといふ、文字の上に關係があるので、こゝに掲げたのである。その實例は左のとほり。

『羽蟻とは、山のくち木に、すむ虫の、里に出づれば、おのがひがごと』といふ歌を逆樣に木に書けば、その木には、蟻がつかぬ。

『あら玉の、卯月八日の、吉日に、かみさけ虫を、せいばいぞする』といふ歌を書いて、厠に貼つておけば、厠に虫がのぼらぬ。

『蛇よぢやよ、かのこまだらの、虫ならば、山さつ姫に、かくと語らん』といふ歌を書けば、蛇蝎に嚙み付かれた時のまじなひとなる。

『燒亡は、かきのもと迄、きたれども、あか人なれば、そこで人丸』といふ歌を書いて、表の戸の裏に貼つておけば、近火の時火災にかゝらないまじなひとなる。

『夜のうちに、もしも怪しき、ことあらば、ひきおどろかせ、わがまくら神』といふ歌を門口の裏戸に貼つておけば、盜難除となる。

『龜のをの、山のいはねを、とめて落つる、瀧のしら玉、ちよのかずかも』といふ歌を書いて、家の內に貼つておけば、火災をよける。

『分けのぼる、ふもとの道は、異なれど、同じたかねの月を見るかな』の歌を書いて懷中しておけば、道に迷はぬ。

『ながきよの、とおのねむりの、みなめさめ、なみのりふねの、おとのよきかな』といふ歌は、意味全く晦澁であるが、首から讀んでも、尾からよんでも、全く同じ歌で

あるといふ、その手際な所をめでゝ、この歌を書き、正月吉日枕の下に入れておくと、よい夢を見るといふこと。

次の第六種は、漢字の意義からして、目出度いものには原字を更に改めて好字とし、惡いものには原字を作りかへて、同音の漢字を惡しざまに使つたものがある。

例へば

崇德の后聖子の聖の字は、壬(ムナシ)を耶(ハラ)むといふ字なる故、御産になりて御子は生まれず、水ばかり出でたり。(續古事談)

冷泉院といふ御殿は、度々火災に遇つたので、その字を改めて冷然院とした。

明治といふ年號は、今まで年號のかはる際に、屢朝議に上つたものであるが、平治に平治の乱があり、天治に京師の大火があり、すべて治の字のついた年は、わるいといふので排斥された。又この明治を排斥する學者の中には、日月臺(星辰)が水(三水の字形にとる)によつて流れるといふことになるので、甚だわるいとさへ唱へた。

耶蘇教を惡んだ結果、吉利支丹の字を改めて、切支丹または切死丹と書き改めた。

日露戰爭の際、札幌ビールを賣つてゐるビアホールの看板に殺暴露ビールと書いて客を悅ばせた。

これに反して好字を悅んで用ひたのは

ムサシの國名を無邪志と書き、後二字の好字を用ひよとの命令で、武藏といふに定めた類。

松魚節を勝男武士と書き改め、鰯を壽留女、鯛を多居などと書き改めて、祝賀の意をあらはす類。

藤原馬飼は唐に行つた時、宇合の字に改め、鹿野といふ姓を加納と書き代へた類。

足利義滿は戊戌の歳に生る、戊戌の字は二つながら戈字に從ふ、武威にて天下を定むる兆なりといつた。(臥雲日件錄)

次の第七種は、陰陽家の迷信から出で、人の姓名に用ふる漢字に吉凶があるといひ出した。韻鏡諸抄大成といふ書に、水性の人は福、木、峯、彌、武、民、八、門、丈など、以上唇

音の字で水なれば、水性の人に和して大吉なり。菊、玉、江、義、五、六、嘉、久、九、手、金などは、牙音の字で木なれば、水性の人には水性木であるから、武士藝者に吉なり。宗、二、松、四、市、庄、助、辰、勝、七、孫、次、千、小などは、齒音の字で金なれば、水性の人には金生水であるから、農商職の人に吉なり等の迷信を列べてをる。又名謁反切樞要といふ書には、茂、平、半、文、八、門、彌、萬、伴、卯、兵などは、唇音水性の字である故、金性水性によし。覺、義、吉、彦、角、介、加、庫、久、源、元、近などは、牙音木性の字である故、水性火性によし。忠、藤、太、重、理、利、林、二、六、通、治、猪、丑などは、舌音火性の字である故、木性土性によし。與、宇、乙、一、伊、友、幸、喜、安、熊、和、由などは、喉音土性の字である故、火性金性によし。新、清、佐、藤、四、七、三、千、十、小、淺、善などは、齒音金性の字である故、土性木性によしなどの愚說をならべてをる。而してこの迷信は德川時代の中葉以後から全く確定義となつて、節用集には必ずこの相性の名によつて漢字を分類し、庶人は皆これによつて命名したのである。今左に節用集にのせてあるものを抄記しよう。

男子は

(水性)　豊　福　民　文　明　など

(木性)　國　岩　兼　琴　京　など

(火性)　忠　竹　藏　重　大　など

(土性)　音　乙　又　幸　行　など

(金性)　宗　松　次　助　市　など

女子は

(木性)　萬龜(マキ)　美能(ミノ)　など

(火性)　五百(イホ)　輝　(テル)　など

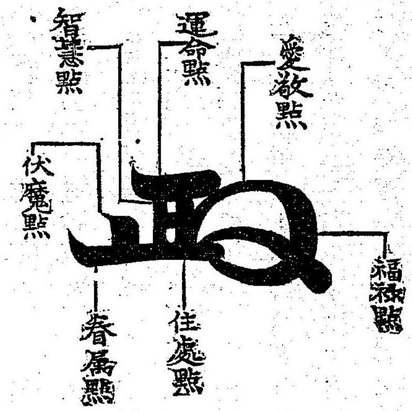
(土性)　留　(トム)　千代(チヨ)　など

(金性)　艶　(ツヤ)　八重(ヤエ)　など

(水性)　常盤(トハ)　操　(ミサ)　など

最後の第八種は、花押即ち書き判について、陰陽家の迷信を起したものである。抑も花押は自己の名の字體を崩して書いたのであるが、德川時代の中葉以後からこれに七つの點があつて、それ〴〵いはれがある事とし、第五十四圖のやうに、政といふ花押を標準としていへば、運命點が弱ければ運拙く、智慧點が弱ければ人にだ

第五十五圖　花　押　其一



(木性)	穴五大吉	九、三吉
(火性)	穴九大吉	三、一吉
(土性)	穴三大吉	一、七吉
(金性)	穴一大吉	七、五吉
(水性)	穴七大吉	五、九吉

まされ、愛敬點が弱ければ人に憎まれ、春屬點が弱ければ人の力を得ず、伏魔點が弱ければ威勢なく、福祿點が弱ければ貧しくなり、住所點が弱ければ諸事落付かずなど唱へたものである。

殊にをかしいのは、穴の數で吉凶禍福が定まるとさへいひ出したのである。例の節用集によると。

	一、七凶
	五、七凶
	九、五凶
	三、九凶
	一、三凶

而してこの迷信の理由とする所は、陰陽五行の說に基いてをるらしい、享保十七年版の法師盛典の著增補印判秘訣集といふ書によると、梵語の ア(地大、住所點)、ど(水大、伏魔點春屬點)、ラ(火大、福祿點)、ウム(風大、智慧點)、ケン(空大、愛敬點)、ウン(識大、運命點)に配し、これをば五行にあてゝ、左の如く排列してをる。

唇音の字	水性	穴數	五
舌音の字	火性	穴數	三
牙音の字	木性	穴數	九
齒音の字	金性	穴數	七
喉音の字	土性	穴數	一

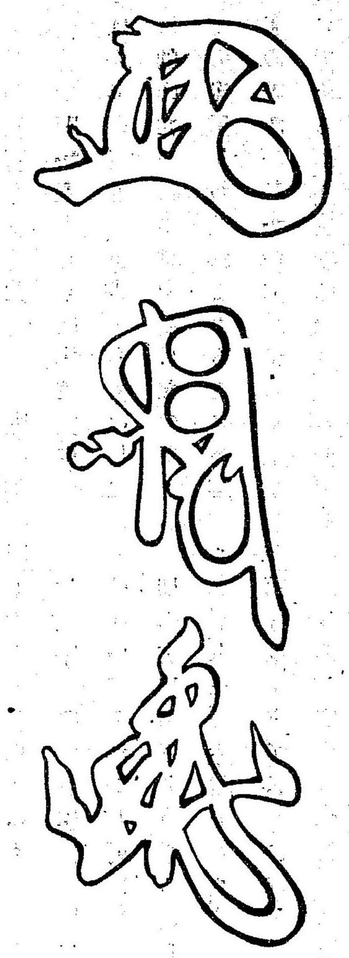
即ち漢音の音から五行に見たてゝ漢字を分類し、一三五七九といふ奇數を五行に配して作つたものである。これを一々相性の漢字によつて命名し、さてその名をしるす時には、嚴密にその穴數を守つたものである。今左に仁義禮智信といふ五字を、この理外の理窟によつて作りあげた形を示さう。

第五十六圖　花　押　其二

花押はもと自分の名を書く際に、人のまねないやうに自己流の草書體を用ひたものであつて、後世のやうに字の中の穴の數を數へるやうなことはしなかつたのだ。古い所で、源義家源頼朝などのがあり、それ以後の武將名士公卿などのが澤山殘つてゐる。德川時代になつてからは、殆どいづれの階級でもこれを用ひ、遂に花押を弄ぶ所から、その字形について、高尚らしく深遠らしくする爲めに、如上の迷信を惹き起すやうになつたのである。

第五十七圖に示された花押は、原花押を透寫にして、白字としたもので、一番上の

が里見義弘ので、中のが武田晴信、下にあるのが明智光秀のものである。これを見ると、その名の形がよく讀み得られる程度にまで書きくづしてある。この頃の花押はいはゆる本名を署するサインであつて、まだ字形に對する迷信は起つてゐなかつたことが、能くわかるのである。歐米人は、今なほ印判を用ひないで、サインを以て自己の姓名の證としてゐるのは、即ち日本の昔の花押と異ならない。ローマ字では無風流であるから、文字美もなく字趣味もない故に、迷信も起らなかつたが、



第五十七圖　花　押　其三

日本の花押は漢字の風流な所から、陰陽五行の說にもちこまれて、遂に迷信を生じたものである。

以上、列記した文字に關する各種の迷信は、主として下層社會に行はれてゐたもので、文明の敎育を受けたものは、唯一笑に附し去るべきほどのものであるが、余は今この音で野蠻人もしくは無智文盲のものが文字に對する迷信を歷史的に記述するばかりの目的で、本書をあらはしたのではない。それより更に有力な、更に有益な目的のために本章を設けたのである。即ち文字あり敎育ある人の間にも、なほ文字の迷信が行はれてゐることを述べるのが、本章の主眼である。

假名の發明がなかつた時に、記紀萬葉等が漢字ばかりで書かれたのは、是非もないことであるが、平安朝に至り、既に假名文字の發明が完成されたのに、これを用ひて著作したのは、女子ばかり、男子はなほこれを用ふることを耻ぢ、さすがの貫之も、土佐日記を書く時に、「男もすといふ日記といふものを女もしてみむとてするなり」などと斷つて、假名書きをしたくらゐ、假名文字は文字としての價値が認められなかつたのである。あまりに學問のない鎌倉幕府でさへ、假名書きを忌んで、拙劣極

る漢文の吾妻鏡を編んだのだ。その頃からして、書簡文に、例の『御座候、被仰候、有間敷候、可被下候』などいふ妙な漢字が用ひられ、假名はとかく繼子扱ひにされ、日蔭者にされて、公の所には出されなかつたのだ。世は、鎌倉時代から、室町時代德川時代とうつりかはつても、漢字は益盛に用ひられ、漢文はいよ〳〵發展し、公文はすべて漢文でなければならなかつたのだ。少數の國學者が、和文假名書きを主張したけれども、未だ天下の大勢を動かすことは出來なかつた。唯和漢混和文といふものが、明治今日の國文の基礎を作り、假名交り文(反對にいへば漢字交り文)を起したのである。而してこゝに忘るべからざるは、草双紙(正しくは臭草紙)が挿繪の周圍に滿面假名專用文にて盛に刊行され、これが社會一般の人に愛讀され、これが爲めに下層の人も、文學の恩惠に浴することが出來るやうになつた。この順序からいへば、明治維新の天地は、假名專用文が採用せられさうなものであつたが、反對に漢字漢文の跋扈を來し、假名文字は再び姿を隱すやうになつた。そこで假名は漢字に振らるべき振り假名である、漢文讀の際に棄てもよい棄て假名である、なほ强くいへば、漢字が本字であるからには、假名は僞字(クワジ)である。かやうに假名は賤まれたの

で、ランプと假名書きにしては、文字でないとおもふから、洋燈といふ漢字をあて、メッキは洋杖とあて、パンケチには洋巾とあて、マッチには燐寸と書き、タバコには煙草、キセルには煙管、ビールには麥酒、メリヤスには莫大小など、色々苦心して漢字を充て、甚しきはパノラマに幢の字を作り出し、餘計な骨折をして悦んでゐるのは、今日教育ある社會の狀態ではないか。これとりもなほさず文字の迷信ではあるまいか。タバコやキセルを煙草煙管と書くのは、意譯であらうけれども、この漢字をかやうによませるのは無理である。タバコのタバといふ字とキセルのキといふ字は同じ字だといふやうな滑稽が起つてくる。鍋屋が鍋なほし代の受取書に、邊代と書いた話がある。これはワタナベのナベといふ字のつもりであつたさうだ。このナベ的滑稽は、漢字の宛字といふもので、教育ある社會にもなほ行はれてゐることを知らねばならぬ。

「口惜」は朽惜の宛字、「仕事」は爲事の宛字、「面倒」は目厭ひと書くべきもの、「六ケ敷」は鬱悶しくと書くべきもの、「名殘」は波殘、「味方」は身方、「足袋」は單皮、「生憎可惜穴憎」は嗚呼憎と書くべきもの、「詮方」は爲ん方と書くべきもの、「稲荷」は稲生、「許

嫌」は言名付と書くべきものであるのに、今日になりては、その宛字が通用字となつてゐるから、正しい漢字に書いても、却つてその方が人には讀みにくいやうになつてゐる。理窟からいへば、渡邊のナベ字的で、不合理である、その不合理をも不合理と知らないで用ひてゐるのは、漢字に對する一種の迷信ではあるまいか。

ポンプに喞筒と書き、サーベルに洋刀と書き、ダイコンに蘿蔔と書き、ニンジンに胡蘿蔔と書き、アブラナに芸臺と書くなどは、實に馬鹿化てゐるけれども、これは假名書きにする事を嫌ふのは、やはり假名を文字でないとおもひ、漢字ばかりが文字であるといふ迷信からくるのである。この迷信が甚しくなると、漢文字のないものは、物そのものゝ存在までも疑ふやうになる。例へばサカキ(榊ゆる木の義、常綠木なり)といふ字がないと、その樹の存在までも疑つて、そんな木がありますか、どういふ字を書きますかと尋ねる。もし字がないといへば、そんな木はありますまい、そんな字がないからといふ。最後に榊といふ和字があることを示すと、やう〳〵安心する。そこで和字になかつた詞は、强ひて漢字を作り出すのである。迚(トテモ)鑵(ナガテヤ)八鑵(タラ)とか矢張(ハリ)とかいふやうな、更にわけのわからぬ漢字が無闇矢鑵(ムヤミヤタラ)滅茶苦茶(チヤクチヤ)に作ら

れる。この流儀でペンと書き、インキと書けば、澤山であるのに、鋼筆と書き、墨汁と書かねば安心しないといふのは實に一種の迷信ではあるまいか。支那留學生すら、日本の宛字には驚いて、東語奇字解といふ日本の宛字々書をさへ拵へてゐる。

それより一層甚しい迷信は、「忠」といふ漢字、「孝」といふ漢字を廢して、假名もしくは羅馬字で書くと、忠孝の觀念があらはれないものであるといふことである。これはよほどの學者の間にも行はれてゐる迷信と見えて、井上圓了博士や、志賀重昂氏の所說にも、こんな事が見えてゐる。忠孝といふ漢字を目のくさるほど見つめたところで、忠孝の觀念は得られるものでない。又忠即ち中心といふ字、孝即ち子老人を戴くといふ形象的の字解をいくらして見た所で、チウといひコウといふ觀念は得られるものではない。忠孝といふ觀念は、目に一丁字なきものでも、說敎や演說でくはしく口演すれば、會得されるが、どんな文字學者でも、忠孝の漢字を解剖して、この觀念が得られるわけのものではない。雀がチュー〳〵といふのも、烏がコウ〳〵といふのも、同じことで、唯音聲として意識のこもらぬものが言語でない如く、その言語をうつす文字は、音字であらうと意字であらうと、唯そをうつした文字だ

けでは、決して人の意識があらはれるものではない。同じ文字を同じ目で見ても、頭の違つてゐる人には、種々樣々な感を與へるのである。又知識の程度で、言語文字に對する觀念の深淺厚薄に差異のあるのは無論の事である故、文字そのものに或觀念が伴つてあらはれるものではない。西洋人がジーオーディー即ちGodといふ綴り字を見て、崇敬の意を起すからといつて、ジーとオーとディーとの文字に靈力があるのではない、忠といふ字孝といふ字が、他の漢字に比べて、どれほど尊いかといふことは、論定することが出來ない。もし日本人が忠孝の觀念を意識に有してゐる間は、Chū と書き Kō と書かれた羅馬字の上にも、同じ觀念があるべき筈である。今日漢字に慣れた上から、忠孝の代りに Chū, Kō と書いては何だか變な心持がするといふ迄で、もし漢字がないものとし、又漢字を知らぬ外國人に Chū, Kō を敎へると考へて見れば、何でもないこと、この Chū といふのはかやうな事、Kō といふのはかやうな事と、一々說明して初めてその觀念が意識內に把捕されるものである。チウコウと假名書きにすると、忠孝の事實まで滅亡してしまふやうに思ふのは、實に杞憂である。忠孝の漢字を全く知らない田夫野人でも、その事實を實際に行爲

にあらはしてゐるものも珍しくはない。忠孝の漢字をどんなにうまく書く學者でも、露探になつたり親不孝する人もまた珍しくはない。忠孝の漢字そのものに、忠孝の眞義が宿つてゐるとおもふのは、亦實に文字の迷信に過ぎない。

國語の假名遣を改正するのは國民性を破壞するのであると絶叫するのは假名文字に對する文字の迷信である。漢字を廢止すると、國家が衰弱すると騷ぎたてるのは漢字に對する文字の迷信である。羅馬字を外國の文字として、極端に排斥するのも亦文字の迷信患者となつたものである。又羅馬字でなければ夜も日もあけぬとおもつて、ローマ字ばかりを崇拜するのもまたローマ字に對する迷信である。文字はどんな文字でも、唯言語國語の符牒に過ぎないのである故、何を用ひようと、何で書かうと、その尊卑の別はないのである。どこの國の文字であらうが、便利なものなら勝手に用ひてよろしいのだ。それを何の文字でなければならぬ、何の綴り法はかへてはならぬなど、思ふのは、文明社會に於ける文字の迷信である。

言語には國語別があるけれども、文字には國字別がない、即ちローマ字を用ひてゐる國は、歐洲各國及合衆國もしくは世界に於ける歐米の植民地、或は領土皆國語

の別はあつても、文字は同じローマ字である。アラビヤ式の文字は國語の異つてゐる馬來諸島に行はれ、漢字は國語の異つてゐる安南朝鮮日本などにも行はれてゐる。國語の滅ぶのと、國字の滅ぶのとは、多少の關係がないではないけれども、國語を他國字にうつしかへるといふことは、決して國語を滅すのではなく、却つて國語を成長發達せしめることも出來る。國語の滅ぶのは實に國家の滅亡を意味する場合もあるけれども、國字の滅んで他國字になり、もしくは新國字になるのは、決して國語國家の生存問題に關係するものではない。唯國家社會の習慣といふ一大惰力があるので、急に國字を改造するといふことは、國家教育の上に一頓挫を起す恐があるだけで別に科學的の論據からして他國字を排斥し他國字の採用を否定する理窟は立たないのである。いで漢字は果して廢すべきものか、廢せらるゝ程に弱いものか、廢したらどうなるか、日本國字問題の中堅を衝いて見よう。

第七章　漢字の利害

漢字の利害については、夙に先輩が論じつくした、むしろ舊き臭い問題であつて、而してなほ繼續問題として、國字改良論の上には常に新しい問題として、あらはれるのである。まづ漢字の利を說く方では、井上圓了博士の『漢字不可廢論』があり、三宅雄次郎博士、市村讃次郎博士などの新說がある。又漢字の害を說く方では、舊く前島密氏の建白書をはじめ、故文學博士外山正一氏の『漢字破り』があり、大島正健氏の『漢字と假名と』いふ書があり、その他上田萬年博士、井上哲次郎博士をはじめ、坪內雄藏博士、白鳥庫吉博士、大槻文彥博士及三上參次博士また儒者たる那珂通世博士すら、漢字の不利を嘆かれてゐる。その他苟も國字改良をいふものは、すべて皆漢字の害毒をいはないものはない。即ち學者の數において學說の量において、漢字排斥は最も夥多であるに關はらず、容易にこれがやまらないのみならず、惡くすると益漢字の跋扈を來すやうになつてくるのは、抑もどういふわけであらうか、まづ漢字の利についての方面を見ねばならぬ。

漢字の利　獨逸のグルトベはわが國の文章を評して惡魔の發明 (Teufelserfindung) といひ、米國のホウィットニイは最もいやな書方 (Most disgusting writing) といつたといふことであるが。これは主として漢字を用ひ、また假名をその間に交へて書くのをいつたもので、漢字といふものは、西洋の學者から見れば、實に惡魔の發明で、又漢字假名併用は最もいやな書方である。しかしこの惡むべき漢字が何故世界の文明を凌駕するほどの大文明の日本人に、今なほ用ひられてゐるか、それには唯單に害毒ばかりあるのではなく別によき點があることを忘れてはならぬ。さていかなる點がよいかといふに、

第一、日本の歷史上使ひ來つてゐて、今日唯今まで用をなしてゐること。
第二、新造語の場合に簡短に作られて、又誰にでもわかること。
第三、支那人を敎へ、支那國を導くために必要であること。
第四、發音の變化を防ぐ故に、太古の書物でも容易く讀めること。
第五、文字美があつて、扁額や掛物をはじめ、詩歌などを書くに適すること。
第六、目で見わける便と、他に適用する便とある故に、習ふ時は困難でも、覺えてから役に立つ事が多いから、功は罪を償つて十分餘りあること。
第七、漢字は解剖して或意味をもつてゐる故、さほど字數を覺えなくとも、他の

類推が出來ること。

第八、略字を拵へて用ひ、又草書に書けば、さほど不便でない。

第九、東洋哲學は漢字の上に存し、隨つて日本の道德も漢字の上に存してゐること。

第十、語源を知り故事出典を知る上に便宜があること。

第十一、文學上音と字形との外に、一種の風韵を添ふること。

第十二、簡短なる言語をつくる利あること。

第十三、同音語の區別を明瞭ならしむること。

第十四、縱書にも横書にも左右いづれにも書けること。

その他種々漢字の利を說く箇條も多いけれど、要するに枝葉の言で、漢字排斥に對する薄弱なる辯護說に過ぎない。そこで以上掲げた第十四箇條の漢字の利點について一々評論を加へて見よう。

まづ第一箇條は、漢字の利益を科學的に論じたのでないから、たとひ歷史上使ひ來つてゐても、不便なものであるといふことが知れた曉には、廢せねばならぬ。そ

れ故この箇條は、更に漢字保存論としては價値のないものであるけれど、論より證據、この箇條は事實の上で偉大な勢力をもつてゐるもので、漢字排斥論者がいかほど攻め來つても、容易に陷落させる事が出來ない金城鐵壁である。詳言すれば、日本語の最多數は漢字から來た漢語が多い、しかも今日唯今まで、誰も彼も漢字を用ひ、漢字排斥の論文も漢字で書かれ、漢字排斥者の名刺も漢字で書かれねばならぬ事實がある。而して日本三千年來の國書は、皆漢字である故、これを讀まずに居るわけにはゆかぬ。而して明治の維新史も、日清戰爭史も、又最近の日露戰爭史も、漢字で書かれた以上は、永劫無究日本人がこの漢字を知らないですむわけにゆかぬ。たとひ數十年もしくは百年後に、全く國字から漢字を放逐したにしても、漢字はなほ研究されねばならぬ。もしどこがどこまでも日本人と漢字と離るべからざる因緣があるとすれば、決してこれを惡まずに保存しておかうといふ事になる。それ故この箇條は、歷史的の一大惰力を以て、感情的に實際的に、漢字保存論の本城となつてゐるのである故、いかに强硬な漢字排斥論者の力でも、到底陷落させる事が出來ない。

第二箇條は、世間であまり重視されてゐないが、漢字保存論としては、第一箇條よりも科學的であつて、音韻文字採用論者の堅陣を衝き破るほど、有力な說である。例へばサイクルまたはバイシイクルと書いたとて、その音字だけでは何の事かわからぬ。これを自轉車と漢字に書けば、未だ嘗てその車を見ないものでも、およその概念が得られる。これと同じく、オートモバイルと書いたとて英語學者でもグリーキの語源を知らなければわからぬ語である。然るに自轉車と漢字に譯して書くと、すぐわかる。即ち新造語の場合に漢字を用ひると、誰にも容易にその意味を知らせる事が出來る。なほ例をあげていふと、日淸戰爭といふ漢字の熟語を日本が用ひてゐるのに、歐米ではヂャパン、アンドチャナ、ウォーと長々しく綴らねばならぬので、後には面倒になつてきたから、ヂャプチャイ、ウォー (Japchai-war) といふ熟字を拵へた。これで見ても、音字國即ち漢字のない國は、新造語に不便がある事が知れる。又日本では日英獨佛米など、漢字で以て五國の國名を一の熟語の如く簡便に使ふ事が出來るのに、英語などでは Japan, England, German, France and united state of America と、非常に〳〵永々しい綴を以て書きあらはさねばならぬ。これを漢字風に J, E, G,

F and U.S.A としても、何の事かわけがわからぬ。この故に日本でもし漢字を廢した場合には、丁度英語のやうに、ニホン、イギリス、ドイツ、フランス、ベイコクなど一々面倒ながら國名を列記せねばならぬ不便を來たすのである。それ故新造語の場合に、漢字がいかに便であるかを知れば、容易に漢字排斥論に贊成することが出來ない。而して哲學、心理學、倫理學、論理學、社會學、人類學、文法學、脩辭學、博物學、理化學、生物學、天文學、地文學、地質學、採工冶金學、機械學、電氣學、工學、力學、兵學、あらゆる新科學の上に新造語を必要とすることは、今後日本文明の發展と共に、誰しも認むべき事である以上は、漢字で造語すれば、誰にでもわかるのに、假名やローマ字や、外來語殊に拉典語源や希臘語源の歐洲語を輸入して書けば、その新造語の發明者は、一々社會に向つてその說明をせねばならぬ一大不便がある。而かもこの說明が社會一般に向つて出來るものでなく、一々辭典や語典の上で厄介をかける事になる。要するに新造語は、今後一層增加することであれば、漢字はこの場合に於いて、世界第一等の文字である。この世界第一等の文字を以て、早く社會に新語の意味を傳へる便宜があるとすれば、たとひ漢字は初め習ふときに困難であつても、この新造

語の場合に於て、音字國に幾百倍勝つた利を得られるから、教育や知識の進歩は、敢て音字國に劣らないのみか、偶音字國を凌駕することも出來る。現に日本が明治年間に長足の進歩をしたのは、この漢字の新造語が與て力のあつたといふ事を忘れてはならぬ。

如上の議論は漢字保存論中の最も有力な說で、假名專用論者は、常にこの鋭い論鋒の前には立ち向ふ事が出來ない故、歐洲原語輸入一點張で防ぎとめようとしても、到底その効を奏する事が出來ない。いかなる漢字全廢論者といへども、確にこれは漢字の一大長所として認めざるを得ないのである。しかし新造語のこと、多くは專門の事業に屬するものである故に、この長所が漢字にあるからといつて、漢字を一般の國字とするのが便利であるといふ議論は成立しない。例へば、自動車といふ漢字を知つた人ならば、意味も知れようが、漢字を知らぬ人はジドーシャと假名で書いても、Jidōsha と羅馬字で書いても、唯その音のみを聞いてかくいふものであると思ふ丈けで、何の意味かわからずに用ふる事にならう。即ち語源を悉く知らせて、言語文字を用ひさせようとするのは、空理空論に過ぎない。もし漢字の

利を字形で語源を知らせる者であるとすれば、鯨の字は魚偏であるから、今日の動物學で、海獸である事に反してくる。その他木偏や、竹冠や、三水や、土偏や、金偏や、石偏に書いてある文字で、動植礦物の諸科學に矛盾したものがある故、一般にこの漢字形の利を說くわけにもゆくまい。要するに新造語の場合に、漢字の利を認める事は誰も拒む事は出來ないけれども、一般の國字と、學者用の文字即ち特殊文字との區別を立てゝ考へる必要があるまいか。

次に第三箇條、漢字は支那人を敎へる爲めに、又導くために便宜であるといふのは、政略上の問題であつて、支那四億の人口のみが將來日本に密接な關係を有してをるものとすれば、歐洲語のすべてをすてゝも、日本國家の將來は、この支那人丈けを風靡して、優に世界を壓倒してゆく事が出來る故、漢字漢語を歐米に輸出すべきである。しかし日本は支那の外に全世界を相手として立たねばならないから、支那人を敎へ支那人を導くことばかりを日本の天職とするわけにはゆかない。

なほ退いて考へよ。支那は果して漢字で救はれるものであらうか、漢字が果して支那の普通敎育を實施するものであらうか、而して支那人といへども、文明の思

想が增してくると、音字で支那を改革しようと論ずるものが出來てこよう。又その間には、歐洲各國語がそのローマ字を以て清人を蠶食する事をも忘れてはならぬ。即ち日本人が漢字の同字國であると悅んでゐる間に、歐語は支那を風靡する恐はあるまいか、文脈からいへば、支那は歐語と同文國である。支那と日本とは全く異文國である故、支那人は日本語を習ふよりも、歐語を習ふ方が便利である。又支那語をローマ字で書く事が出來ないといふけれども、それは一種のローマ字を用ひるから、自然符號が多くなつてきて書けないのであるが、もし平上去入の四聲を各別にあらはす丈けのローマ字少くとも母音及撥音文字を示す四種のローマ字を發明して支那人に用ひさせれば、日本の假名は遂に失敗し、日本の漢字交り文は遂に壓倒されてしまふことは、瞭々火を睹るよりも明かである。

要するに、漢字を用ふるのは、唯支那と同字國であるといふ目さきの感情上の問題で、永遠に支那を經營する大政治家の意見とは思はれない。こゝ暫くの間漢字を用ひることが支那との關係を保つ上に一大必要があつたにした所で、これは唯支那に關係すべき特殊の人だけで、これを以て日本全國民の普通教育の上に望む

ことは出來ない。それ故支那との關係を說いて、漢字の保存を主唱するのは、全然非理ではないけれども、特殊教育と普通教育とを混同したものである。支那人關係からいへば、漢字も純粹な漢字(即ち和字和語の文字を除いたもの)を用ひ、又漢字のみならず、漢文をも十分に學習せねばならぬ。漢文もまた唐宋的でなく、清の時文を學習せねばならぬ。かくて日本人には皆漢文清文の必要があるといつて、普通教育の上に漢文の利を說くのは、甚だ迷つた議論である。支那利導のために漢文の必要を說くのは全然特殊教育の上でなすべき事で、外國語學校の一分科で澤山である。國字改良國語發展の問題とは、殆ど同日の論ではない。

次に第四箇條を主張する人の言に曰く、論語は二千年以前に書かれた古書であるけれども、漢字であるから今日も讀めて、その意義がすぐわかる。もし源氏物語が漢字漢文で書いてあつたれば、今日の人が見てもすぐ讀めたであらう。言語の發音は變化するもの故、音字は發音が變ると同時に、古廢語となつて讀めなくなるけれども、意字はどんなに發音が變つても讀める。支那四百餘洲には無數の方言があつても、漢字といふもので思想が一統され、意志が貫徹されてゐる。日本でも

漢字がなければ、青森人と京都人と薩摩人との意志が通じなくなる。假にこの三ケ所の言語を發音のまゝに音字で書いたならば、彼此の間の思想交換は直に杜絶されてしまふ。この點から見ても、漢字は必要缺くべからざるものであると。

いかにも、これは漢字の一長所であるに違ひない。しかしこれと同時に、方言の分岐を一層多くし、國語の統一を妨げることが夥しい。漢字が書ければ目で見るから、音は各地各所で種々にかはつてゆく。異時代で發音のかはるのは言語の變遷上、仕方のない事であるけれども、同時代同國民で發音が異つてくるのは、漢字の弊である。即ち發音が異つても、文字を見ればわかるから、敢て發音を一定しようといふ考が起つてこない、これ實に支那が今日のやうに方言を多くした所以で、又日本國の方言が容易に撲滅されないで、國語が統一されない所以である。發音がかはつても永却無究同じ文字を用ひねばならぬといふのは、一寸便利なやうで中々不便である。しかも教育上國語の統一上、甚だ有害である。而して國語の統一といふ事が、いかに國家の消長國民の愛國心に關係するかは別冊『應用言語學』に縷々述べたとほりである。漢字が國語統一の妨害となるとすれば、この第四箇條は

更に値のない議論である。しかし唯古典學者にとつて、この箇條が有益であることだけは、吾人といへどもなほ許しておかう。

第五箇條の文字美は、いかにも爭ふことが出來ない漢字の長所である。扁額や詩歌の短冊は片假名やローマ字で書くわけにゆかぬ。いかにも漢字は美術である。しかし文字は果して美術であるべきものか、どうか。吾人は茲に後藤牧太氏の言を引用して吾人の論旨を助けたいと思ふ。

元來必用物を玩弄物に兼用しようといふ、それが抑の間違だ。たとへば鍬の實用は地を掘り土を崩せば足りるので、地を掘り土を崩すには固より少しも裝飾の必要がない。それを今床の間の裝飾物としようといふには、何か裝飾をつけ加へたくなるは自然の勢だ。それから種々の形のものが出來る。そこで之を實用に供しようといふ段になると、甚だ不便である、或は全く用をなさない。(中略)文字を道具と思はずして、有難いもの貴いものと思ひ、書を美術の如く扱つたのも、畢竟は漢字の數が多く、又其一字〳〵の畫も多くて、種々に形を變ずる事が出來る所から起つた事で、これもやはり漢字の弊であるとい

はねばならぬ云々。

實に漢字万能論者を罵倒して遺憾なき名言である。いかにも飾の付いた鍬で田は耕されぬ、漢字があつては普通教育の妨害になるといふのは尤の次第である。けれども文字は美素を要しないといへば實にそれまでゝあるが、漢字は世界の文字中文字美としての長所だけは確に有してをることを認めてやらねばならぬ。文字美といふことは、人の思想感情を和らげる上に極めて有効なもので、しかも意味を傳へる文字の用をなしつゝ、美術であるといふのは、東洋人の到底棄てる事が出來ない趣味がある。西洋でも文字美を好む所から、獨逸の黑文字即ち龜の甲文字が出來、又英佛の書でもアルファベットに色々裝飾して印刷する事もあれば、綠門やイルミネーションのローマ字にはその字に飾をつける事が行はれてゐる。しかもいかに苦心して飾をつけても、その文字美は到底漢字美に及ぶことは出來ない。そこで他のすべての關係を離れて唯文字美といふ事から見ると、漢字は世界第一等の文字といはねばならぬ。

しかし、これと同時に篆書楷書行書草書など種々雜多な文字が出來て、普通教育

上には到底行はれない姿になつてくる弊がある事を忘れてはならぬ。平假名の字美は音字としての字美を永く世界に誇るに足るけれども、漢字は意字であつて字數が數万あるので、全く繪畫のやうな美術を文字の上に存してゐるのであるから、美術であるだけそれだけ多く弊害も多い。即ち文字學上から文字といふ資格に對して、非常な缺點を有する事になる故、漢字の字美を唱へて漢字保存を主張するのは、唯々一部の好古家骨董家のためにのみいふべき事で、これを以て一大發展をしようといふ日本全國民に向つて望むべき事ではない。即ち漢字を美術として書きあげる迄には、幾十年の歲月を經ねばならぬ、たとひ幾十年を費しても、天性美術に緣のないものは、漢字美を書きあらはす事が出來ない、換言すれば、日本全國民に向つて皆美術家たれといふことが不合理である如く、漢字美を唱へて漢字を主張するのは、甚だ無理な註文といはねばならぬ。

第六箇條の漢字の功罪相償つて餘ありといふのは、一寸人を敬服させる論であつて、その罪のある所を確に認めた上で、その功を誇らうといふのである。即ちその功とする點は、前記の他の諸箇條を包含してゐる。即ち殊に漢字は一見して目

に入り易いといふ點と、一つ覺えておけば他に適用されるといふ長所を主張したものである。いかにも音字よりも漢字は目で見る便はあるけれども、多畫のものは中々見わけがつかぬ、殊に紛はしい同形の字がある故、全然便利といふ譯には行かぬ。余が經驗によるに、漢字の活版校正は時々目がだまされて間違ふ事がある けれども、英文などは一校で決して誤る事がない。これは音字は讀んで校正するから、誤植は讀めない故、誤を發見するに便があるといふ事が一方の理由にならうけれども、又漢字が紛れやすいといふことが、他方で立派な證據となるのである。

活字のなかつた時代は皆漢字を太く書いたものだ。太く書けばこそ目に入り易いけれども、今の活版のやうに五號六號七號などいふ漢字になると、決して目に入り易くはない。醫學博士の大西克知氏は、學生の近視眼の一豫防策として漢字の活字の害を述べられてをる。(國語改良異見二百六十頁以下)文部省令でも、教科書はすべて四號活字以上の文字を用ひさせる事にきめてあるのも、漢字が目に入りにくい一の證據である。それ故漢字を唯單に目に入り易いといふ事で主張するのは、完全な議論ではない。

次に一字憶へておけば、他に適用がきくといふのは、漢字の利であると、同時に、又多大なる漢字の不利を廣告する者である。例へば『行』といふ漢字を一つ覺えてをる。「孝行」のコーも、「行狀」のギョーも、「行燈」のアンも、「正行」のッラも、「行く」のユクも、「行ふ」のオコノーも、みんな一つの字で通用させてあるのは、その混雜と不便とは到底御話にならぬ。なるほど一の漢字で新造語を見た時に、その意味を適用して、その新熟語の意義を知るだけの便は無論あるけれども、全然この適用といふことが、漢字の長所として永く國民の用をなすものとは思はれぬ。音字でもそのサフィックスとプレヒッキスとを覺え、その語源と語幹と語尾とを覺えておけば、他に適用がきくから、この點からいへば、意字も音字もそれほど甲乙はない。唯比較的漢字は適用が他の音字に較べて、正確に意を傳へる事があるといふ迄で、長所は長所であるに違ひないけれども、この長所あるが故に、その弊害をも許容せねばならぬといふほどに難有くはない。故に漢字の功罪相償つて餘裕があるといふのは、漢字を業とする專門家にとつての申分で、普通一般の現時の國民の上に、又は、未來永遠の國民の上には、むしろ有難迷惑といはねばならぬ。

第七箇條は漢字の害を論ずる人に對しての辯護で、いはゆる漢學者が漢字保存の名の下に漢字の利益を主張する申分であるが、前に述べた如く、漢字の六書的解剖では、いくらもその語義を明白にする事が出來ない、例へば『忠』といふ字を中心、または口と心と違はぬやうに五寸釘をうちこんだ字であると敎へた所で、なほ「チウ」といふ觀念は與へられないのみか、心といふを形象的に說明しても、生徒は唯不思議に思つて、一層疑を增すばかりである。又『孝』の字を解剖して、老人子を戴くさまとした所で、老の字が何故に年が長じたものであるか、說明がつくまい。又老人を背負ふことが親孝行だといつた所で、孝行の觀念を與へる事は出來ぬ。『尖』は大の字の上に小の字があるから尖るといふ意を傳へるには便利であらうけれども、何故「小」といふ字形がチヒサクて、「大」といふ字形がオホキイのか、說明が出來まい。まして大の字の上側に一點をうては「犬」といふ動物になり、大の字の下へ點をつけるとフトイといふ字になるのは、どういふ譯であるかと推究すれば、六書先生も殆ど困却の極に達するであらう。かの六書の說明で、漢字敎授を面白がらせようといふのは、日月をあはせて明の字を作る位の程度に止まつてゐて、その外はかの諧聲といふもので、扁や冠でその部類を知らせる便があるに過ぎない。しかし扁や冠ばかりをあてにして、その他部分を見て讀む時には、いはゆる百姓讀み油桐讀みといふものが出來て、漢字の音が非常に混亂されてくる。百姓讀もイニウ、イシユツ(輸入)や、ワイロ(賄賂)トウチヨク(當直)ぐらゐに止まつてゐればよいけれども、何もかも百姓讀にされた日には、漢字の發音は總崩れになつてしまふ。

とにかく漢字を分解して考へれば、一々覺えなくとも悟されるといつて、漢字の利益をあげるのも、實は苦しい漢字保存の辯護說で、偶以て漢字の不便であることを自白するわけになる。それ故第七箇條の申立は無効である。

次に第八箇條のも、漢字は困難でないといふための辯護說であるが、畧字を多くすれば多くするほど、意字たる漢字の特色を失つて、遂には何もかも區別がつかなくなつて、音字にせねば收りがつかなくなる。數万の中五十字や百字の畧字があつた所で、漢字の困難を防ぐほどの有力な材料とはいはれぬ。それ故にこれも同じく漢字の利を說く申立としては、採用が出來ない。

第九箇條の漢字と道德との問題は、いはゆる文字の迷信で更にとるに足らぬ說

である。忠の字を「カナ」で書かうが、Roma 字で書かうが、更に言語の内容を増減する事が出來ないことは、すでに文字の迷信の章で述べたとほりである。

但し東洋哲學を修める上に、漢字が利益あるといふのは、至當な論である。東洋哲學ばかりでなく、東洋歴史、否實に日本歴史、日本文學などを修めるにも、漢字は是非とも必要である。それ故かゝる研究をやる人には、無論漢字は必要な者である故、十分に學習せねばならぬけれども、これも又特殊教育に屬すべき事で、國字改良や國語統一の問題とは大分縁遠い話といはねばならぬ。

第十箇條の語源を知り故事出典を知るために漢字が入用であるといふのは、一應聞えてをる。即ちムジュンとかエイキョウといふ語を唯音字で書いたのでは、更に語源も故事、出典もわからなくなる。「矛盾」とかいて莊子の矛（ホコ）と盾（タテ）との故事を知り、「影響」と書いて影の形に應じ響の聲に應ずるといふ語源を知る便宜は、無論漢字そのものにあるのであるから、かゝる語が存する間は、漢字保存は誠に理の當然であるといはねばならぬ。しかし語を保存する爲に漢字を保存せねばならぬ必要は、言語學者のみの仕事で、國民一般はそんな苦勞を厭ふのである。むしろ耳できいてわかる語を採て、故事出典の漢語を棄てることを望むのである。多忙に多忙を重ね來る國民はこんな漢語はその漢字と共に棄てゝしまつて、耳で聞いてわかる語に代へようといふのであるから、故事の趣味が含まれてをる漢語を捕へてきて、漢字の利を説いても國字改良論者は更に驚かないのみか、却てそれをば漢字の不便を證明する材料に用ふるである。但し文學上かゝる意味深長なる漢語と漢字とを廢してはどうであらうかと、美辭學的修辭學的に論じてくると、國字改良論者も茲に一つ頭腦を煩はさねばならぬ。即ち次の第十一箇條は漢字崇拜家の得意なる申分である。

實に第十一箇條の文學上漢字の風韵を説くのは、漢字保存の有力なる根據である。坪内博士もその『新國字論』中にいはれた如く、

女郎花鶏頭花など、實用上より見ればこそ甚しく不便なれ、之れに用ふるものとしては、多少意外に餘韵を表示す。何となれば、彼等は皆隱喩なればなり。嬋妍皚々燦爛の如き字を見よ、その意の外その聲の外、別に一種特得の添物ありて、讀む者をして詩思に觸れしむ。即ちその女扁白扁火扁なることは、一種

の風韵を添ふるものにわらずや。

然り、修辭學上比喩の直喩と隱喩とを問はず、漢字がそのメタフォルの意義を傳へる得色は、確に認めねばならぬ。しかしこれは文學上の話であつて、普通一般の敎育には望むべき限ではない。又文學といふものは、唯この漢字のメタフォルの用法にのみ據りて存立すべきものでない、唯文學上に漢字の味を添へるといふ迄で、文學の大體の上については、それほど有益な者ではないのだ。但し漢語で味のあるのは、漢字で書かねばその妙味を傳へる事が出來ない間は、日本の文學は到底漢字を棄てるわけにゆかないかも知れぬ。

唯しかし國字改良論者は漢字によらない新國語の、新文學の更に大いなる文學を永遠に向つて希望してゐるのであるから、過去の文學上漢字味があるとて、永遠にこれを守つて行かうとはしないで、古文學は古文學として漢字と共に祭りこめてしまはふといふのである。そこでこの折角の第十一箇條の申立も唯過去文學者一部のためを謀るもので、將來世界的大文學を無視し、かつ國民敎育を忘却したものであるといはねばならぬ。

第十二箇條は、第二箇條の新造語の場合と連關してをる問題であつて、漢字で造語する時には簡短で濟む。この點からいふと、英國などで、拉典オリジンの語が長くなるからといつて、土語のアングロサクソン語の簡短なものを選ぶのとは正反對であつて、日本語における漢語はクラシックとして排斥することが出來ないのは、即ち固有の日本語でいふと長くなるを、漢語でいふと短くなる便利があるからである。さて世の中が進歩するに從つて、長い語は甚だ不便であるから、自然短い言語を用ひるやうになるのは自然の傾向といはねばならぬ。そこで漢字はあくまでもこの漢語と共に存在して行かねばならぬといふのが、本箇條の主眼である。

いかにも、その通り、漢語は簡短である。しかし漢字の特色は孤立語をあらはすのが本色である故、『勉』といふ一字で濟むべき筈であるのに、『勉强』といふ長い熟語を作らねばならぬ。そこで『ツトメル』と『ベンキョー』とは同一語ではない、商人などが品物を安く賣ることを『ベンキョー』といふが、この場合に『ツトメル』といふわけにはゆかぬ。さて『勉む』と『勉强』と二語あるのは、すでに漢字が孤立語なる性質を失つて、熟字としてあらはれたのである。なほ『勉强』といふ字の解釋になると、勉の字は解

けても、强の字は中々ときにくい。こんな解きにくい語でも、漢字の熟字として用ひられる上は、漢字で書かうが、假名で書かうが、差支ないのである。假に數歩を譲り、ベンキョーといふ字音だけは簡短であるにしても、必ず漢字を二字か三字か書いて、一の熟語としなければ言語をなさぬ事となれば、漢字の特長を失ふのみならず、書く上の不便は非常なもので、例へばスヽメハゲマスといへば長くなるやうであるけれども、『奬勵』と漢字二字書くのは、三十一畫の運筆を費さねば書けないとすれば、更に漢字の便はないのだ。

漢學者は漢語の熟語をやめて、なるべく一字ですむやうにしたいといつて、國字改良論に反抗するけれども、漢字はすでにその本來の孤立語たる性質を失つて、大抵熟語となつてゐる故、一語一字でさへ多畫でこまるのに、二字三字書きつゞけねば一の語をなさぬやうな漢字を、永久われ〳〵が用ひねばならぬといふのは、實に不都合千萬ではあるまいか。漢字を用ひてゐる間は一字では語をなさぬ故、千萬無慮の熟語が出來てくる。現に日露戰爭開始後でも、いろ〳〵な漢字の熟語が出來た。この熟語の發生を防ぐには、漢字を廢するのが根本的治療法である。それ

に漢字は廢しないでおいて、熟語の出來るのを嘆くのは、根本を倒さないで枝葉の茂れるのを嘆くやうなものである。とにかく漢字の熟語の音はいくら簡短であつても、一字ではあまりに簡短過ぎるので、他音と紛れるから、勢の自然でいろ〳〵の合併漢字即ち熟語が音の簡短を助けるために起つてくるのである。オソヒウッと書けば、十三の簡易なる字畫で濟む、これを『襲擊』と漢字でかけば、三十九畫の複雜な筆畫であらはさねばならぬ。苟も常識あるものゝ考から見たら、漢字熟語が便利なものと思はれぬ。

而して又必ずしも言語は發音が短いものがよろしいの、便利であるのといふことは出來ぬ。漢字音のやうにピン〳〵カン〳〵いふ單純な音では、耳で聞いて非常に紛れるから、言語としては甚だ不便である。換言すれば、漢字音は發音が簡短であるだけそれ丈け、他の語と紛れて、不完全極るものである。漢字漢語のあまり影響しなかつた奈良朝以前の大和言葉は、長いけれども却つて威重がある。今日でも丁寧な場合には長い語を使ふ『デス』は短い語であるけれども、高貴の人に向つては『デゴザイマス』といふ長い語を使ふのは事實ではないか。故に唯發音が短い

から便利であると斷言する譯にはゆかぬ。從つて漢字漢語はこの點について重寶であらうけれども、又大なる欠點がある事を知らねばならぬ。

第十三箇條は前條に關係してゐる問題で、假名字『シリツ』と書いては『市立』か『私立』か解からぬ。又コウシャクと書いても『公爵』か『侯爵』か『講釋』か解からぬ。そこでかゝる同音語を區別する上に漢字はやめられないといふ。

嗚、全體こんな同音語は誰が拵へたのだ。漢字といふものがあればこそ、こんな不都合な同發音が千萬無慮に續出してくるのである。即ち第十三箇條の申立は漢字の利を說くのではなく、むしろ漢字の弊を自白したのである。『アナタノ學校はしりつデゴザイマスカ』といふ語が會話にのぼつた時、話の意が通じないから『イチリツ』ですかとか、又は『ワタクシリツ』ですとかいつて、漢字の說明からしてかゝねば話にならぬのは、漢字で熟語を作つた天罰なのだ。『アノ人ハこうしやくニナラレマシタ』といつては解らぬから『キミシャク』とか『ソウラウシャク』とかいはねばならぬ不都合を來したのも、漢字を用ひた罰で、自業自得といはねばならぬ。もし漢字をなくした場合には、こんな同音語は無論滅亡してしまはねばならぬ。紛はし

い同音語を保存するために、無益な漢字を保存する必要がない。

漢字崇拜家はいふであらう、同音語は決して漢語ばかりでない、日本語にもハシ(橋)ハシ(端)ハシ(箸)、カキ(柿)カキ(牡蠣)カキ(垣)カキ(書き)カキ(掻き)など澤山あるではないか、それに漢字を充てたればこそわかるのに、漢字を廢したら更にわからなくなると。成程日本語にも同音語がないではない、しかし極めて少數である上に、アクセントで區別されてゐる、漢字がなくなれば、このアクセントが嚴密に守られる事になつて、少數の國語の同音語は誤りなく行はれよう。これには決して心配するに及ばぬ、唯かの漢字音の同音語になると無數であつて、舊字音假名遣の上で區別のあつたものは、發音の上で皆々紛れる。その他すべての漢字の音は例のチンプンカンである故、耳で聞いては萬が萬とも皆紛れる。唯二字つゞの熟語になつてゐるので、辛うじてわかるのだ。

漢字は目で見た上に味があるといふならば、ともかく、同音語を區別するために必要であるなどとは、以の外の議論で、更に採るに足りない。むしろ漢字は同音語を無慮に作り出すわるい文字であるから、廢止せねばならぬといふ決論を來たす

のである。

第十四箇條、漢字は縱にも横にも書ける、又左から横に、右から横に、どちらでも自由自在にかける、羅馬字などは、縱に書き又横に反對に書いては、丸で讀めなくなる。この點において漢字はローマ字に勝つてゐるといふのである。

かくいへば、埃及の畫文字は一層便利なものといはねばならぬ。宮殿の柱などに、この畫文字を書く時は、兩方から相向きあふやうに立派に書かれる、又宮殿の內側で段々奥に行くに從つて、兩方の壁の文字は相對して立派に書かれる、縱でも横でも、左からでも右からでも、書き方においては自由自在である。漢字も畫文字から進歩したものである故、埃及文字の如く、書き方は自由勝手である。しかし書き方が自由であるが故に、漢字が一番よろしいといふわけにはゆかぬ。例へば汽車はレールの上しか歩るかないから、人力車が東でも西でも南でも北でもどつちでも向いてあるくに劣つてゐる。なほ人力車が山の細道や田圃の畦道を歩るかない故、人の足では勝手氣儘の方向に歩るかれるから、人の足が一番完全なもので、人力車はやゝ劣り、汽車は一番劣つてをるものであると斷言するのと同じである。

羅馬字は左からの横書一方向きで、不便であるやうだが、汽車がレールの上を瞬間に千里を走る快速力を有するが如く、文明進歩の上にはこの文字が最も有効である。即ち羅馬字と漢字との競爭は、汽車と人の足とで競爭するやうなものだ。而して假名文字は自轉車か人力車位に當るものであらう。人の足や自轉車や人力車は、皆それ〴〵の特長があるけれども、その力に限があつて、到底汽車と競爭する事が出來ぬ。

以上第一箇條から第十四箇條に至るまで漢字の利益を列記した申立といふものは、すべて皆一かどの理由はあつても、その裏面にはそれに倍した弊害と困難とが伴つてゐるのである故、文字學上から宣告すれば、漢字は大國民文明人の使用に適しないものであるとせねばならぬ。そこでこれから漢字の害を述べてみよう。

漢字の害　漢字には利があると同時に、また害のある方面をも忘れてはならぬ。吾人はつとめて自分の意見を述べないで、既に世上に公にされたものゝ中で、尤もであるとおもふものを述べてみよう。まづ大島正健氏の『漢字と假名』といふ著書の中に漢字の罪をあげていはれるのに、

第一、漢字には漢音あり、呉音あり、唐音あり、又音讀法あり、訓讀法あり、音訓混用法あり、啻にその文字を見てはその讀方を判し難きのみならず、物によりては讀聲に從ひて、大に意義を異にするものあり。

(例)古今集、古今著聞集。龍頭、饅頭。鈴、鈴。の類。

第二、漢字は音字としても、意字としても、共に不完全にして、わが地名人名の如き漢字を以て記すれば、普通の敎育普通の知識にては讀み難きもの至て多し。

(例)護良　宣長　慶喜　設樂　物理　足利　三枝　綺田　學文路　婦負　香美　指宿　功名　刑部　大佛　間　彭城　東海林の類。

第三、漢字を借り用ひたるわが文語には、全く無意義なる無益の虛飾文字多し。かゝる文字は本國の支那にてはその音聲に由り、多少の意味あれど、我にありては只空しき鸚鵡語となるなり。

(例)濛々(本音モングモング)　喈々(本音キアイ〳〵)　鏗鏘(本音カングツヤング)の類。これらは日本語でモウ〳〵、カイ〳〵、カウサウといへども、その音は當らず。

第四、支那語には平上去入の四聲の別ありて、同文字往々別意義を有すること あれども、日本にては音調によりて區別する法なきが故に、耳によらず目にのみより、ひたに學びにこれを學びて、前後の關係を考へあはせ、意義をとるより外に手段なし。かくて漢語に固有なるその用法の妙味の大半を失す。

(例)予(平聲ワレ、上聲アタフル)　鮮(平聲ナマウヲ、上聲スクナキ)　重(上聲オモキ、平聲カサナル)　長(上聲ヲサ、平聲ナガシ)　好(上聲ヨキ、去聲コノム)　樂(去聲ネガヒ、入聲タノシム)　惡(入聲アシキ、去聲ニクム)の類。

第五、漢語には四聲抑揚の妙あるのみならず、又韻の配合整へるが故に、その豪壯優美の詩歌音調に合ひて、能く誦するに足るもの多けれども、わが國の漢詩は猿間似のみ。

第六、わが文化は支那に負ふ所多ければ、大に漢語漢字の流行の感化を受くとも、思想はやはり日本思想なれば、文語と口語と相一致せず。元來漢字は單音語をうつすに適するものにして、精細緻密なる思想をうつすには適せず。故に漢字には浮虛誇大の語多し、從つて比喩語(手紙を朶雲、初を濫觴、嚆矢、權輿な

どいふ類。）多く實際世界の用語としては大なる混雜を生ぜしめ、思想の發達に妨害を與ふ。

第七、勞に勞を重ね、苦に苦を積み、字典韻府等を探りて、幸に古人の用言を見出し當つれば、なほ可なれども、無限の思想は有限少數の熟字によりて束縛することを得ざるにより、やむをえず自製の生字を生ず。（化學の如き不都合なる熟字の類。）かくて難澁なる文字行はれ、春風駘蕩の類の虛飾文字續出す。

第八、外來語を輸入して直接に歐米の思想を得べきを、漢字によりて妨害をなす。ランプを洋燈と書き、ストープを煖爐と書くが如し。又學術上の漢譯語は、一寸便利なるが如きも、一旦漢譯によりて誤りたる以上は、如何に悔ゆとも及はざるべし。或は恐る、將來敎育の進歩に大障碍を與へ、明治文學の歷史に大汚點を遺すに至るべきことを。

第九、是迄わが國の物名に漢字を附して錯亂に陷りたる例少なしとせず。「鶯」は支那の黃鳥にて、わが國のウグヒスにあらず、「鮭」は支那の河豚（フグ）にて、わがサケと同物にあらず、椿も杉もわが國のツバキとスギとに同じからず。かゝる類、動

物植物に甚だ多し。

第十、漢字は一音一語にして語尾語頭の變化なきが故に、同類の語にも皆別音を用ひ、隨てこれを寫すに別字を製造する必要起る。

コ、ニ（茲、爰、言、于、斯、此）

コレ（此、是、維、斯、茲、之）

スナハチ（乃、即、則、便、輙、載）

ミル（見、覯、看、睹、覩、視）

トル（取、執、採、把、將、攝）の類。

これら皆漢語にては用法あれど、日本語には不必要なり。

第十一、わが假名交り文には、漢文脫化の痕迹多し。例へばアリガタク（難有）、ナカンヅク（就中）、イハユル（所謂）、オモヒラク（以爲）、タトヒ（假令）、ユヘン（所以）など、自國の文法をも解せざる用法にして、亂暴もまた甚しく實に惡文字なり。

第十二、漢字はもと象形より起りたる一音一義の字なり、而してわが國は多音一義の國なり、多音一義の國に、一音一義の字を用ふること、錯雜紛亂を生ずる

は勢の免れざる所、漢字と國語とは、到底永く調和一致を保ちうべきものにあらず。

第十三、漢字を口語として用ふるときは、同音異義の語多く、屢誤解を生じてその弊遂に救ふべからず、やむをえず熟語の力を借り、平常使用の言語をして、益究屈ならしむ。（この攻撃は前に漢字の利第七及第十二箇條を粉碎するものである）

第十四、わが國の言語は、俗言において思想の發表法最も豐富なり。かく自由自在にいひうる身を以て、文に表はさんとせば、これに對する漢字漢語に困難せざるを得ず、不自由の極といふべし。いかなる苛酷の虐政者も、これに過ぎたる抑壓は施し得ざるべし。實に口語は漢字にて書き難きもの至て多し、又たとひ書きたりとて、假名を附せざれば意通せず、別に漢字の用を見ざるなり。

（例）アバレル、アブレル、ハグレル、グレル、ズルケル、ダラケル、トボケル、シヤレル、シヤベル、イタブル、イヂクル、ゴチル、バレル、アグム、ノメル、セツカチ、オボコ、ニヤケ、トンチンカン、チヤホヤ、ドタバタ、ボンヤリ、ドロ〳〵、トボ〳〵、チョロリ、キョロリの類。

漢字は到底これらの國語をうつすこと能はず、將來日本文學の發達は、俗言の盛に使用せらるゝ方面に向つて見ることをうべし。

以上の十四箇條は、悉皆漢字の害を說いたものであるが、これに對しては多少の辯護說もあるであらうけれども、つまり辯護說に止まつて、漢字が便利な字であるといふ事を立論することは出來ないのである。

次に漢字の困難な證據として、實際小學敎育に當つて實地の經驗をされた人の說を示さう。まづ兒崎爲槌氏の『國語科敎授法講義』に、小學兒童が漢字を誤まる實例が示してあるのを、その中の二三を抄記してみよう。

（一）字形の類似せるものを混用す。（誤字にあらず）

（例）熱が熟　大が丈　氷が永　針が計　快が決　老が先　育が盲　項が頂　弟が第　の類

（二）觀察の不精密に基くもの

赤が 赤 赤 赤 赤　菜が 菜 菜 菜

美が 美 美 美　善が 善 善 善 の類

（この類非常に多し兒崎氏は百有餘字を掲げたり）

（三）扁傍上下の位置を轉倒せるもの

昨を 佃　花を 芿　咲を 知　如を 呼　外を 夕　引を 弓

味を 和 とする類

（四）文字の所在より思想の混雜を來せるもの

氷を雪　右を左　左を右　升を合　間を中　問を 問（問ひの混用）

男を 畏（男女の混用）とする類

（五）類似せる意義の誤推より來れるもの

低を下　海を池　稻を 細（稻は田に作る故）　泉を 湶（泉は水に從ふ故）

船を 淅（船は水に浮ぶ故）とする類

（六）音訓の誤推に基くもの

虫を忠　皆を見ナ　狀を常　烈女を列女　天地を天池　朝廷を朝庭

賛成を參成　未だを今だ　暴を暮または慕　遺憾を意憾　とする類

以上實驗に成れる六箇條に照して見ても、いかに漢字が困難であつて、兒童を苦しめつゝあるかは知れる。即ち知識の收得は一に漢字の畫を覺える事に費されてしまふので、いかにも氣毒千萬である。吾人はなほその論旨を確めるために、一の實驗說を示さう。それは新井博次氏が『漢字の困難』と題して、敎育界第二卷第八號に揭げた文である。

（一）字形の類似より來れる誤。

愛を受　在を存、左　箸を著、者　攻を改、政　往を注、柱、住　告を吉、舌　畫を畫、書　とする類

（二）字形と意義との類似より來れる誤。

仕を居　返を退　毛を尾　頭を顏　とする類

（三）扁旁の一を以て音及訓を臆測する誤（百姓讀の誤）

試ヲしき　更ヲべん　否ヲふ　徒ヲはしる　樂ヲくすり　能ヲくま　健ヲたつ　とする類

（四）音訓の類似より來れる誤。

碗ヲぼん　納ヲつとむ　睦ヲむなしく　市ヲまち　承ヲたまはる、おこなはる、ありがたく、たてまつる　とする類

(五)意義の同一または類似より來れる誤。

塗ヲそめる　語ヲはなす　樂ヲおもしろき　葬ヲとむらふ　信ヲくはへる　椀ヲさら　とする類

(六)反對の聯合より來れる誤。

弱ヲつよく　授ヲうく　送ヲかへる　とする類

(七)因果の聯合より來れる誤。

涙ヲかなしみ、なく　治ヲくるしむ　賊ヲせめ、うつ　亂ヲしづめる　とする類

(八)群の聯合より來れる誤。

難ヲおん　鮮ヲてふ　衛ヲべえ　瓶ヲとびん　飾ヲかつ　難ヲありがたく　鉛ヲびつ　とする類

(九)列の聯合より來れる誤。

塗ヲうるし　涙ヲながす　積ヲちり　鹿ヲひつじ　絹ヲかなきん　蝶ヲはち　とする類

(十)假名の振り方の誤。

椀ハシ　綿ハタ　僅ハツカ　忘ハスレ　鉛ヘシ　易ヘキ　鹽ヘシ　とする類

(十一)音訓の誤。

志ヲざし　示ヲめし　甚ヲはなゝ　設ヲうけ　諸ヲしや　とする類

(十二)記憶に困難なる漢字。

衞　試　圖　能　召　留　速　尉　跡　往　影　使　舊　敷　染

難　倍　招　藝　堅　飾　敬　授　塗　退　忘　非　憲　肥　即

妨　叶　伐　穗　葉　活　材　睦　鉛　發　承　迎　示　碗　請

漬　消　箸　獨　飲

以上は、新井氏が學海指針社編の小學國語讀本卷七卷八中にある漢字の總計三百〇五字について試驗したものであるといふこと。而して右の第十二箇條の中、

第十條を除いて、他の十一箇條は悉く漢字の弊害と困難とを證據立てゝをるものである。

以上小學教育に十分經驗ある兒崎氏新井氏の實驗に徴して見れば、愈以て漢字の不便害毒が明に知れ渡つてくるのである。余はかゝる小學教育家の實驗說を見聞する毎に、小學教育の勞を感謝すると同時に、漢字の惡文字を一掃したい念慮がむら〳〵と湧いてくる。全體漢字の不便を知らなかつたのは、教育教授といふことが開けない時代であるので、今日のやうに教育教授に手が屆いてくると、その困難は日一日明瞭になつてくる。いかに漢字崇拜の井上圓了先生でも、小學教員を二三年つとめて御覽になれば、すぐ漢字排斥論者と御なりなされるであらうと思ふ。又今日の先輩で漢字をさほどに不便なものとおもはれぬのは、すべて皆不完全な教育を受けてきた人達ばかりであるからである。即ち昔の教育は理科も博物も算術も地理歷史もなく、唯漢字を習ふことゝ漢字を覺える事とが仕事であつたのだ。而して假名はウソ字として、漢字ばかり拾ひよみしてをればよかつたのだ。今頃のやうに漢字交り文が、立派な國字國文として行はれる時代になると、

教育教授が精密になつてくると同時に、兒童の頭も確實になつてくるから、いはゆる送假名といふものにも頗る疑を生じてくる。即ち『生る』と綴れば『生』の字はウマであるといひ『殆ど』と綴れば『殆』の字はホトンといふ字であると抗論して出るやうになるのは、決して兒童がわるいのではない、漢字が惡いので、兒童の頭は實によいのである。それで渡邊のナベといふ字もある、大和のヤマといふもある事を許さねばならぬ。兒童が數のヒャク(百)といふ漢字を覺えて、何でもこの字はヒャクであると思つてゐるのに、一百といふ時ビャクとなり、三百といふ時ビャクとなるのを聞いて、不思議なかほをするのも無理はない。まして百々とかいてモヽといひ、八百屋とかいてヤホヤといふに至つては、兒童は驚きかへつてしまふのである。否決して子供ばかり笑はれない、大人でも、またよほどの學者でも、次のやうな漢字の讀み方には、大閉口するであらう。

四月一日(ワタヌキ)　十六島(ウツプルイ)　十二神島(ヲツフルイ)
神樂師(カコトシ)　七五三(シメカケ)　七七五分(ミツヅキ)
不知山(イサヤマ)　五十子(イカンコ)　刑部(ヲサカベ)

世界文字學

汗(フサカシ)　纈纈(ハナブサ)　釋迦牟尼佛(ニクルベ)
八月朔日(ハヅミ)　背評(ヘコホリ)　等々方(トヾロキ)
掃守(カンモリ)　歌枕(カヅラキ)　十七夜(カナフ)
柘植(ツゲ)　子子子(ネコシ)　善知鳥(ウトウ)
大角集(オトヅメ)　眞繼(クレキ)　七寸五分(クツワタ)
坂戸(クワンゼ)　外山(コンバル)　結崎(コンゴウ)
穎娃(エノ)　安宅(アタギ)　愛甲(アヒカハ)
彭城(サカキ)　來海(キマチ)　設樂(シタラ)
悉支(シトリ)　七五三(シメ)　逸勢(トシナリ)
玄上(ハルカミ)　自明(コロアキラ)　擧周(タカチカ)
統理(ムネマサ)　愛發(チカナリ)　方々(スケマサ)
信々(サネノブ)　信々(アギタヾ)　方々(ツネミチ)
之々(ヨリユキ)　土々(ノリタヾ)　或々(ノリモチ)
象々(ノリガタ)　利々(カズトシ)　十十八(ソトヤ)

遠(マダキ)

黄領蛇(アオダイショウ)　水綿(アオミドロ)　紫柴(アサクサノリ)
藿臺(アブラナ)　溪蓀(アヤメ)　菟葵菁(イソギンチャク)
蟲蠶(イナゴ)　蠑螈(イモリ)　猪籠草(ウツボカヅラ)
蟾蜍(ガザミ)　蕪菁(カブラ)　聒々兒(クツワムシ)
水鷄(クヒナ)　龍蟲(ゲンゴロウ)　蠑螺(サヾエ)
胡孫眼(サルノコシカケ)　萊菔(ダイコン)　章魚(タコ)
露兜樹(タコノキ)　蒲公英(タンポン)　鰣魚(チヨトザメ)
幹螺(ツメタガヒ)　鴨跖草(ツユクサ)　紅娘(テントウムシ)
朱鷺(トキ)　水蟲(トビムシ)　蕙苴(ハトムギ)
玉蜀黍(トウモロコシ)　瞿麥(ナデシコ)　蛞蝓(ナメクジ)
胡羅蔔(ニンジン)　蚯蚓(ハサミムシ)　盤蟲(ハタオリ)
飯匙倩(ハブ)　蟾蜍(ヒキガヘル)　天鼈(ヒバリ)

(以上古事類苑姓名部に據る)

世界文字學

桧欅(ヘゴ)　斑蝥(ミチシルベ)　鴟鴞(ミヽヅク)
蜈蚣(ムカデ)　繡眼兒(メジロ)　毛蟹(モクズカニ)
伯勞(モズ)　馬陸(ヤスデ)　商陸(ヤマゴボウ)
守宮(ヤモリ)　浮塵子(ヨコバイ)　鷄兒腸(ヨメナ)
蜮(ヨメガサラ)

(以上理科辭典に據る)

一口(イモアラヒ)　三潴(ミツマ)　毛受(メンジユ)
圦皆戸(カマスガイト)　春日(カスガ)　芥原(クグハラ)
迫谷(サコダニ)　迫子(ハザコ)　信樂(シガラキ)
倭文(シドリ)　傍陽(ソヘヒ)　斑鳩(イカルガ)
筌口(ウケノクチ)　鼠谷(ヨメタニ)　潮來(イタコ)
樂々福(サヽラク)　我孫子(アビコ)　錢司(ラズ)
甑谷(コシキダニ)　顔戸(ゴード)　觴木(イカルギ)
鵠崎(ミサヾキ)　櫛山(タモヤマ)　臘數(シワス)

出雲卿(アダカヘ)　鵜巣(トウノス)　鬚川(ヒライ)
餓目(エノメ)　驫木(トドロキ)　蠶玉(アラタマ)

(以上實用地名辭典に據る)

又近頃啓成社で發行した難訓辭典といふ本は、全く漢字のよみにくいものばかりを集めた字典であるが、その漢字索引で調べて見ると、

一畫……二字　二畫……二字
三畫……二十六字　四畫……七十六字
五畫……七十四字　六畫……百字
七畫……百〇七字　八畫……百六十四字
九畫……百八十六字　十畫……百八十六字
十一畫……百八十六字　十二畫……百八十七字
十三畫……百六十六字　十四畫……百〇九字
十五畫……百十八字　十六畫……百字
十七畫……七十六字　十八畫……七十字

十九畫……七十二字　二十畫……五十五字
二十一畫……三十六字　二十二畫……三十字
二十三畫……十四字　二十四畫……七字
二十五畫……六字　二十六畫……二字
二十七畫……四字　二十八畫……一字

即ち總計に於て二千一百六十二字の難訓の漢字があるわけになる。又國語の一つの訓に、幾つの漢字を充てゝをるかを調べて見たが、一訓で漢字の二十個以上を充てゝをるものを表に示すと、次のやうになつてをる。

フサ……二十字　カズ……二十一字
トキ……二十二字　トモ……二十二字
ツナ……二十三字　ミツ……二十四字
スケ……二十五字　ヨリ……二十五字
シゲ……二十八字　ミ……二十八字
アキ……二十九字　トモ……二十九字

ナリ……三十二字　ヤス……三十二字
トシ……三十六字　チカ……三十七字
マサ……三十七字　アキラ……三十九字
ユキ……三十九字　タカ……四十一字
ノブ……四十二字　タダ……四十五字
ノリ……六十二字　ヨシ……六十八字

一訓で六十八回も漢字をつかひわけるに至ては、殆ど氣絶しなければ幸である。一訓で二十字を充てるさへ大變であるが、それ以下の十字を充て、四五字を充てるものは、又數へつくせぬほど澤山ある。難訓といふさへ恐ろしいのに、一字をいろ〳〵によみ、又一つの訓でいろ〳〵な漢字を充てるなど、誠に厄介千萬な話である。今は何といつたとて、古書に又現在の書に、こんな厄介千萬な漢字を用ひてゐるから、日本の漢字國は、實に情けないのである。この難訓辭典を見れば、いかなる漢字崇拜家も、漢字の害毒を悟るであらう。しかもこの辭典に漏れた難訓が、まだ幾千あるか知れないのである。

余嘗て英人にカラス(烏)といふ字の訓讀を聞かれた時、これは烏有といふ時ウとなり、烏賊といふ時イとなり、烏帽子といふ時エとなり、又漢文では、イヅクンゾとなるといつたら、その英人はしよけかへつて、いとゝ高い鼻のかほがしやくんで見えた事を記憶してゐる。こんな不都合な漢字を使つてゐては、到底外國人に日本語を傳播しようなどとは夢にも思はれない事である。漢字は本家の支那よりも、日本の出店の方が實に幾十倍もむづかしい。今いかなる學者でも、漢字入りの日本の地圖を見て、外人にこれは何といふ地名だと問はれて、一々答へる事は出來まい。實に日本人としては、大きな國辱ではないか。あゝ日本人は、日本人の人名や地名を自ら讀むことが出來ない、あはれはかなき蠻民であるといはれても、一言の返答がないではないか。それ所か、自分の國はニッポンか、ニホンか、わからぬ。自國の首府はトウキョウか、トウケイか、わからぬやうなざまになつたのは、漢字を用ひたからである。かくの如く漢字の害の方面ばかりあげて見ると、實に漢字は惡魔の發明した惡文字である故、極力これが撲滅に從事したくなるであらう。

しかし、漢字は日本と歴史的の關係があつて、全廢撲滅するわけにゆかぬから、せ

めては漢字を學者特殊用の文字として祭りこめて、漢字の長所と美點とは永く古典學の專門部に殘しておくべきものであらう。

かくいへば、音字採用論者から見ると、甚だ煮えきらない議論のやうに考へるであらうけれども、學者としては、文字學上、言語學上、一概に漢字を排斥することが出來ない。而してこれと同時に、普通一般の思想交換の要具であるべき文字が漢字であるのは、甚だ不都合である故、この方面においては漢字を排斥することが道理である。

世には、先年假名會や羅馬字會が起つたけれども遂に滅んで、漢字はその後依然として用ひられてゐる故、漢字排斥は到底出來ぬ事である、又してはわるい事であるやうに思つてゐる人もあるやうだが、歴史といふことを離れて、唯單純に文字學の上からいへば、漢字ほどわるい文字は世界にないのである。讀者よ、極めて公平に着實に考へて見たまへ、小學校の小供で『いろは』なり『五十音圖』なりの假名を敎へられたものが、直にその文字を使つて自分の思ふことを書き綴つて、他人に示して自分の意思が發表された時の愉快はどんなものであらうか。もしこのまゝで

ヅン〳〵進んで行げば、尋常小學校でよほどの智者になれる、高等小學校では、十分にむづかしい科學を教へても、文字に苦心しない故、自分の語と先生の語とで、あらゆる知識を得て、立派に國民として、活動する事が出來るのであらう。所が、漢字といふものがあるので、折角尋常一二年生までに音字で進歩した所を、急に一頓挫させてしまふ。それから三年四年と進んで行つても、漢字を習ふのが大仕事で、他の知識を得る餘裕がない。殊に中學校や高等女學校に入ると、急に漢字が增してくるから、唯に漢字のために泣きくらし泣きあかしてゐる。地理歷史博物修身の教師も、國語教師と同じく教科書中の漢字の講釋に時日を費してゐる。殊に奇な現象は、英語教師が譯をつけても、漢字で書いてはわからぬ故、又譯語の漢字の講釋するといふ始末。さて又家庭でも振假名つきの新聞や雜誌を讀ませて、やう〳〵に漢字の意味がわかるといふ有樣、實に困りきつた事になつてをる。

文部省は社會の有樣にかまはず、國定讀本でドシ〳〵漢字をへらし、丸で漢字を教へないやうにし、又假名遣を棒引にしようといふほどの急進過斷の仕事を始めてゐるのに、中等教育は社會との關係があつて、容易に改革が出來ない。社會では

文部の仕事を馬耳東風に聞き流して、更に顧みないといふ有樣、甲論乙駁紛々擾々、到底歸著する所を知らないで、又例のくづ〳〵に丁つてしまふかも知れぬ。余不肖ながら文字は國家教育の上に重大な關係をもつてゐるものである事を信ずるが故に、この際普く世人に訴へて、われら國民のとるべき大方針を示し、徐々著々とこの方針に向つて武歩を進めねばならぬことを勸告しようために本書を著はしたのである。

いかに思ひかへしても、幾度思ひめぐらしても、漢字は歷史的に日本國民の言語と密接な關係をもつてゐる故、全く國家から放逐する事は出來ない故、學者教育あるもの、又紳士といはれるほどのものは、今後幾十年はなほ漢字を習ひ漢字を知らねばならぬことであらうが、しかし又幾度思ひなほしても、いかに思ひかへしても、漢字は普通知識の傳播の上に有害な文字である故、これを排斥する方向に向つて進まねばならぬ。その方法としては、文部省一局に文字改良の事を任かせないで、內閣と國會とが一般の國字として音字採定の事を議決し、假名もしくはローマ字專用で官の公文書屆書をかいても受けつける事にし、教科書ばかりが漢字を節減

するばかりでなく、新聞雜誌著作などもすべて漢字を省略し、專門書の外はすべて總振假名とする事を一層奬勵し、又官から出す公文は、假名專用もしくはローマ字專用として所々に漢字を側につけておくやうにしたい。即ち全國民がすべて歩調を揃へて、音字採用の氣運を早める方針に向つて進まねばならぬ。この氣運はすでに向つてきてゐるけれども、短氣な日本人には、毎度忠告を怠らずに與へなければ、すぐに忘れてしまふ。假名會やローマ字會が倒れたのは、國民の輕薄浮氣である事を示すもので、甚だよろしくない。たとへかゝる浮氣な輕薄な會合は倒れても、眞に國家百年の大計をおもふ熱心家は、益武歩を進めてきてをる。即ちかの言文一致といふものは、明かに漢字征伐の有力なる先鋒者である。「である」とか「せねばならぬ」とか「あるから」とか「あるので」とかいふ語は、漢字に書けぬ語である、その他口語は假名で書かねばならぬものが多い故、自然に漢字が減つてくる。本書などはこの主義で書いてゐる故、漢字は普通字一千以下で綴られてゐる。この言文一致が盛になると、自然に言語聲音といふことに氣が付いてきて、目でばかり見る漢字よりも、耳できゝてもわかるといふ音字が必要である事が知れる。これがま

づ音字採用の初歩で、それから言語學や聲音學を國民が知つてくるやうになると、全く漢字は不都合である事が科學的に知れてくる。

又日本人として、殊に教育ある日本人としては、漢文漢字を知るよりも、歐洲語の一だに通じてゐる方が便利である。何となれば、未來永遠漢文漢字で文明の新知識が含まつてゐる新聞雜誌著述が出來ようとはおもはれぬから、是非とも世界的大國民としては、歐洲語を知る必要がある、從て西洋書を讀むと、羅馬字に馴れてくる故、この字は假名よりも便利で、又見易い事がわかる。而して實に漢字は最も馬鹿〳〵しい字で、この文字を使つてゐては、到底大國民として世界に活動する事が出來ない事が知れてくる。即ち、漢字交り文は、日本古典的であるとし、又舊日本を代表する場合の用字とし、國民一般には世界共通のローマ字を用ふるやうになるのは、勢の自然である。唯この自然の大勢が早く來るのと遲く來るとのは、われらの勉强次第で、國民の心を迷はせないで、この必ず來るべき大方針に早く向けると否との關係に存する事である。

さてこゝで國民を迷はせるものは、漢字は無論普通用に適しないとした所で、假

名文字も羅馬字も皆氣にくはぬ、一つ何か日本に適する新文字を造つたらどうであらうといふ問題であるが、これは本書が責任を負うて明白にその非を永遠に戒めておく必要がある故に、更に章を改めてこれを說かう。

第八章　新國字

世界主義人類主義の上から、世界の言語を一にし、世界の文字を一つに定めようと企てたのは、抑も第十七世紀の頃、ライブニッツか唱へ出して以來、絶えず學者の間に工夫されたのであるが、第十九世紀の中頃からかけて、第十九世紀の終まで、歐米諸國でいろ〳〵の學者の手で、いろ〳〵な世界語が作られた。さて理想的文典は、夙に一千六百四十二年ブルッセルで刊行したカバリスティック(Cabalistic)文典、及び其後十二年を經て、フランクォールトで刊行したオーダシアス(Audacious)文典といふのが、世界語統合的の文典のつもりであつたのだ。然るに今日カバリスティックといふ語は、『夢幻』といふ義になり、オーダンアスといふ語は『馬鹿』といふ意になつてしまつた。近代に至り、ヴィルキンス監督が發明した世界語は、敢てその組織において

拙い所があつたのでは無かつたが、全然失敗に了つた。其他コンドルセットといふもあり、ステイネルといふもあつたが、皆滅亡して了つた。又千八百七十一年に出來たバヒメール(Bachmaier)の記號文典、及びガリアニ(Galliani)の電信記號辭典の如き、簡短であつたけれども、誰もこれを採用するものがなかつた。次で千八百七十九年、獨人スレーエルが發明したヴォラペオク(Volapük)といふ世界語も、一時は榮えたが、今は全く振はなくなつた。やう〳〵千八百八十七年露國の眼科醫ザーメンホフ(Zamenhof)が創作したエスペラント(Esperanto)といふ世界語は、今まで出來た世界語の中で最も完全なものであるとして、學者間によほど勢力を占めるやうになつてきた。さてこのエスペラントといふ語は、英語で Esperance、佛語で Espérance 伊太利語で Isperanza、西班牙語で同じく esperanza といふ語で、もとは拉典語の speran 即ち希望といふ義である。即ち世界の人がこれを悉く使用せんことを希望すといふ意味で、新歐州各國語をとりあつめて、拉典語原に形たどり、又文字は純粹の羅馬字を用ひて、成るべく入り易いわかり易いといふことを專一として作つたものである。なほ此世界語は、その組織殊に語尾變化において、

又名詞の格(日本の助詞を名詞中に入れたものゝ如き)において、日本語に甚だ似てゐる。發明者ザーメンホフが日本語を知らなかつたのは、非常な恨事で、もし彼が日本語を知つてゐたならば、更に完全なものが出來たらうと思ふ。これで見ても、日本語は學者の最も尊ぶ世界語の形式を有つてゐることが知れたのは、我等の大なる誇である。それはさておき、この世界語が眞に世界語となるのは、いつの世か殆ど想像がつかない。これほどの簡易なものですら、行はれないのである故、變てこな文字を發明して、ひとりよがりに誇つて見たところで、誰も顧るものなく世には唯狂者の如く思はれて、その發明文字が馬鹿の代表者となるのは、また實にやむをえぬ次第である。

全體言語文字といふものは、誰の發明といふのでなく、社會一般の不知不識の間に默契され默許されて發達してきたものである故、ローマ字でも、漢字でも、假名でも、何の某といふものが發明したと明言されるものでない。漢字は倉頡が作つたとか、平假名は弘法大師、片假名は吉備大臣の作などいふのは、後世後人の言ひならはした俗傳で、眞事實ではない。何時誰となく用ひはじめたものが、社會一般の淘

汰を經て、遂に學者がそれをまとめて、國字と定めるやうになつたのである。それ故今俄に面白い便利な文字を發明した所で、社會一般の默許を得て、不知不識の間に採用されるのには、非常に長い歳月を經なければならぬ。その長い間に、その新發明の文字は全く忘れられてしまふ。つまり社會の大勢について、徐行して行くより外の道はない。現今の文字がいくら缺點があらうと、盛に社會の人が用ひてゐる間は、生命ある文字である故、容易に滅びるものではない。それ故學理に叶つた新文字を作つても、社會の人に知らせてこれを用ひさせるには、神ならぬ人の力では到底出來ないことである。いくら政府萬能主義の國家であつた元國の君主忽必烈の大勢力でも、パスパ文字を滿洲及支那に强行することが出來なかつたのだ。まして忽必烈の千萬分の一にも足らぬ人物で、新文字を作つたとて、誰が守るものがあらうか。また新國字といふものは唯一方面の工夫で、ありとあらゆる方面において歴史的習慣的に順應が出來てゐない、極めて不完全なものがあつて、現在の國字より、學理においても劣つてゐるものが少なくはない。こんな不完全なものを誰が守らうか。

實に世界の新文字發明者が皆々失敗したのも無理ではない。文字學上、文字といふものは社會全般の默契で成立すべきものであるといふ科學的根本知識が無いから、こんな新文字論者が出來たのだ。

ところで、日本では漢字の困難を嫌ふ結果、可なり敎育のある人たちが、或は新國字が作られて日本國字を一統するであらうなどいふ豫言者めいたことを演說したり、筆にものせられた事があつたので、わが國の新文字發明家は續々あらはれてきた。新聞なども、中にはこの新國字の發明者のために、太鼓をうつたものもある。そこで一方には國家のため國語のため憂ふる熱誠の人もあり、又他方には何でも新國字を發明して、日本萬世の國字の基をつくり、永劫國字發明者の榮譽をも擔はふといふ名譽心を起す人もあるものと見えて、三十三年の國會に國語改良案が出た頃などには盛に新國字が作られた。

しかし、いづれを見ても、羅馬字を變造したものか、假名を變造したものであつて、笑ふべき神代文字に比べて、弟たり難く兄たり難き奇妙奇態のものであつた。ともかくいかなる新國字發明者も、漢字の如き意字を作らうとした人はなかつた、い、

はゆる音韻文字を發明しようといふこと丈けにおいては皆々一致してゐたのである。

全體新字といふものは、いくら理想的な完全なものであつても、人が用ひなければ何にもならぬ。又實に理想的な完全なものは、到底作りえられるものでない。例へば視話法用文字の如きは聲音學的に作られてゐるけれども、各字體が甚だ紛はしい、殊に草書で書くことが出來ないといふ一大不便がある、これをいくら改作しても、國字になりようがない、又簡短を主とする方からいへば、電信文字か、盲人用の點字かが、よからうけれども、これで文章を綴ると、目で見る上に大々的不便が起つてきて、到底國字たるべき資格がないことがわかる。又書寫の迅速を主とすれば、速記文字が一番よいけれども、これは前にも述べた如く、その直線もしくは曲線は、すべて角度によりて字義を異にする故、非常な熟練を經なければ、書けるものでないから、普通一般の國字とすることは出來ぬ。それ故視話法用文字や電信文字や速記文字に象つて新國字を作つた人達は、皆々失敗に終つたのである。

こゝに漢字と假名とを混成して、日本の國字としようと企てた人もある。即ち

田中秀穗氏の如きは、その一人であつた。例へば松といふ漢字を廢して杉と書き、杉といふ漢字を廢して桧としようとする類で、一寸面白い考であるが、抽象的名詞もしくは動作的、形容的、抽象的の字になると、この名案も直に失敗してしまふ故、何にもならぬ。

又假名文字をアルファベット組織に改めようとした人も隨分あつたが、その中獨逸人グルスト、ベルガーの如きは遙に日本の帝國教育會に、自分の案を寄贈したので、藤岡勝二氏はそを言語學雜誌にて紹介し、又堀江秀雄君も國字改良論纂の中に輯錄されたのであるが、いかにも苦心經營の蹟は見えるけれども、唯煩雜であるとしか評の下しやうがない。これ以下の發明家の音韻文字は、殆ど採るに足りないのである。

又こゝに朝鮮の諺文もしくは梵字の如く、子母音從屬的の國字を發明しようと企てた人があつたが、理窟の上では結構であるけれども、まるで文字にならないのである。これは羅馬字が子母音同位的文字であつて、日本人にとつてはいかにも面倒であるといふ所からして、この子母音從屬的文字を發明したので、その精神は

十分感謝するに足るけれども、書く上の不便があつたり、見る上の不便があつたりして、どうしても物にならなかつたのである。

しかし、これは過去僅々十數年間の研究であつた故、いかなる新字も物にならなかつたが、なほ今後幾十年となく研究をつゞけたならば、恐らくは完全な新字といふものが發明されるであらうと夢想する人もないではなからう。この新字夢想者に對して、本書は明かにその迷を解き、未來永刧新字など考へべきものでないといふことを示すべき義務を負うてをる。換言すれば文字學といふ科學は、新國字は絶對的不成立のものであるといふことを、洋の東西時の古今に渉つて、世界萬國のありとあらゆる文字の由來歷史を探求して、この構成を說明し、人智の及ぶ限り、點と、直線と、曲線との三つを千萬無慮に組みあはせて、作爲した文字が、段〳〵に過去の人類によつて考へつくされたのである事を語り、なほこれ以上進步すれば、簡易になるばかりで、電信文字速記文字のやうな者が出來、特殊用文字としては、重寶であらうけれども、國字としては行はれない事を敎へるのである。萬國聲音學會所定の文字すら、なるべく羅馬字を用ひて舊來の字形と固有の發音とをあらはす

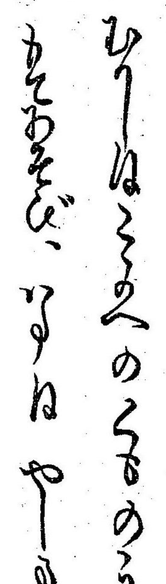
事に定めたのを見ても、新字といふものは遂に學者の空想、發明家の迷信に過ぎないものであることがわかる。

文字をむづかしくしたものゝ極點は漢字で、文字をやさしくしたものゝ極點は電信文字である。あまりにむづかしくてもいけない、又あまりにやさしくてもいけない、その中庸を得なければならないとなると、假名か羅馬字より外に採るべきものがない。全體文字としてその數を多くすれば多くするほど、精密に聲音をあらはすことは出來ようけれども、又憶える上に多大な困難が起つてくるから、つまり理窟にあひ學理に叶つた文字は、世間一般には用ひられぬことになる。換言すれば、世間一般に用ふる國字といふものは、多少學理にあはない所もあり、聲音を精密にうつさぬ點があつても、書く上と見る上とに便利であれば、社會の用をなすものである。それ故新國字といふものは、作つた所で仕方のないものである。今本書に掲げた世界萬國の文字を參照して、一の新しい完全な新字を作れといふならば、誰でも一ヶ月の間には非常に面白い巧なものを作ることが出來ようけれども、唯面白い巧であるといふ迄で、何の効もない、何の用もないのである。全體文字と

いふものは、その大さにおよその一定した範圍があつて、またその構成の原料も點と直線と曲線とに限られてゐるのである故、いかなる賢人智者あらはれたとしても、過去の人類が發明した文字以上には、一歩も進むことが出來ぬ、よし進んだとした所で、どこかに不便が出來てくる、それ故新國字といふものは、絶對的に不可能のものであることを、文字學上から斷言して憚ないのである。新國字夢想家は、よろしく猛省して、こんな無益な事に貴重の時間を費し、大切なる頭腦を痛めないのがよい。その智とその勞とで、現在の言語文字を改良し改善すればよろしいのである。

そこで日本將來の國字は、ともかく漢字を排斥して音韻文字としなければならないとする以上は、假名を改良するか、もしくは羅馬字を採用するかといふ二點に歸着してしまふのである。假名と羅馬字の優劣については、次章で述べようから、こゝでは主として假名文字改良といふことを述べよう。まづ平假名を舊來のまゝ縱に書いて、なるべく字體が一つにまとまるやうに、即ち一語一綴の語として、その連絡がうまく行くやうにと企てたのは、第五十八圖に示すが如き、岡田正美氏の

第五十八圖



改良假名である。これは『昔は九重の雲の上にて春の花を弄び、今は屋島の浦にして秋の月に悲ぶ』といふ平家物語中の語をうつしたものであるが、その『は』といふ字が變體の『ほ』にまぎれ、『あ』が『わ』にまぎれ、『な』と『る』とが甚だ紛はしいやうな次第で、折角の考案も、今一層の研究を積まれねばならぬ事とおもふ。

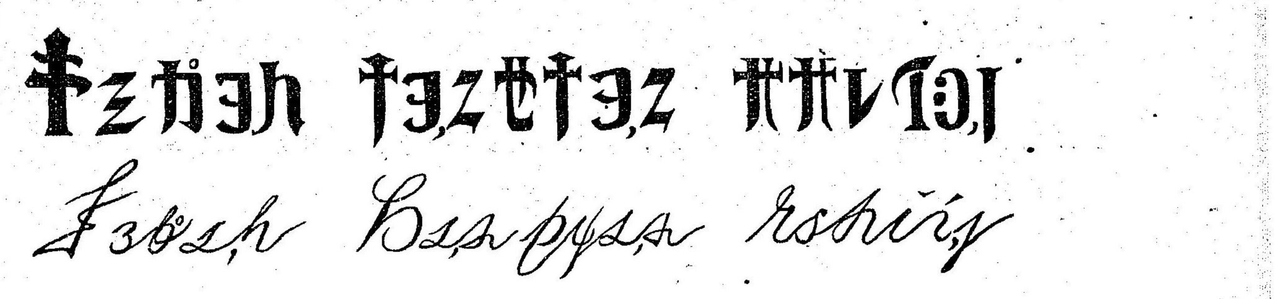
次に片假名を横書にして、假名專用の國字としようと企てられたのは、木村鷹太郎氏の考案が夙に世に知れてゐる。即ち第五十九圖の如きものである。

第五十九圖

この横書片假名は、考案者たる木村氏自身もまだ十分のものであるとは自信されてゐないやうであるが、とにかく、この樣にしたいといふ考案の目標に過ぎないのである。

この考案を更に改善したのは、增田乙四郎氏の考案である。氏はこれがために『大日本改良文字』といふ書を博文館から發行して、夙に世に公にされた事がある。その體は即ち第六十圖に示したやうなものである。

第六十圖

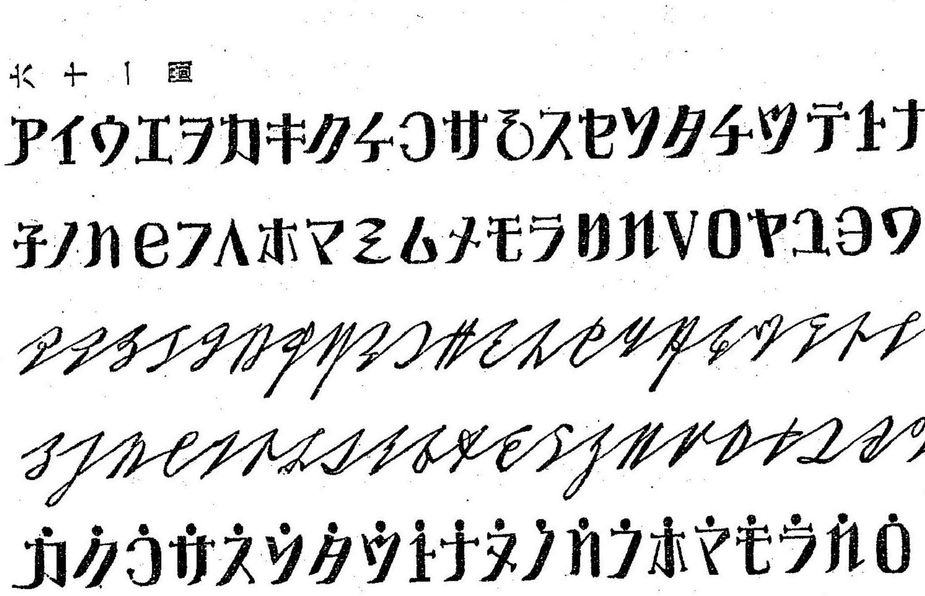


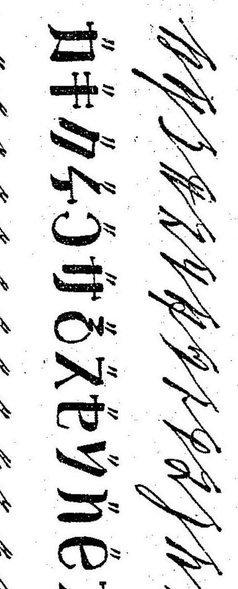
この改良文字は楷書にありては、つゝめて原形のまゝが明に知られるやうになつてをるけれども、草書になると、羅馬字的でやゝ原形に遠ざかつてをる。即ち『ハ』が h に見え、『ヨ』が s に見え、『サ』が r に見え、『イ』が i と同形であるなどいかにも巧に出來てゐるけれども、羅馬字を知つてをる人から見ると、甚だ紛はしい。

そこで草書に書いてもなほ假名の原形が明に知られるやうになつてをる文字は、小森德之氏の改良假名である。即ち第六十一圖に示したごとほりのものである。

氏はこれを自由假名と呼ばれてをる。

第六十一圖





自由假名は全數百八十文字ありますが、內常用國字は即ち舌齒音(ツ ア)を除けば百文字、又「ツ ア、クヮ、グヮ、ファ」等を入れると百〇四文字になります。

多くの國字改良論者は、大抵その考案を一時世に示したばかりで、社會がさほど

文字について注意を拂はぬ所から、そのまゝにうち棄てゝ、それが研究も主張も全く廢れてしまつたが、ひとり小森氏はこの自由假名を主張し、傳道することにおいて、常に怠らず、益々盛にこれが實行をつとめられてゐる。この點については、われらは氏に向つて多くの感謝を捧げねばならぬ。氏の直話によると、氏は明治四年の頃からこの新字について工夫をめぐらしてをられたのだ。そして米國にをられる時、假名文字が羅馬字に勝つてをる事を悟つて從來、假名文字改作に從事し、初めは羅馬字の變體のやうなものを工夫されたが、新國字の愚な事を悟つてから、全く假名文字原形のまゝを傳へやうとて、種々苦心の結果、遂に右の如きものに一定されたといふ事である。

とにかく、假名專用の時代があるとすれば、小森氏の考案の如き文字が、國字として行はれる事にならうとおもふ。しかし假名橫書といふことが、果して國民の悅ぶべきものであらうか、これは一つの大なる疑問である。ペンとインキとを用ふる人は、まだ少ない、而して硯墨と毛筆とが廢れる時代は、いつであらうか、もし硯墨と毛筆とが廢れない以上は、やはり平假名の縱書が最も近き將來において來るべ

き國字ではあるまいか。詳言すれば、岡田氏の考案の如きものが、なほ一層研究せられて、便利になるといふことが、空想を離れた實際問題ではあるまいか。なほ言ひ換へれば、今日のまゝで漢字をやめて、平假名を品詞分別的に分書さへすれば、よろしいのだ。しかし果して假名專用といふ時代が來るべきものかどうか、これが抑もの根本問題である。今迄假名專用の書として發行されたものは、いろ〳〵あらうが、貴重な著書では、石川倉次氏の『はなしことばのきそく』といふ口語文典二冊であるが、これが假名專用であるが故に、折角の名論も世に埋沒されてゐるのは、今日實際の狀況である。

假名專用の時代といふ者がくるといふことは、漢字國であつた日本の狀態として、頗る考ふべきことである。假名專用の時代にしようといふのと、假名專用の時代がくるといふのは、辨別して考へねばならぬ。假名文字主張者はその時代を來たさうといふ熱心を以て主張するのであるが、千有余年使ひ來つた漢字が掃蕩されるものであらうか、余は甚だ疑はざるをえないのである。いかにも假名專用といふ事は、現に小學校の一二年生に實行され、又子供のよみものゝ著作で實行されてゐるから、これらの勢力がその範圍を擴めさへすれば、遂に國字とならうやうに思はれないことはないけれども、いはゆる初期の普通教育といふ一部面に止まつてしまつて、國民全般に及ぶかどうか、實に怪しいものである。今迄のやうな不熱心な一時の好奇心に驅られて、すぐに熱がさめてしまふやうな國字改良論者の力では、到底假名專用の時代は來たすことが出來ないことを斷言するを憚からない。もし小森氏の如き熱誠の人が非常に多くなつてくれば、假名專用の時代はあながち來ないとも限らぬ。ともかく、今のまゝでは、到底見込がない。要は假名派の猛將勇士が捲土重來の勢を以て、大に蹴起し、漢字と戰つて勝鬨をあげる勇氣如何に存するのである。

以上述べた所で、新國字といふものは、未來永劫絶對的不必要のものであるといふことは、明々白々の眞理である。しかし特殊用のために、新國字を發明するのは、決して惡くはない、否惡くはないどころか、大に奬勵しなければならぬ。例へば第六十二圖に示されたものゝ如きは、嘗て日本の盲人用點字を發明された石川倉次氏が、更にこの點字を連綴して、一の文字を作られたのである。氏はこれを以て一

第六十二圖　盲啞共用文字

般の國字としたいといふ希望を抱かれてをるが、國字としては前申すやうな次第で、不可能のことである故、いかにもしようがないが、もしこの文字が盲啞共通文字として制定され、世界の盲啞教育に貢献する所があれば、この文字の發明に對しての報酬は十分に得られたものといはねばならぬ。余はこの盲啞共通文字が特殊用の完全な文字として成効することを祈るのである。又各學問の各方面に於て、それ〴〵特殊用の文字が作られて、學問の進歩發達に貢献する所があるやうになるのは、甚だ悦ばしいことである。それ故、新字發明はすべて特殊用のものとして歡迎すべきことは、毫も疑を容れない。

ともかくも特殊用の上で新字を作ることは、別として、國字を全然破棄して、新に完全な文字を作らうなどといふことは、全然不必要である故、日本の將來の音韻文字は、假名文字か羅馬字か、この二つの外はないのである。いでこの優劣に關しくはしく述べよう。

第九章　假名と羅馬字

漢字は今急に廢されないにした所で、又いつまでも學者用の文字として殘るにした所で、普通の國字としては全く排斥される時代が來る、又その時代を來たさなければならない。早く來さねばならない。これは文字學上の一大眞理であつて、七顚八起どころがどこ迄も、主張されて、實行を見るまで進まねばならぬ、かの國語調査會が設立されると同時に音韻文字を採用すといふことを第一番に標榜したのは、實に忘れてはならないことである。

世間では假名の會も滅んでしまひ、羅馬字會も滅んでしまつたから、文字の改良といふのは愚だ、やはり漢字交り文の今日のまゝで澤山だと、すましてをる人があるが、これは實に不忠實な不深切なものである。いかにも、文字の改良や國語の改良といふことが、一朝一夕に行はれるものではない、一夜作りの新字が片々たる雜誌にのせられ、一場の演說で公示された位で、すぐ世人が用ふるものではない。苟も國字國語の改良に啄を容れようといふのならば、おのが一生を通じてなほ足りないのである、しかも日夜この主張を實行し傳道する熱情がなくてはならぬ、一時のはやりものゝ考で、國字や國語をいじられては、國民たるものはたまつたものではない。

しかし假名の會は滅んでも、假名專用の主張は滅ばないで、その後著々武步をすゝめ、言文一致で漢字が大に減らされ、小學教科書や、子供のよみものや、その他の著作や、新聞などでも、假名が日々月々多く用ひられてきてをる。又羅馬字會は滅んだけれども、羅馬字は年々多く用ひられ、大都會の商店は無論のこと、僻地の小都會でも、商店の看板と製造品の廣告などには羅馬字が段々多く用ひられ、小學中學の英語讀本には、羅馬字が用ひられ、又和英辭書、和佛辭書、和獨辭書などは、年々刊行されて、羅馬字はもはや初等教育の末期から、中等教育をうけたものには、皆々讀まれて、羅馬字を知らないものは、殆ど無教育のものとなつてをる。日露戰役後、世界的の觀念が盛になつてきたと同時に、羅馬字ひろめ會は新に興り、著々研究を重ね來り、その普及方法についても大に見るべき案がある。小松宮殿下は、歐米漫遊の際、日本は將來羅馬字を採用すべきものであるとの御演說をなされた位で、九重の雲の上人も、今や羅馬字を主張されることゝなつた。又國語調査會の委員中でも、羅馬字主張論者が甚だ多いのである。世にいふが如く、羅馬字は決して失敗に終つ

たものではない。新に興つたローマ字ひろめ會は着々武歩を進めてをる。

日本將來の音韻文字はどうしても假名か羅馬字かである。さて(一)假名ばかりでおし通さるべきものか、(二)羅馬字になるべきものか、(三)一まづ假名にしておいて後に、羅馬字になるべきものか、この三つの疑問が眼前に横はつてゐる。無論假名文字主張者は假名ばかりでおし通さうといふのであるけれども、假名派の中には、遂には羅馬字にならうが、まづ假名時代を經た後であると思ふ人もある。又羅馬字派の人も、羅馬字の先驅として假名時代がまづ來るであらうと思ふ人もある。しかし熱心な羅馬字主張論者は、假名文字はいくら苦心しても駄目だ、假名時代を經ないで、直に羅馬字時代に入るべきものであるといふのである。そこで假名派と羅馬字派との優劣論が起つてくる。

まづ假名派の主張する點は、(第一)假名文字は日本固有の文字であつて、國體が萬國に絶冠してをると同時に、この假名文字は大日本の國字となすべきものである。(第二)假名文字は一音一綴である故、日本語をあらはすに最も簡便で、又最も適當してをる。かの羅馬字が二重の手間を要するものとは同日の比ではない。(第

三)假名文字の便利なことは、電信用文字盲人用點字、もしくは啞人用の手眞似文字に鑑みても簡便であることが知れる。(第四)假名文字は横にでも縱にでも書ける、かの羅馬字のやうに横にしか書けないものに數等勝つてをる。(第五)假名文字にすれば、毛筆で書く故に文字美が保たれて、羅馬字のやうな實用一遍の殺風景な者とはならない。(第六)假名文字にしておけば、日本の古書を讀む便もあり、又今日のあらゆる印刷物が古文書とはならぬ利がある。(第七)假名は日本の語原を知らしめ、又日本文法の教授の上に便がある。たとひ假名遣を全然改正して、新假名遣にしても、假名文字でさへあれば、その變遷を明かにすることが出來る。(第八)假名文字の便利なことは、歐米の具眼者も認めてをる。それ故日本人はこの假名文字を以て、かれ羅馬字國を教へてよろしい、決して羅馬字國に降伏する理由がない。(第九)假名文字は日本國語を外人に教へる上に最も便利である。日本語を羅馬字綴にして教へると、いつまでたつても純粹な日本語を憶えない。例へば『アレ』と書いて教へると、日本人のやうに發音をするけれども、are と羅馬字で綴ると「アール」と發音したがる傾がある。英米人などならば直ちにアールといふ。すべての日本

語は皆かくの如く、假名文字で日本語を憶えた外國人は、羅馬字で日本語を憶えたものより正確であることは、過去幾多の實驗で明白である。(第十)假名文字はもと漢字を讀むための、捨假名として用ひられた故、その假名が字形をなすに不恰好なものがあることは、非難される點となつてをるけれども、假名專用の時代になれば、その字形に多少の改良が施されて、遂に世界中最も完全な文字となるべき性質を有してをる。現に假名文字改良案については、世間見るべきものがある。なほこの上に改良に改良を加へたらば、羅馬字を壓倒するほどの勢力を得るものである。(第十一)假名文字ならば、日本全國誰知らぬものなく、今日唯今から實行されるが、ローマ字ならば、すぐに實行することが出來ない。これは論より證據、假名がローマ字に勝つてをる點である。如上第十一箇條は、實に假名文字の得點をあげたもので、こんな完美な音字を有する國民は、實に世界無比であるとし、羅馬字派に對して攻擊の鋒を向ける所以であるが、その論旨の過半は、學理的よりもむしろ硯墨と毛筆とを有する日本人の舊慣に訴へて、感情的に國家主義を文字の上に應用して、羅馬字を排斥しようとする傾向がないでもない。

そこで羅馬字派は、これに對して頻に假名文字の不利を說くのである。まづ(第一)假名文字は一音一綴の便があると同時に、獨立の子音をあらはすことが出來ぬ不便がある。例へば『二つ』といふ時は futatsu でなく ftats であつて、f と ts との子音が獨立にあらはれてをる、又『デス』といふ時は desu でなく、des である故、s の子音が獨立にあらはれてをる。日本の古語には、一々母音が含有されてゐたのであらうが、言語發聲の發達するに隨つて、日本語も漸次に子音が獨立にあらはれる傾向を示してをる。それ故實際に精密に言文一致とか口語とか方言とかをあらはすには、假名文字は不便である。(第二)假名文字は促音長音および抑音をあらはす場合に不都合である。促音をあらはすには舊來『ッ』文字を用ひてゐたが、これは決して tsu ではないのである。それ故教科書などには、この促音ッ文字を一段と小さく側に書かせるやうになつてをるが、全體文字を綴る上に、小さく側に書かせるといふことは、運筆の上又印刷の上で甚だ不都合である。KTPの三字を二つ並べて綴つて促音を示す便がある羅馬字に及ぶことは出來ない。又假名で長音をあらはすのに、三十三年の小學校令では捧引を用ひ、又三十七年の改正案で、國語の棒引

を文部省が發表した際に攻擊が八方から起つたのは、つまり假名文字が不完全であることを證據立てたのである。又拗音をあらはすに、ヤユヨの三字を小さく側に書かねばならぬのも、運筆の上印刷の上に一大不便があることは明々白々の事實ではないか。羅馬字にすれば、長音の場合にはaiueoの五字の上に捧又は三角の符號をつけて、字形の美を失はない。又拗音はすべてyの一字を入れると、いかなる國語漢音でもあらはされる上に、字體が崩れないのである故、假名文字より羅馬字は優つてをる。(第三)假名文字では新に音が殖えた時、又別々に綴字を作らねばならぬ、例へば五十音圖のタチツテトは、タ　チィ　ツゥ　テ　ト、チャ　チ　チュ　チェ　チョ、ツァ　ツィ　ツ　ツェ　ツォといふ三つの行から成り立つてをるが、これを假名書きした上の不體裁はどうだ。ta, ti, tu, te, to. cha, chi, chu, che, cho. tsa, tsi, tsu, tse, tsoと羅馬字に綴つた上の美麗なものとは、同日の比ではない。ヴァイオリン、ヴィクトリアなどのヴァヴィの綴は、va, vi の字形とどちらが立派であるかは、三歳の子供でもわからう。即ち羅馬字ではいくら音の種類が殖えても、字形の完美した綴であらはすことが出來るけれども、假名文字になると、一々新しい變な字體を作らねばな

らぬ不便がある。(第四)假名文字は聲音學上から見れば、殊に不完全である。まづハヒフヘホの濁字をバビブベボとし、又パピプペポを半濁とする類である。ハヒヘホは喉音hであるゆゑ、これが濁れるものではない、而してバビブベボは、bの濁音であるけれども、パピプペポはpの清音である。即ち羅馬字で書けば聲音學の原理に叶ふけれども、假名文字であらはすと、飛んでもない間違を惹き起すことになる。(第五)假名派の人は假名文字で日本の語原が知れるとか、文法の敎授に便であるといふけれども、これは五十音圖といふものが甚だ非科學のものであることを知らぬ無智の迷信から起ることである。例へば動詞の四段活用にしても、その變化といふものは母音の變化である。『書か、書き、書く、書け』と綴るから、『かきくけ』と變化するやうに思ふけれども、kak(a), kak(i), kak(u), kak(e), と變化して、aiueの母音變化が即ち語尾變化であることが、羅馬字綴でなければ明白に示されないのである。又『あらむ』が『あらう』となるのは『む』といふ字が『う』となつたのではなく、arumu=arau=arō となるので、mの子音が脫落したことが、羅馬字でなければ明に示されないのである。即ち日本語の語原說明は、どうしても羅馬字を借りなければ、絕對

的に不可能であることは、言語學上聲音學上爭ふべからざる眞理である。(別冊應用言語學の言語の形式を說いた所でも、皆羅馬字を用ひたやうな類をいふ)而して又日本文法敎授の上でも、五十音圖といふものを全然破壞して、羅馬字で語尾變化を敎へる事になれば、簡明であるが上に、語の變遷の蹟を科學的に明示することが出來る。この點においては、假名は到底羅馬字に及ぶことは出來ない。(第六)日本辭書の索引の面倒なのは、假名文字が複雜であることを示すものである。もし羅馬字にすれば、アルファベット二十六文字の中、二十二文字で日本語のいかなる音聲言語でも、精密にあらはすことが出來る。しかも、辭書などにおいて、その排列が簡明で、索引が便利である。促音でも、長音でも、拗音でも、自由自在に書けて、更に不便はない。即ち假名文字であれば、いつまでたつても辭書の進步は見られないが、羅馬字にすれば、實に驚くべき進步を來すのである。而して、辭書の進步といふことは、とりもなほさず日本國語の發達膨脹普及擴張の上に、直接關係のあることで、實に大切なことである。(第七)羅馬字は假名に比べると、日本語を綴る上に長くなるといふべけれども、羅馬字綴も漸次日本語を綴る上に、不必要な母音を省く事にす

れば、さほど困難ではない。假名に比べて字體が長くなつても、書く上には早くて、字體が完美してをる利點から見れば、羅馬字の欠點は、この利點で償ふことが出來よう。假名文字はいくら短く書けても、促音や拗音を書く時、小さく側に書かねばならぬといふ運筆上の損があるから、羅馬字は長くとも、その運筆の早さで、勝つことが出來る。まして假名の字形はばら〳〵になつて目に入つてきて、ひどく視覺を害する弊があるのは、實に假名文字改良論者が、ひとしく苦心慘澹する所ではないか。(第八)假名文字は獨立して發達したものでない故に、假名專用とする時には、その字形の上に改作を加へねばならぬ、即ち一種の新國字を作らねばならぬ、一種の新國字を作る勞をしないでも、世界で幾百年間幾多の變化を經て、全く改良の餘地を入れないまでに完全無缺に發達してきた羅馬字を、そのまゝ用ふるのが便利ではあるまいか。假名文字が現今この儘で獨立の國字となるのならば、いざ知らず、羅馬字風に横書にしたり、字形を代へたりする位ならば、むしろ羅馬字そのまゝを採用することが、いかに便利であるか知れない。(第九)假名文字を主張する人の愛國の精神は嘉すべきものであるけれども、その愛國心はやがて鎖國攘夷主義の愛

國心ではあるまいか。羅馬字は決して外國のものではない、世界人類のものである、丁度電氣電信汽車汽船が世界のものであると同じく、日本人が電氣電信汽車汽船を用ひても、決してそれが爲めに愛國心を失つた例はない、むしろ軍艦でも大砲でもその他すべての西洋の科學的新發明物を輸入して、國益を謀る方が、眞の愛國心ではあるまいか。羅馬字を嫌つて假名を主張するのは、即はち鎖國的偏狹である。(第十)假名で日本國語を海外に普及しようといふのは、殆ど痴人の夢を說くやうな話である。歐米各國皆國語は異つてゐても、同じく皆羅馬字を用ひてゐる。もし日本語が羅馬字で綴られるやうになれば、その日から日本國語が海外に向つて發展し膨脹し普及され傳播されて行くのである。假名文字はいくら簡短であつても、字數が多いのと、字形が全然非世界的である以上は、これで以て日本國語を海外に波及することは、絕對的不可能の事であるといはねばならぬ。以上第十箇條の理由は、假名文字を排して羅馬字にしなければならないといふ論者の主なる論點である。

さて、余はこの假名派とローマ字派との間に立つて、まづ原被兩方の申立をきゝ

終り、こゝにその判決を下さなければならない位地に立つたのである。假名派もローマ字派も、いづれも漢字を排斥して、日本の國語を音韻文字にしようといふ忠義の心は一であるが、その方法について、つまり二派に分れたのである。假名の絕對的長所は綴が短かくてすむといふ事であると同時に、ローマ字の絕對的の短所は、いかに爭うて見ても綴が長くなるといふ事である。而して又ローマ字は世界的である、日本國語を海外に傳播する上に大な便利があると同時に、假名文字は字形が甚だ不完全である不便がある、それ故兩方に長所があつて、又兩方に短所がある。そこで兩々互にその短所を改良して見た上で、初めてその優劣の判決を與へることが出來よう。今日の處では、また兩方とも改良工夫時代である。

但し假名については前章で述べた如く諸の人達が熱心に改良を企てられつゝある故、將來いかなる完全な假名文字が作られるか知れないけれども、今迄の改良の歷史から推してみると、どうしてもローマ字的になるので、假名の原形が崩れ、ローマ字ともつかず、假名ともつかぬ、一種の新國字が出來て、到底國民に採用されなくなると思はれる。唯ローマ綴字方の改良に付いては、將來大に望を囑すべき者

がある。

凡そ羅馬字綴が長くなるのを改良しようとは、誰しも思ひよるべき事であるが、まづ語尾のuの母音を省くことがその第一着である。田中秀穂氏が發表された改良綴は、kクsスtッnヌhフmムyユrルwウfフgグzズdヅvブpプで、又イ母音韻を省く文字は、CシCチNニNニHヒMミLリGギJジbビとしようといふ案であつたが、これはいかなる綴にも、子音で日本の成熟音の假名を代表させるわけに行かない。換言すれば表の上では一寸簡短であるけれども、綴り字の上では多く無効となり、何のことか更に讀めない結果を來すのである。殊にnをヌの代にし、hをフの代にするなどは、甚だ不都合である。又mをムとし、Mをミとするなども、綴の上では甚だ不都合で、大文字小文字がかゝる場合に濫用されては、折角の改良も贊成が出來ない。次に明治三十三年十一月五日の官報で文部省が多くの專門學者に囑託して調査を遂げしめた羅馬字書き方の報告であるが、チをtsとし、シをsiとするが如きことは、當局者にいはせると、tsは梵字綴の例をとり、siは電信用の便利があるなどの弱い理由もあるけれども、その當時非常に非難があつて、

(余も當時の教育時論誌上でこれに反對した)今日誰も守るものはない。要するにローマ字綴字改良といふことも、今日の處では殆ど不可能である。當時の報告に子音相連結するもの、即ち余が常にいはゆる子音が獨立にあらはれる場合の例語として、私(ks, Watakusi)、團栗(gr. dougri)、襷(sk. taski)、圓顱(kr. kriki)、頗る(br. sukobr)、ドクトル(kt. doktoru)などの數語を示されたが、こんなことも唯思ひ出しに書かれたのでは、世間一般に守ることは出來ない。よろしく言海なり、大辭林なり、言の泉なりにある語を、悉く羅馬字綴に改めた上でなくば、濫に語中の母音省略といふことも不都合である。今日唯今まで刊行されてゐる和英辭書和佛辭書和獨辭書などは、全然國語をローマ字に改めてゐるけれども、一としてこの文部の報告を守らないのは、更に標準となるべきものがないから、全然ヘボン氏に從てゐるのである。即ち文部の報告がいかにも不完全であつて、辭書などで索引の上で、大混雜を生じてくるからである。將來國語を統一するに、ローマ字綴で定めるつもりならば、文部省はまづローマ字の國語辭書と國語文典を、この流儀で作りあげた後でなければ、天下の人をして守らせる權利がないのである。

次にローマ字ひろめ會の驍將田丸卓郎氏の日本式ローマ字綴といふのは、全然ヘボン式を排斥し、五十音圖を直譯し、一子音を以て五十音圖一行の子音と定め、これにはa i u e oの母音が同じやうに付くことになつてをる。飽くまでも簡短主義劃一主義で、その理由とする所は一應聞えてゐる。併し折角ローマ字は發音(フォネチック)的文字であるのに、發音を無視したやうにおもはれて、世間幾多の人の同情を買ふことは覺束なく思はれる。シをsiとし、チをtiとし、フをhuとし、ジをziとし、ヂをziとし、拗音でチュをtyuとし、チョをtyoとする類はいかゞであらうか。國語の方言でシ(shi)をスィ(si)といひ、チ(chi)をティ(ti)といひ、フ(fu)をヒュ(hu)といひ、ジ(ji)をズィ(zi)といひ、ヂ(dji)をディ(di)といひ、チュ(chu)をティュ(tyu)といひ、チョ(cho)をティョ(tyo)といふのがある。して見ると、田丸式のは偶以て方言の發音を示したやうに思はれて、國語標準音を示したものとはおもはれない。而して方言音と標準音とを書き分けることが出來ない。氏はどうせ文字では發音を精密に示すものでないゆゑ、五十歩百歩の話であるから、ヘボン式の不統一なものより、劃一主義の綴が早く日本國民に傳へ易く、早く憶えさせる便利があるのに及ばないといはれてゐるけれども、發

音を無視するならば、もとの假名文字であつて澤山だ、何もローマ字をかつぎ出すにも當らない、假名よりもローマ字が優れてゐる點は、比較的最も精密に日本國語の發音を示すことが出來るといふことが第一要件である以上は、佐行のシ多行のチなど、全然發音學上同一行に入れられないものを同行に置くことは、あまりに非科學ではあるまいか。シはいかに論じても舌身的摩擦音の單一子音で、サスセソに宿つてゐるs音とは同一でない。チはツ(ts)とシ(sh)との合成子音で、タテトに宿つてゐるtとは全く別な音である。ヘボン式のsh及びchの綴も無意義ではあるが、なほsとshとを區別し、tとchとを區別した丈けの效能は確にある。現時の日本人の發音は佐行が二つあつて、サスセソ及シャ シ シュ シェ ショ となり、多行が三つあつて、タテト及チャ チ チュ チェ チョ 及ツァ ツ ツェ ツォ となつてゐることを、別々に書き分けることが出來るのが、ローマ字の長所であるのに、田丸式にすると、その大切なローマ字の長所がみんな無くなつてしまふやうに思はれて、いかにも殘念千萬である。但し余は決してヘボン式を崇拜するのではない、shやchの非科學的な綴は改良したいとおもふけれども、差當りこれに代るべき名案もなく、

又世間で知らない新綴を用ひても、初めに註釋付でかゝらねばならぬ面倒がある故に、暫くヘボン式で記載しておくのである。(なほ發音とローマ字の關係に就いては別冊實驗聲音學でくはしく說くつもりであるから、本書ではすべて省かうと思ふ。)

さて日本語のローマ字綴を簡短にするにしても、綴字中の母音を濫に除き去ることは大に考へねばならぬ。それはローマ字綴の國文典と國語辭典とが完成された曉に、初めて一定することであらうが、辭書を作る上に、又辭書を引く上に、濫に語中の母音が除去されると、一大不便を生じてくるのである。殆ど辭書を引くことが出來なくなるのである。又語中の母音を除くと、アクセントが變つてきて、國語でないやうになる。嘗てローマ字雜誌に、目錄をMokrokと綴たことがあるが、どうしてもモクロクと讀めず、モックロックといふやうに讀めたのである。なほ語尾のu母音だけは除いてもいゝやうに思はれるが、(即ちマスをmusと綴るが如く、聞くをkikと綴ると、キックと讀める傾がある。であるから、p t k b d gの如き密閉音で語尾となる綴字法は、促音の性質上、きつとアクセントに變化を生ずる憂がある

から、語尾のu母音も、密閉音には省かれないのである。唯密閉音以外のものには、語尾のu母音に限つて省いても差支はなからう。語中のa i e oの母音が省かれないとはいふまでもない。但しi母音の語尾を省いてよろしい綴が二つある。それはsh又はchなどである。これで語尾をとめるのは、字體の上から見ても體裁善く、又決してアクセントに變化がくるやうにも感じられないのである。其他rやsやtsなども、u母音を省いてルスツの假名に代へてよからうと思ふ。余は現に之を實行してローマ字文を書いてゐるが、少しも差支がない。しかしこれ以上ローマ字綴を省略する勇氣はないのである。

さて日本語を羅馬字にするには、アルファベットが皆入用であるか、又省くとすればどれを省くべきものか、又そのアルファベット讀み方はいかに讀むべきものか、これも一定しておかねばなるまい。又左にその讀み方について、英獨佛の三ヶ國語と、文部省羅馬字調査報告の讀み方と、田丸式の讀み方と、終に拙案の讀み方とを示さう。

	(英語)	(獨語)	(佛語)	(文部省)	(田丸式)	(拙案)
o	オー	オー	オー	オー	オ	オ
p	ピイ	ペー	ペー	ペー	ペ	プ
q	キュー	クー	キュー	クー	ク	(キュー)
r	アール	エル	エル	ルー	レ	ル
s	エス	エス	エス	エス	ス	ス
t	ティー	テー	テー	テー	テ	ツ
u	ユー	ウー	ウェー	ウー	ウ	ウ
v	ヴィー	フワウ	ヴェー	ヴィー	キ	(ヴィー)
w	ダップルユー	ヴェー	ドゥブルウェー	ワー	ワ	ワ
x	エッキス	イックス	イックス	エキス	キ	エキス
y	ワイ	イプシロン	イーグレック	ヤー	ヤ	ヤ
z	ゼット	ツェット	ゼット	ゼット	ゼ	ズ

	(英語)	(獨語)	(佛語)	(文部省)	(田丸式)	(拙案)
a	エー	アー	アー	アー	ア	ア
b	ビー	ベー	ベー	ベー	ベ	ブ
c	シー	ツェ	セー	チェー	セ	チ
d	ディー	デー	デー	デー	デ	ド
e	イー	エー	エー	エー	エ	エ
f	エフ	エフ	エフ	エフ	フ	フ
g	ジー	ゲー	ゼー	ゲー	ゲ	グ
h	エーチ	ハー	アッシュ	ハー	ハ	ホ
i	アイ	イー	イー	イー	イ	イ
j	ゼイ	ヨット	ジー	ジェー	ヨ	ジ
k	ケイ	カー	カー	ケー	カ	ク
l	エル	エル	エル	エル	ラ	(エル)
m	エム	エム	エム	エム	マ	ム
n	エン	エン	エン	エン	ナ	(ヌ)ン

文部案の讀み方は、英獨佛を折衷したものであるが、田丸式は更に之を日本的にしたのである。なほ拙案は舊來の國文典で父音といつた讀み方に採つて、國民に容易く憶えさせようとするつもりである。即ち舊來の五十音假名のやうに

アa　イi　ウu　エe　オo

クk　スs　ツt　ヌn(語頭)　フf　ムm　ルr

ワw　ヤy　ンn(語尾)

チc　ホh

グg　ズz　ドd　ブb　プp　ジj　エキスx

以上二十三文字で國語をあらはし、エル(l)　キュー(q)　ヴィー(v)の三文字は外國語をあらはす時にのみ用ふる字である故、英語のまゝで原字の名としておく、さて拙案のアルファベットの讀み方によると、クアkaカ、クイkiキ、クウkuク、クエkeケ、クオkoコとよみつゝ綴る事が出來る。cをチと讀ませるのは、ca, ci, cu, ce, co 又は cha, chi, chu, che, cho をチャ、チ　チュ、チェ、チョと綴り、hをホと讀ませるのは、ホアhaハ、ホイhiヒ、ホエheヘ、ホオhoホと綴るためである。又wをワとよませたのは、母語のu

でなく子音の唇音 wa を示し、yをヤとよませたのは、母音 i でなく、子音の舌身音 ya, yu, yo を示すつもりである。

uはヌとよませ、ヌアnaナ、ヌイniニ、ヌエneネ、ヌオnoノなどよませると同時に、語尾ではクアン kan カン、プアン pan パン、プエン pen ペンなどと讀ませるつもりである。又濁音ではグアgaガ、ズアzaザ、ドアdaダ、ブアbaバ、ジイjiジなど讀ませるつもりである。かくしておけば、アルファベットの名前とその發音と一致してゐる故、歐洲語のやうに一のアルファベット文字に數種の發音があるやうな不便がなくて甚だ簡便である。又xを採用したのは、日本語殊に口語に澤山ある重語をうつす略號として用ひたいとおもふ故である。例へば、Ono-ono=ono-x　shiba-shiba=shiba-x　kurikaeshi-kurikaeshi=kurikaeshi-x　として、xの文字の前にある綴はそのまゝ繰返す書法の便利を與へたいとおもふ。假名で書くと『〳〵』の如き符號字を用ふる便があるけれども、ローマ字綴にはまだこんな便利な符號が發明されない故、日本語には不必要として退けられてをるx(即ち數學上未知數として用ひられてゐるもの)をその『〳〵』に當るものにしたいと思ふ。又書き方の上で『こゝろごころ』など連濁の

重語になる場合は、x の上にウムラウトの符號を用ひ、これを日本假名の濁音にかよはせて連濁にすればよろしい。例へば kokorogokoro=kokoro-ẍ tokodokoro=tokoro-ẍ と書くのである。このx文字は、日本語に多い重語を一々ローマ字で書く事の不便を防くための符號と定めたいのである。但しこれも筆寫の上の略字で、辭書などには、いくら面倒でも同じ綴をくりかへしておくのである。

ローマ字綴の語中の母音字を省くことの出來ないのは、ローマ字で國語の辭書交典を作る時の混雜を來たすのを防ぐためである。けれども、最終の語尾の或母音、即ち前に述べた如き或語に於けるuとiとを省いても、辭書文典の上には敢て混亂を來たさないやうに、xを語尾に用ひて本語を略するだけの書寫上の便宜は設けておきたい。殊にタイプライター使用上からも必要である。

さて前にも述べたエスペラントといふ世界語で採用したローマ字は、舊來のアルファベットから見ると、qとwとxとyの四字を減じて、二十二字としてをる。即ち左の如く、

	(字名)	(發音)
a	a	a long (pate)
b	bo	b (bal)
c	co	ts (tsar)
ĉ	ĉo	tch (tchéque)
d	do	d (dent)
e	e	é (fermé, été)
f	fo	f (our)
g	go	g dur (gaut)
ĝ	ĝo	dj (adjudant)
h	ho	h gutt. (all.d doch)
i	i	i (île)
j	jo	y, ï (yeux, eie)
ĵ	ĵo	ĵ (jour)
k	ko	k (képi)
l	lo	l (la)
m	mo	m (ma)
n	no	n (non)
o	o	o long (côte)
p	po	p (pas)
r	ro	r (rire)
s	so	s sifflaut (sur)
ŝ	ŝo	ch (chat)
t	to	t (ton)
u	u	ou bref. (voûte)
ŭ	ŭo	ou bref. (Raoul)
v	vo	v (voter)
z	zo	z doux (zéro)

(1903 年版 Francais-Esperanto に據る)

即ちエスペラントによると、アルファベットの原字の讀み方はaiueoをアイウエオと讀み、他は皆オ韻をつけて呼ぶことは、拙案でなるべくウ韻によませやうとしたのと傾向を均しくしてをる。さてこのエスペラントを日本の羅馬字に比べて見ると、日本にはwとyとが入用で、lとvとが不用であるのに、エスペラントでは反對である。而してqとxとが不用である事は、相一致してをる。統計の上でエスペラントのアルファベットは二十二字、日本のローマ字も二十二字ですむ。(但し重語を書く場合にxを用ふれば二十三字となる)ともかく、ローマ字は唯單に二十二文字でありとあらゆる言語聲音が書ける上に、その字形はもはやいかなる賢人智者が出ても改良する事が出來ないほどに發達の絶頂に達したのであるから、もし日本國民がローマ字を採用する事になれば、これに過ぎたる便利はない。

また實に日本國語日本國家の爲に一大幸福であるといはねばならぬ。歐米の文明を吸收して、更に彼等を凌駕しようとする大日本國民が、漢字を廢してこの便利なローマ字を採用しないといふいはれがない。世界第一の强兵國といはれた露國を粉碎して、世界國民の膽を寒からしめ、遂に世界第一の武勇國たる名譽を擔

うた大日本國民が、將に世界に向つて一大飛躍を試みようといふ時代になつて、このローマ字を採用しないといふいはれがない。實に日本人がローマ字を國字として採用するやうになれば、武において世界第一の名譽を得たとひとしく、文においても世界第一の名譽を擔ふことであらう。今は急にさうはまゐらぬにした所で、近き將來において、必ずかうあるべきものであるといふ事は、決して空想ではないのである。これは實に學理の上で爭ふ事が出來ない。

しかし羅馬字を國字とするには、學理の上ばかりでこれが實地の問題となるわけのものではない故、まづ國民の感情をこのローマ字の上に集めねばならぬ。即ちローマ字は決して外國のものでなく、日本のものとしてこれを使用すべき性質のものであることが知れるやうにするために、小學讀本からしてローマ字を教へる方針をとらうとする建議案などは至極結構の事といはねばならぬ。但し假名文字はこれが爲めに全廢するに及ばぬ。假名文字は全く日本人の發明で、その簡明な點は世界に向つて誇るに足る丈けの價値もあり、又和歌俳諧など文字美を具有すべき記載物は、やはりこの假名文字を用ひてよろしい。又電信用盲啞用にこ

の假名文字を用ふるのは、特殊用の文字として貴重なものである故、この便宜な利點は以て外人に敎へるに足りる丈けのねうちがある。それ故ローマ字を普通一般の國字とするやうになつても、假名文字わけて縱書毛筆書きの平假名文字などは、永く〳〵保存しておいて、國家の古文書をこの假名文字の倉に藏めておくがよからう。

余は將來永遠日本國家のために、ローマ字を以て普通一般の國字と定めたいとおもふが、しかしこれと同時に假名文字を滅ぼさうとはつゆも思はぬ。假名文字は特殊用の文字として永く保存されて、更に差支がないのみならず、又國家の歷史上これを保存せねばならぬ義務があると思ふ。要は漢字は本家の支那人へ返へしてしまつて、國家の獨立を標榜する爲めに假名文字ばかりを以て綴られた國文が續出することを望む。而して一方では世界的に通俗的にローマ字が國民一般の國字となつて、自由自在に採用されるといふ事になりたいものである。一國民として一種の文字しか用ひてはならぬといふわけもなし、又二種の文字を併用しても、國字と特殊用字とに分れてさへおれば、決して國字を紊すものではない。大

國民たる大日本國民は、現に世界最難の漢字を用ひてをる上に、歐米諸國語をさへ習得して、かれらの文明を吸收する丈けの大智能を有してをるからには、假名字とローマ字と二種ぐらゐ使ひわけるのは、何でもない事であらう。

さて漢字といふものは果して廢すべきものとすれば、假名專用が果して漢字を放逐するほどの勢力があらうかどうか、甚だ覺束ない。假名專用になると、何となく漢字が書きたくなるが、ローマ字を用ふると、どうしても漢字を挿入することが絕對的に出來ない故、もし唯單に漢字放逐の先鋒として、いかなる音韻文字を用ふべきかといはゞ、ローマ字を用ふることが一番有効であらう。要は唯いかにして日本國民に深く〳〵しみこんだ漢字をとりのけて、早く音韻時代にすべきかといふことが、學者敎育家たるものゝ責任であり義務でなければならぬ。

第十章　結論

本書は今や世界文字及特殊用文字もしくは漢字假名ローマ字について、その利害得失を論じ、音韻文字採用が日本國語の發展の爲に、最大急務であることを論せ

ねばならない時機に達したのである。即ち世界文字學が敎示する所に從て、日本國家の國字を論定すべき場合に立ち至つたのである。その論旨を明瞭ならしめる爲め、箇條書として說くことにしよう。

一　漢字が支那で作られた理由

支那語は單音語である故、これを發音するには、四聲の別を立てゝ混同を防いでをるのであるから、これを音字で書くと、殆どその區別が出來なくなる。それ故漢字のやうな意字の發明が餘儀無くされたのである。支那史の上で、梵語が佛學と共に輸入されて、漢字音にも反切といふことが起り、音字採用の機會が與へられたに關らず、遂に音字を作ることが出來なかつたのは、支那單音語の性質上、實に仕方のないことである。一時元の蒙古が音字を支那國に推しつけたけれども、如上の理由で、どうすることも出來なかつた。それ故滔々幾千年の間、遂に支那語は漢字と緣を切ることが出來なかつたのだ。將來永遠、支那語がその單音語族を脫するのでなければ、漢字はどうしても支那から取り去ることは出來ない。

二　日本は何故に漢字を採用したか

日本語は單音語でないのに、何故漢字が採用されたかを怪むものもあるけれども、日本語の中には、よほど單音語の性質をもつてをるものがある。即はちア(吾、彼)イ(寢、五、接頭語)ウ(卯、兎、鵜、憂、得)エ(柄、兄、江、胞、枝)キ(木、黃、酒、城、氣)ケ(毛、食、褻、笥、故、蹴、消)コ(子、粉、籠、是、濃)ス(巢、簀、洲、酢、爲、令)セ(脊、瀨、兄、令)ソ(衣、麻、脊、其)等の語をはじめ、其他五十音圖に照らして見ると、單音語が大分ある。これに助詞の『テ、ニ、ヲ、ハ、ノ、ガ、ヘ、ト』等の單音語が毎語の下にあらはれ、又助動詞の『ツ、ヌ、リ、(現在完了)キ、シ(過去)セ、ス(使役)』等の單音語が文中にあらはれることになるので、折角假名といふ音字を發明しても、なほ意字の借用を止めることが出來なかつたのだ。この單音語が、音字の發明の際、ローマ字的でない假名文字採用を餘儀なくさせた一大原因であつたことも、亦忘れてはならぬ。

之より更に大なる理由は、過去の日本人は支那崇拜漢字崇拜であつたから、いかにしても假名專用を强行することが出來なかつた。かくする中、漢字音を漢字と共に輸入したので愈以て音字ではわからなくなる所から、到頭漢字國となつてしまつたのである。いはゞ支那ハイカラが漢字を弄んだ結果、漢字と日本語とは離

すべからざる歴史的關係を有してきたのである。蒙古人が蒙古文字を作り、朝鮮人が諺文を作り、漢字を放逐したのに、日本人はその蒙古朝鮮と同語族でありながら、而して彼等よりも優等人種を以て誇りながら、假名文字を獨立させることの出來なかつたのは、唯單に日本語中の單音語が漢字を迎へるに便があつたといふ理由ばかりでなく、主として支那崇拜漢字崇拜が遂に漢字を歡迎することになつたのである。

三 西洋人は何故ローマ字を用ひたか

世には、支那人は漢字を發明して、遂に漢字の爲に國が衰へ、西洋人はローマ字を用ひて國が榮えたやうにいふものがある、西洋の學者も往々この誤謬を傳へて得々としてゐるが、甚だ淺薄の論である。支那人は單音語族だから、意字でなければその意味を記錄に殘しておくことが出來なかつた故に、必要上餘儀なく漢字を作つたのだ。これと反對の理で、西洋語は單音語でないから、意字を考へる機會もなく、又必要もなかつたのだ。それ故ローマ字を採用して、更に差支がなく、今日にまで及んだのである。

天竺の梵字、亞剌比亞のアラビア文字、西藏のチベット文字、蒙古の蒙古字、朝鮮の諺文字など、皆それ〴〵その國語をうつす必要の上から、音字を採つたので、國語の本質が意字に適しなかつたことを證明するものである。わが日本もこの中に列して、音字國となることが出來たのに、それが出來なかつたのは、何か別に理由がなければならぬ。

四 日本は何故意字と音字を併用したか

文字學上から、意字と音字とを併用するくらゐ不合理なことはない。しかし日本語の一部は意字に適し、一部は音字に適するといふ兩面の性質をもつてゐるから仕方がない。尖齒と臼齒とを併有してゐる動物は、植物性と動物性との二種の食物を取らなければならないのと同じわけである。それ故幾ら日本人が支那崇拜であつた時でも、音字は唯支那ハイカラ學者の弄び物で、國民にこれを强ひることは出來なかつた。そこで假名交り文もしくは漢字交り文といふものが、遂に日本の綴字法を形作つたのであるが、これは決して偶然ではない。日本國語の性質は一面において支那語族に似てゐる所があつて、他面において西洋語のやうな所

があつて、遂に意字と音字と兩方併用せねばならない羽目になつたのだ。しかも單語においては多くの漢語を輸入し、文脈においては全く支那漢文と異つた加添語で、その上に曲折語族に似た所の語尾變化をもつてゐるので、愈以て漢字と假名との併用は餘儀なくされたのである。

五　文字の變遷は國語の變遷と伴ふ

日本語は古代において、比較的單音語に近かつた時には、漢字ばかりを輸入しても、さほど差支はなかつた。しかし平安朝になつて、漢語輸入の盛大なるに關はらず、國語の助詞助動詞が發達して、漢字で書けない部分が出來た爲に、假名交り文は女文學者の手で大に發達してきた。即ち漢字輸入は日本文字史上の第一期で、假名文字發明はその第二期である。それ以後全く文字史上に革命がなく、明治の今日にまで及んできた。

日本國語の文脈はどんなに漢文が肉迫しても崩れなかつたけれども、漢語の輸入は殆ど國語の城壁を陷れた感がある。殊に明治維新以來、新文明と共に新漢語は數萬言作られてきた。名詞ばかりが漢字であるならばまだしも、その漢語名詞

を佐行變格に活かせて動詞とする便を以てをる故に、今日教育ある人は、殆ど漢語を廢しては一言一句も綴ることが出來ない有樣となつた。この際漢字といふものがなかつたら、固有の國語で新造語が出來たらうと悔んでみても仕方がない。故にもし日本國語は唯この儘でとゞまつてゐるものとすれば、音字採用は全く空論である。

日本は由來大陸の政治的支配は受けなかつたけれども、大陸の感化を受け、大陸の影響を受け、制度文物すべて大陸的に模倣する歷史をもつてをる。隋唐の盛な頃に、その影響を受けて固有の國語の發達を妨げるまでに數万の漢語を作た國民が、俄に歐米の新文物に接して、世界の舞台に上つたので、更に又歐米の國語を輸入しないでは居られない事情となつたのだ。之は假名文字發明以來の文字史上の革命期である。

六　洋語の輸入は漢字で書きゝれぬ

唐代以來、その文物と共に巨多の漢語を輸入したやうに、歐米大陸の文物は、亦その語をも併せてわが國に輸入するやうになつた。歐米の人名地名は、殆ど漢字で

は書きゝれない、又西洋料理品、西洋小間物品、各種の器械工業品など、洋語のまゝで輸入し、之を轉訛して國語としたものは、到底一々漢字を宛ておほせることが出來ない。

そこで、假名文字が大に入用になつてきた。今日多く我等が使つてをる洋語は、大抵片假名で書いてをる。殊にあまり必要でもないのに、洋語を用ひて氣取るといふ傾向も出來たのは、日本國語をうつす文字の上に、革命を促すものである。

例へば旅館といふよりも、ホテルといふ方が何となく壯大で文明的らしく思はれる。麥酒屋牛乳屋といふよりも、ビーヤホール、ミルクホールといふ方が適切である。寶丹、清心丹、仁丹などいふよりもゼムといつた方が、新藥で效能が多くありさうに思はれる。ペレスト洗粉、ライオン齒磨、クィーン白粉などいふものが、數限りなくあらはれてくるが、これを漢字に改めて、清潔洗粉、獅子齒磨、女王白粉としては、いかにも蠻カラじみて舊臭く、效能も極めて薄いやうに思はれる。さりとてプレスト、ライオン、クィーンを萬葉假名の漢字に改める勇氣もないのだ。つまり洋語が流行してくると、漢字は漸次に退却せねばならぬ。

消化藥にタカヂヤスターゼといふのがある。そのタカは發明者高峰博士のタカをとつたのであるが、之を漢字で寫すことは、全く不可能であると同時に、世界萬國に擴める上から、タカの文字はローマ字が用ひられねばならなくなつた。

如上の傾向は、日に月に進んでくるので、漢字よりも假名文字がどんなに尊いものであるかゝよく知れ、それと同時に、假名よりもローマ字が世界的であるとの考を起すやうになつてきた。これで、日本國は、假名文字發明以來、國字改定の革命期に及んできたことが知れよう。

七　口語の發達は漢字を退ける

漢文くづしの文語文であれば、漢字は最も入用であるが、口語文でかくと、その口語を一々漢字に宛てゝ書けないので、自然假名が多くなつてくる。小說家などで、頻に漢字を弄んで、いろ〳〵な漢字を作り、それに口語の振假名をつけてゐるのは、漢字の意義と合せて、文趣を深からしめる考であるけれども、これとても、口語の發展と平行して、一々これを漢字に譯することが出來なくなつてくる。

今後の敎育では、『ざるべからず』を敎へる代りに、『せんけりやならん』『せねば

ならぬ』『せにやならぬ』『さなければならぬ』『さねばならぬ』などいふ多くの方言を排して、『しなければならない』また『せねばならぬ』といふ標準語を敎へることになるのであるが、こゝになると、漢字は殆ど用をなさない。

漢字の最も少ない和文もいゝけれども、これは古文で、普通敎育からは遠ざけられる。漢字の多い近頃の時文が口語文に改つて、漢字が次第〳〵に減つて、國語敎育はこゝに長足の進歩をするのだ。しかし假名專用は前に述べたやうに、漢字と全く絶緣することが出來ないから、音字採用の時代に進めば、どうしてもローマ字が勝つことになる。

八 固有の國語が發達する

前の五、六に述べた理由で、漢字が退けられると同時に、耳で聞いてすぐわかる國語が發達してくる途には、勢必ず國訓が多く用ひられ、同音字の多き漢字熟語は、なるたけ避けて用ひられなくなる。

そこで、漢字のために久しく〳〵縮みかゞまつてゐた日本固有の國語は、大に發展してくる。漢字を書かなくても、耳で聞いてわかる語であれば、假名で書かうと、

ローマ字で書かうと、はた又梵字蒙古字で書かうと、國語の發展においては何等の差障がない。

前の五で述べたやうに、一面では洋語輸入が盛で、ハイカラ的國語が作られると同時に、他面では國語を主張するものが必ずあらはれてくる。即ち洋語輸入に對して、爾來漢譯したのをば、今度は固有の國語で作らうと考へるやうになつてくる。明治維新以來わが日本國は、あらゆる方面の新建設に忙しかつた爲に、漢語ばかりで造語し、國語の考はなかつたが、國民に餘裕が出來、國家が獨立の體面を保つ必要から、國語造語說は必ず一大勢力を以てあらはれてくる。

世には唯ハイカラとのみ思はれてゐるローマ字ひろめ會が、漢語排斥の必然的結果として、國語造語說に傾き、却て愛國語家と自惚れてゐる國文學者よりも、更に國語のために忠義を盡すことにならう。

九 假名は獨立する價がない

本書第八章新國字、及第九章假名と羅馬字の條で述べたやうに、假名は漢字と相待て用をなす爲に發達したものである故に、獨立しては音字の形體がまとまらな

い。これをまとまるやうに改作すると、新國字となるので、遂に國民に用ひられないことになる。

往年漢字排斥の盛んな時代に、假名は漢字と同居してゐたのであるが、もはや別家して一家を構へてもよろしいといふやうな說が行はれた。その所說は國語改良意見といふ書に、今も殘つてゐるが、さてよく考へて見るに、假名專用は極幼稚な小學讀本や、子供のポンチ本などにばかり用ひられるもので、少しく進んでくると、漢字を交ぜて書きたくなる。それは唯習慣の勢ばかりでなく、假名字形が分書式では一語とまとまらないといふ根本的の障礙があるからである。

そこで、音字採用の時代には、假名はローマ字にその席を讓らなければならない。ローマ字で書けば、いや應なしに分書式に書かれ、單語と單語とが別々にまとまつた形をなすやうになるから、愈採用するとなれば、わけもなく行はれることにならう。

一〇　假名交り文は永久に殘る

前の四及び五に述べた理由で、今迄の日本國語には漢字といふ意字と、假名といふ音字とを併用するのが最も便利である。今日の今日まで、この假名交り文否漢字交り文が日本の綴字法と定つてゐるから、之を急に古文書とすることは、事實出來ないことである。

たとひローマ字採用の時代になつても、日本國民は過去の文學を棄てるわけにゆかないから、漢字交り文は未來永劫敎育ある國民の學ぶべきものである。唯この漢字交り文は、敢て書き習ふに及はず、唯讀めればいゝといふやうになるのだ。

そこで普通敎育ではまづ假名を敎へ次に總振假名付の漢字交り文を讀むことを敎へ、終に振假名を取つた文章が讀めて、その意義が解せられるやうにしてやればよろしいのだ。餘裕さへあれば、これを書き綴ることも敎へて、敢て差支ない。しかしこれはむしろ中等敎育以上に望むべきことで、國民一般には、それまでの必要を認めない。

今日我等の書いてをる漢字交り文は、天壤無究に傳つて、永久に存在することは疑ない。殊に國語學者は大にこれを保存せねばならぬ義務がある。しかし國民一般を學者にする必要がないから、學者の立場からばかり見て、漢字交り文ばかり

を國字として、動かしてならぬといふことは、不合理である。

一一　文字は學者の專用物でない

目に一丁字のないものでも、國語は話せる。その話せる國語を音字で綴つたものは、國語國文としなければ、文字が國民一般のものとなるわけにゆかぬ。

假名文字はその點において、實に一般の國字で、老人も子供も下婢も下男も、一樣にその文字の恩與に浴するのである。所で漢字といふものになると、よほどの歲月を敎育に費さなくては、使用が出來ないものである故に、文字は學者の專用物となつてしまふ。支那が文化におくれ、普通敎育が施されなくて困つてゐるのは、全くこの故である。日本が幸にこの害毒にかゝらなかつたのは、偏に假名の賜であるといはねばならぬ。

それ故、今後漢字交り文を使用する人は、なるたけ振假名をつけておく必要がある。現在車夫が新聞を讀み下女が小說を讀むことが出來るのは、振假名の御かげである。これが社會敎育國民敎育の上に、偉大な效果を奏してゐることはいふまでもない。

振假名でさへも、如上の功績をあげるのだから、もしローマ字二十二だけ憶えさへすれば、何でも自分の思ふことが書け、又どんな書物でも讀めるといふやうになれば、國民は悉く皆國字の恩惠に俗して、大活動大飛躍をする上において、歐米を凌駕することが出來る。

一二　多忙な社會は漢字學習の暇を與へない

漢字は無論意字としては、世界第一等の發明で、又長く〳〵日本國民の用をなし來つたのである故、これを學習するだけの暇があれば、憶えておくのが宜しい。しかし多忙な世界に立て働かなければならない國民は、唯漢字を覺えるばかりに多くの時間を費すことが出來ない。

歐米では、ローマ字を書くさへも面倒がつて、タイプライターやライノタイプを盛に使用することになつてきた。賢明な日本人が、いつまでもこの便利な器械を使用しないでをるわけはない。現に假名文字のタイプライターが造られてゐる位であるから、ローマ字採用の時代に切迫してきたのである。

日本も世界列國の中に立てゐる以上は、世界經濟の支配を受けないではをらぬ。

文字美を弄び、悠々閑々と漢字を書いてゐる暇がなくなつてくるのは、必然の勢だ。むしろ學者的趣味からいへば、殺風景な世界となつてゆくのだが、この世界の大勢はどうすることも出來ない。

そこで、普通一般にはローマ字で國語を綴り、直にタイプライターを使用して、相互の用を便ずるといふことになつてくるのである。換言すれば、文字は唯ほんの器械的のもので、言語の符諜に過ぎないことゝなつてしまふ。

さうなると、學者や金持は、道樂として漢字や假名を愛玩することになるので、漢字假名は今日よりも更に尊いものとなるのだ。漢字假名保存論者は十分安心してよろしい。

一三　日本人は暫く漢字假名羅馬字の併用時代を經ねばならない

ローマ字論者の中には、漢字假名を全く撲滅してローマ字とするのだと思ふ人もあるやうだが、それは決して出來ない、又よし出來るにしても、甚だよくない。

たとへていへば、日本風の家屋から洋館に遷るやうなもので、まだ洋館が出來ないに、日本の家屋を破壞してしまつては、雨露にさらされる不幸を見なければならない。日本室では日本服が適するけれども、洋室には不便だ。今の日本人が洋服と和服と下駄と靴とを併用するやうに、漢字假名とローマ字と二三の國字を用ひるのは、敢て不思議でもない。日本造の家に應接室、書齋を洋館で造り添へるやうに、舊來の國字とローマ字が併び行はれるのは、蓋し必然の勢であるのだ。

或意味からいへば、舊來の國字とローマ字と、兩刀使であるのは、世界國民の中で最も優等なものであるのだ。意字として最優等の漢字と、音字として最優等なローマ字を綴音字として最優等な假名と、三つ使用すれば、三刀使であるのだが、漢字と假名とは、一つの舊日本國字として離されない故に、つまり大か小かの一刀に價するローマ字は、全然左手に持つ刀と、右手に持つ刀と違ふやうに、別な刀である故に、漢字假名、ローマ字併用は兩刀使である。

しかし兩刀使は、一刀に精力を止めて振りまはすに及ぶことは出來ない。それ故二樣の國字を使ふ國民は、遂に一樣の國字を使ふやうになるのであるが、こゝ暫くの間は、兩刀使で働かなければならない。

兩刀使といふと、非常に骨が折れるやうに思はれるが、決してさうではない。こ

の譬はむしろ不適當かも知れぬ。漢字を覺えるには骨が折れるけれども、ローマ字は假名よりも覺え易いから、別に修業といふほどの勞力は入らない。又漢字も總振假名にすれば、讀むだけの勞で書くことは習らはなくてもいゝとなれば、これにも大した骨折はないのだ。

こんな具合で、漢字は讀むためのもの、ローマ字は書くためのものとなる時代が來る。その後で、讀むにも書くにも、ローマ字ばかりで、普通一般の國民は、教育の義務がすむやうになるのだ。

一四一　羅馬字文は別途の發達を要す。

漢字漢語が廢れてしまつてから、ローマ字時代が來るとおもふのは誤だ。漢字は假名といふ從者を率ゐて、あひかはらず殘つてをる中で、或は假名專用派も大に氣焰を高めてくるかも知れないが、畢竟事實問題としてあらはれる折はなからう。漢字制限論や、漢字振假名說は愈ます〳〵盛になつてこよう。之に反して、漢字不可廢論も一部分では盛に唱へられるであらう。

ローマ字文は、世論のいかんに拘はらず、新帝國語標準語を作り出すことに向て

全力を傾け、まづローマ字文典を作り、ローマ字辭書を作り、之に因て多くのローマ字出版物をなし、全く別途の發達をしなければならない。

文語文は漢字交り文として、過去の文學に屬し、長く國文學史上に殘るから、之を改作し改良するには及ばぬ、唯そのまゝに放棄しておけばよろしい。唯標準口語が漢字交り文で書かれたものだけを、ローマ文に書き代へればよろしいのだ。文語文までもローマ文で綴る必要はない。古書をローマ文に翻譯する時代が來た時にも、口語文に翻譯する位でよろしい。古書そのものを讀まうと思ふ人は、必ず漢字を學習するのである。これらの學者に向て、ローマ字を强ひる必要はない。ローマ字はたゞ學者ばかりのものとしないで、國民一般の口語をうつすための輕便な國字として日本人一般に採用されるやうに、健全な發達を遂げねばならない。

舊ローマ字會が、文語までもうつさうとして失敗したのは、むしろ當然である。今のローマ字ひろめ會が、一切口語文を採ることにしたのは、一の進步である。ローマ字文は決してそれ以上に多きを貪つてはならぬ。過去及現在の文語文の漢字、殊に漢字の趣味をもたせた文學を、ローマ字文にすることは出來ない。又漢字

を見なければわからぬ學術語を用ふる科學上の文章も、直にローマ字にうつすことは出來ない。唯ローマ字の利點とする所は、まづ商買人や職工が、少しも漢字を知らないでも、ローマ字で日本語の手紙も書け、相互の用が便ずる所にまで漕きつけるのが、第一の成功だ。次に漢字のよめないものに、ローマ字新聞ローマ字雜誌をよませて、かれらに生活上必要な知識を普く賦與することが出來るのが第二の成効だ。ローマ字は下等な字だ職工文字だと漢字學者から笑はれるやうになれば、むしろローマ字の成効期である。

苟も中等教育を受けたものは、男も女もローマ字のよめないものはないから、ローマ字の出版物が流行するやうになれば、ローマ字が國字となるのは、手の裏をかへすやうに早く成効することが出來る。和英辭書や和獨辭書をローマ字で引く時の便利な味を覺えた中等國民は、ローマ字で國語辭書が出來たら、潮の流れるやうに、その方面に注いでくるのは知れきつてをる。漢語字書もローマ字索引で引くやうにした方が遙に便利だ。

一五　今後國語教育の方針

漢字はこれを目で見て讀みうるまでには、教育しなければならないけれども、漢字が書けないといつてそれを責めつけるのはよろしくない。漢字が間違ふのを恥ぢるよりも、方言で話し、方言で文を作るのが大恥辱である。

今後の國語教育は、專ら標準口語で行はれるやうにしなければならぬ。書き綴る時は、すべて口語文でよろしい。文語文は唯讀み習ふ程度において教育されて澤山だ。和文や漢文を國語教育に施すのは、高等學校以上に於てすべきことで、漢字交りの時文だけで、中等教育の國語が完成されるやうにしなければならない。

漢字を早く讀みうる爲に、漢字教授法が研究されることは、目下の急務であるが、これと同時に無益な漢字の同訓異義語などを教へるのは、むしろ國語教育の賊である。最も國民が知らねばならない漢字熟語をえりぬいて、巧に教案を立てることも、國語教育者の責任であるが、漢文といふ外國文を授けることは、全廢しなければならぬ。漢字讀本といふものゝ中には、日本國語に必要な漢字熟語は殆ど無いのだ。その上反り點や、同訓異義語や、故事出典語を授けるのは、國語教育の上から見れば、全くの徒勞である。

候文や漢字草書體の文も、讀みうる程度に敎育するのは目下の處、必要であるけれども、必ずしもこれを巧に書き綴らせる爲に、生徒を苦めてはならぬ。從て固有の日本語で立派にいへる語があるのに、虛飾的な漢字を注入するのは甚だよろしくない。

中等敎育で國文學史中の美文を敎へるのはいゝことであるが、これを解釋する時は、立派な口語に翻譯させて、それをそのまゝ文に綴らせて答案とすればよい。作文も上級でばかり文語文を課し、一般には口語文の正しいものを書かせることで、作文の目的が達せられるやうにしなければならない。言ひ換へれば、思想を口語の上で練ることを主として、未だ嘗て知らない漢文口調の無益な熟語に骨を折らせないやうにしたい。即ち漢字漢語の爲に思想の發達を妨げないやうにしたい。これと同時に、一般國民の用語となつてしまつた漢字漢語は、なるべく多く國語讀本の上で敎へなければならない。今の中等敎育の國語讀本漢文讀本といふものは、あまり古典的で、國民須知の漢字が非常に少ない。時事新報の一日分ほどの語が、中學の五年を通じて國漢讀本十五冊の中に見られないのは、實に長大息の

至りではないか。

中等敎育の國語科の不進步は、あながち讀本編纂者の罪でもなからう。恐らくは高等學校の頑迷な國漢文試驗問題が、こんな編纂法を餘儀なくさせたかも知れぬ。或は中等敎育國漢文敎師が、眞に國語の意義を解しないために、こんな編纂を讀本屋にさせたのかも知れぬ。つまり小學の國語敎育は、大に面目を改めて來たのに、中等敎育高等敎育と一貫して、その敎育の方針が立つてゐない爲に、いろ〳〵な矛盾が起つてくる。要するにこんな矛盾は、敎育者の罪でなく、敎育施政者が負ふべき責であらうと思ふ。

しかし過渡の時代には、いろ〳〵な矛盾もあり、種々な障碍も起り、敎育者も被敎育者も、大に迷惑を蒙るのであるが、世界の大勢が向ふ所には敵し難い。その大勢は刻一刻追つてくる、その大勢を洞察して、迷ふ所なく、敎育を施さなければならない。

一六　目下焦眉の急務

苟も中等敎育をうけたものは、ローマ字綴は皆知つてをる。中等敎育をうけた

ものが、國民の中堅であるから、ローマ字を國字として採用することは、すでに出來てをる。これを初等教育に施すしても、一ヶ月の間に皆覺えてしまふことが出來るから、ローマ字採用といふことは、新に勞力を加へるのでも何でもない。

それよりも、目下焦眉の急務は、國語における漢字漢語の整理と、標準口語の規定である。余の考では、假名遣の如きはむしろ放棄して、おいて差支ない。耳で聞いてわからない國語は澤山あつて、漢字が必要であるとすれば、その漢字はいかに整理すべきものか、漢字がわからなくても、耳できいて意味がわかるやうにならねば、音韻文字採用といふことは、殆ど空想に終つてしまふ。又標準口語法が規定されない間は、方言が百出して、音字採用は國語の方言を直寫して、殆ど國民の思想を交換することが出來なくなる。又新造語が國語から作れないで、悉く漢字が作られなければならないとすれば、漢字は遂に棄てることが出來ない。明治年間に作られたあらゆる科學上の科學語が、漢字に因らないで解るのが幾何あらうか、この調査が出來なければ、ローマ文採用も、學問上では用ひられることが出來なからう。

そこで國民教育の上から、漢文中古文を除くことは出來ても、漢字だけは、學問す

る上から、どうしても學ばなければならないことになる。故に、ローマ字文が起つたとて、漢字は急に棄てることが出來ない、もしローマ字文で學問上のことを書けば、耳遠いその漢語は、括弧の中に入れて、漢字を書き添へておかなければならない。(本書第七章漢字の利第一、二條參照)

國語ばかりの和歌や、平易な口語ばかりで出來た文は、ローマ字に改めても、その意味がすぐわかる。又耳馴れて殆ど漢字を忘れた漢語の入つた文ならば、ローマ字で書いても差支ない。故に余は前にローマ字文は、初からあまりに多きを貪つてはならぬといつたのだ。ローマ字文は、口語文一點張で、平易な國語、普通一般の國語をうつす爲に、至極重寶であるが、今の處學問上には、ローマ字專用は駄目である。

故に、學問上では漢字を用ひ、普通一般ではローマ字でも用が足りるやうにするのが、目下採るべき方針である。かやうにローマ字は暫く學問から離れて、普通口語文の上に發達し、洋語を國語化し固有の國語を復活させ、漸次に漢語を排して、こゝに始めてローマ文が學問上にも用ひられる事になる。世にはローマ字が一足

飛に、學問界に進入するやうに思ふものもあるが、これは考が足りない。

目下の處、學問上に全くローマ字一式を採用することが出來ない位なら、ローマ字を賛成しなくてもよいといふ人もあらうが、これも亦考が足りないのだ。既に學問上の語を漢字漢語に作りかけた事實の上から、やむをえず漢字を學ぶけれども、この學習は將來永遠の國民に強ひたくはない、否目下の國民一般にも強ひたくはない。學問用と普通用と、その文字を別にしておいて、國語の發達と知識の收得とを容易にすることが必要である。

國民全般に向て學者になれといふことが不合理ならば、漢字を國民全般に強ひるのも不合理だ。人間生活の必要の上に、又國民一般の活動の上に、學問といふ學問、即ち漢字を要する學問は、あまりに必要でない。ローマ字文でわかるだけの範圍で、國民一般は足りるのだ。それ故ローマ字文が一方に起ることは、大に嘉すべきことゝいはねばならぬ。

漢字交り文とローマ字文が兩樣出來て、その生存競爭が世界の大勢の下に行はれ、ローマ字文が遂に國語となるまでには、漢語や洋語を吸收して、大日本國語の胃

の腑に、消化してしまはねばならぬ。世界の帝國語たるべき日本語は、實にかくの如くして、世界文字學史上に類のない意字と音字との溶化をなし遂げねばならないのである。西洋學者の文字を論ずるもの、我國の學者の文字を論ずるもの、いづれも皆局部の論で、むしろ近視眼的で、或は空理空想に流れ、或は事實を忘れて實行を顧みず、或は頑迷な感情論を唱へ、或は自己の便利から全般に說き及ぼし、或は過去のみを說いて將來を考へず、或は將來のみを夢想して過去と現在とを忘れ、その方法を論せず、その進行を說かず、漫に意字は絕對的惡字であるといひ、徒に音字のみを謳歌し、學者用、特殊用、普通用の文字の區別を說かず、文字は必ず一種なるべきものゝ如く說くのは、甚だ無責任で、深く思ひ遠く考へないから起る弊である。

空理は採るに足りないけれども、眞理はどうしてもまげることが出來ない。又事實はあくまでも事實であるので、理論で左右することが出來ない。凡そ文字言語といふものは、國民が意識しない間に默契されて、氣儘勝手に出來るもので、理論ばかりでも論じられない、事實ばかりでも推測することが出來ないものであることを知る人は、日本の國字問題が、世界文字學史上の一大問題であることを是認す

るであらう。而して余は日本の國字が一定する曉は、日本語は世界語となることを斷言して憚からないのである。

世界文字學をはり

明治四十一年一月二十日印刷
明治四十一年一月廿五日發行

世界文字學奥付

著者　高橋龍雄

發行者　森山章之亟　東京市神田區表神保町二番地

印刷者　大鳥居弃三　東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地

不復製許

定價壹圓五十錢

發兌

大賣捌所　東京文館　東京市神田區表神保町二番地　電本一五三九振替口座一三五

東京堂　東京市神田區

同文館　牛込區

同文館支店　早稲田

東京書房　韓國京城

東京文館

파2V91

文學博士　上田萬年先生序
國學院大學講師　高橋龍雄先生編

國定讀本　發音辭典

『國語界に於てなすべき多々あるが中にその發音を正しそのアクセントを定むべきことまた極めて必要なる事業に屬するは論を俟たず、こは既に學者が唱道し、研究し、しかも未だ實行にのぼすを敢てせざりし所なり。これ蓋し、古來文字を重んじて言語を顧みざりし結果にもあるべけれどまた他の一面に於ては、國語の多くが平聲にて、たとひアクセントを誤りても、彼此の間に通用して甚しき不便を感せざりし事と、また假名文字にてもアクセントを表示するに不便なりしが故とにも因るなるべし。されど、一たひ國語の統一標準語の規定に思ひ及ばゝ、遂にかくの如くして止むべきに非ず本書の出でたる亦遇然なりとせんや。』之れ博士上田萬年先生の序文一節にして、本書の出でし所以本書の國語教授上如何に大なる効益のあるか、本書を編するに多大の勞苦ありし等は推察するに難からざるべし、小學教育に從事せらるゝ諸君は勿論、一般教育に意を注げる諸氏は本書の必要なる諸君なり。